

イロE-12

80
43

祖 元



町服吳市京東
義 信 田 太

龍付一



太田道灌像

効能及定價

為物澤山注意あり

◎本方胃散 卅十錢 五十錢

○胃の痛み。むねのはり。腹のはり。苦き水をけき。過食。むねのやけ。下痢腹にしぶ。腹。船のそひ車のるひ。胸のやけるによし

◎加減胃散 金五十錢

一時飲食の爲めに發せし病に非ず慢性固結症に適當なる加減の妙劑にして藥力一層強し重病に用ひて特効あり

◎複方胃散 金五十錢

便秘。逆上。鬱心。耳鳴。黃疸。疝痛。熱風。胸疝。蛔虫に用て特能あり殊に癩癧等は冷水に解し用ゆれば胸を開き痛を去り即座に爽快を覺ゆる事神の如し

徳田道灌の肖像



太田道灌像

効能及定價

偽造者に注意せよ

◎本方胃散 卅十錢 五十錢

○胃の痛み。むねのけり。腹のけり。苦き水をけき。過食。むねのやけ。下痢腹にしぶ。腹。船のまひ車のあひ。胸のやけるによし。

◎加減胃散 金五十錢

一時飲食の爲めに發せし病に非ず慢性固結症に適當なる加減の妙劑にして藥力一層強し重病に用ひて特効あり。

◎複方胃散 金五十錢

便秘。逆上。鬱心。耳鳴。黄疸。疝癆。驚風。脾疳。蛔虫に用て特能あり殊に痙攣等には冷水に解し用ゆれば胸を開き痛を去り即座に爽快を覺ゆる事神の如し。

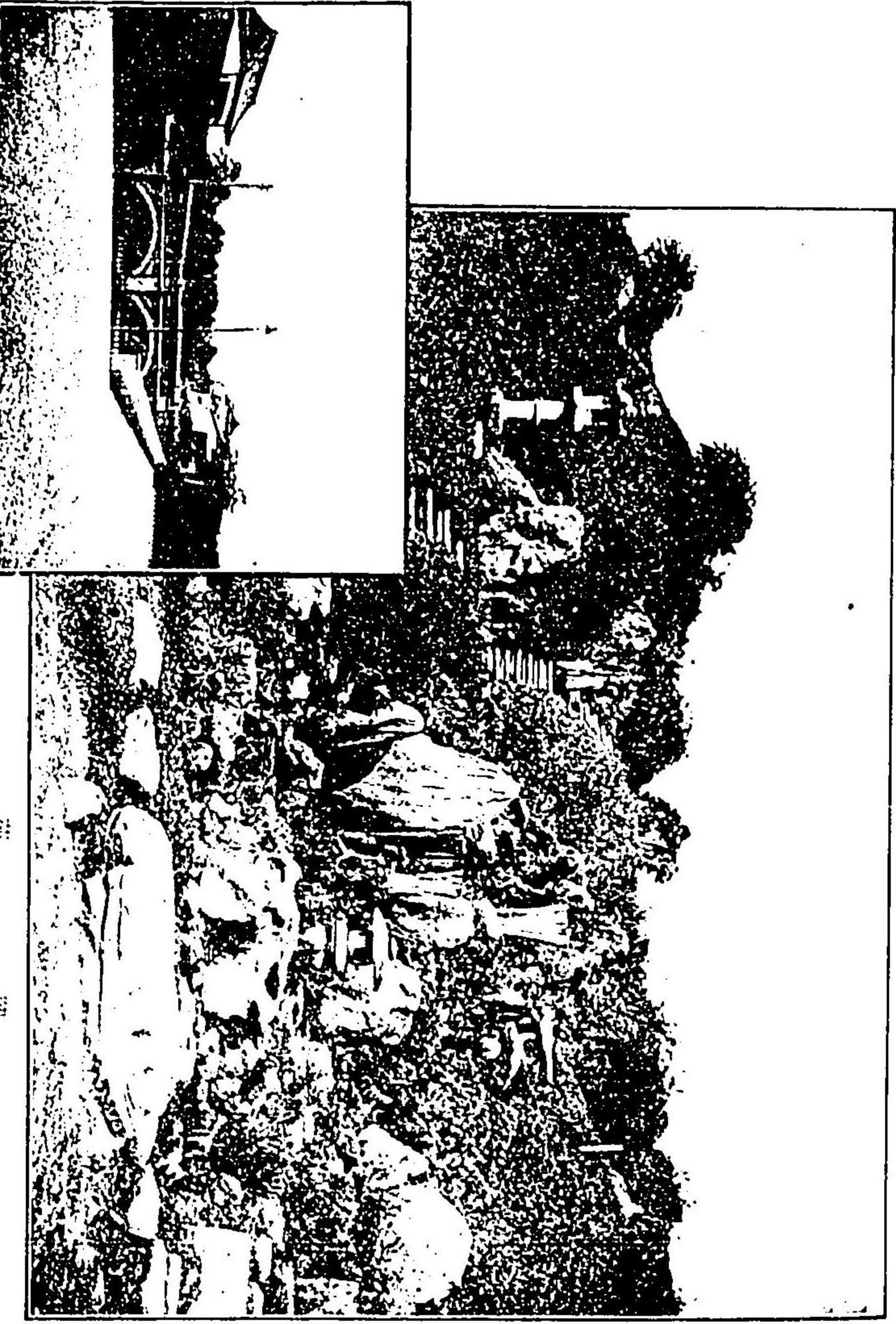


德川家康像



小川一真製

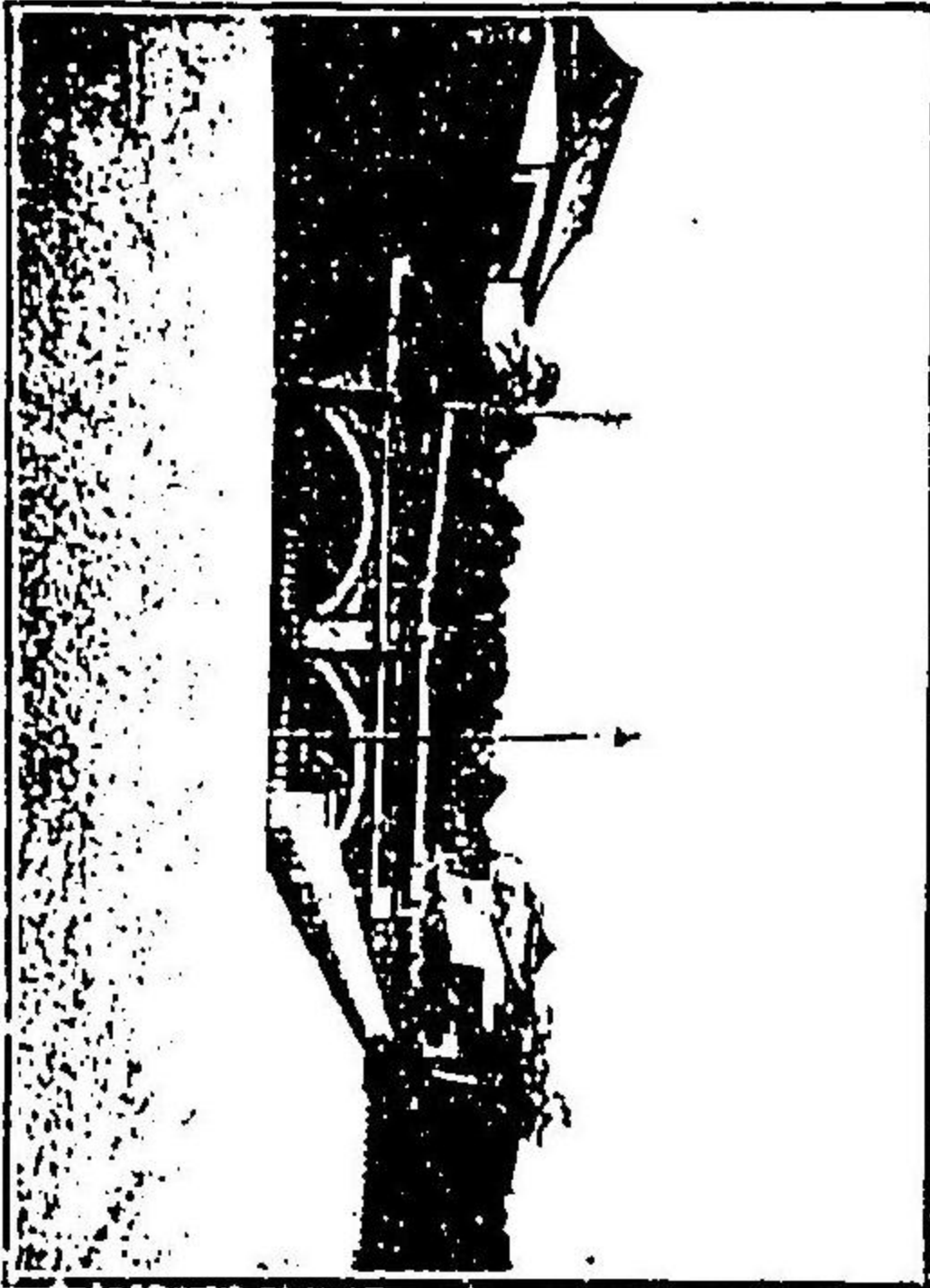
東都の花見 (中山古洞筆)



小川一城

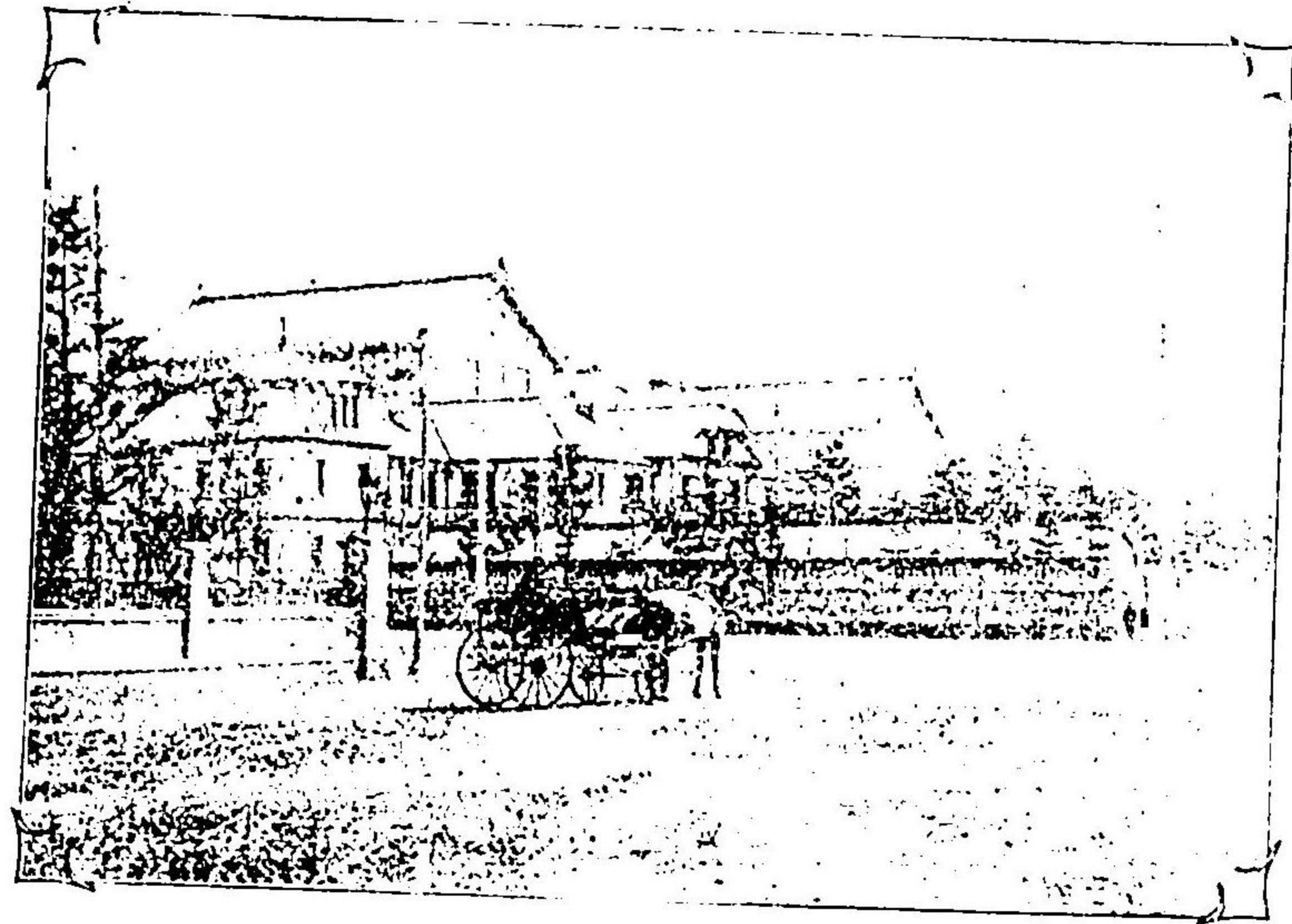
池田

宮城二重橋

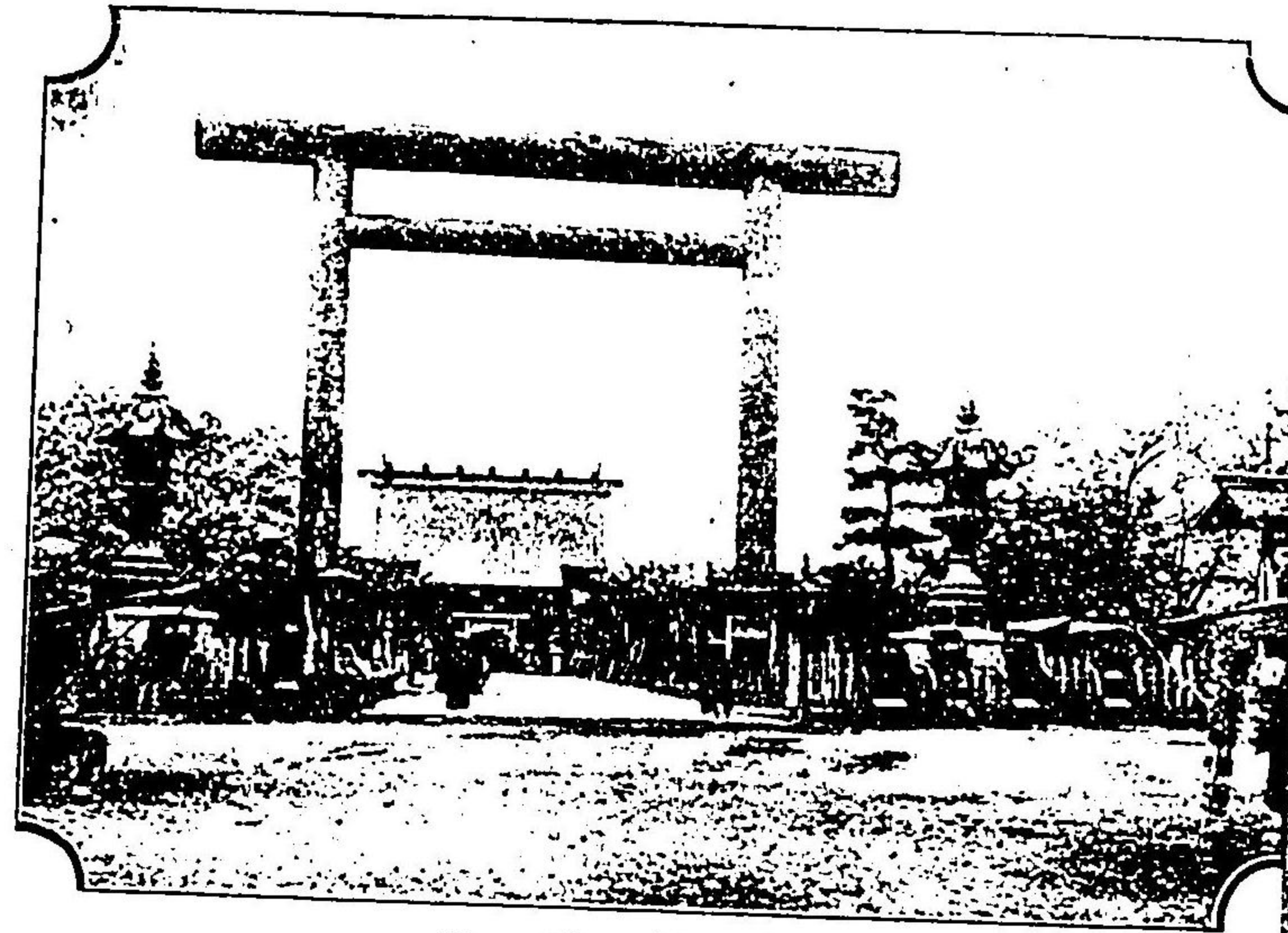




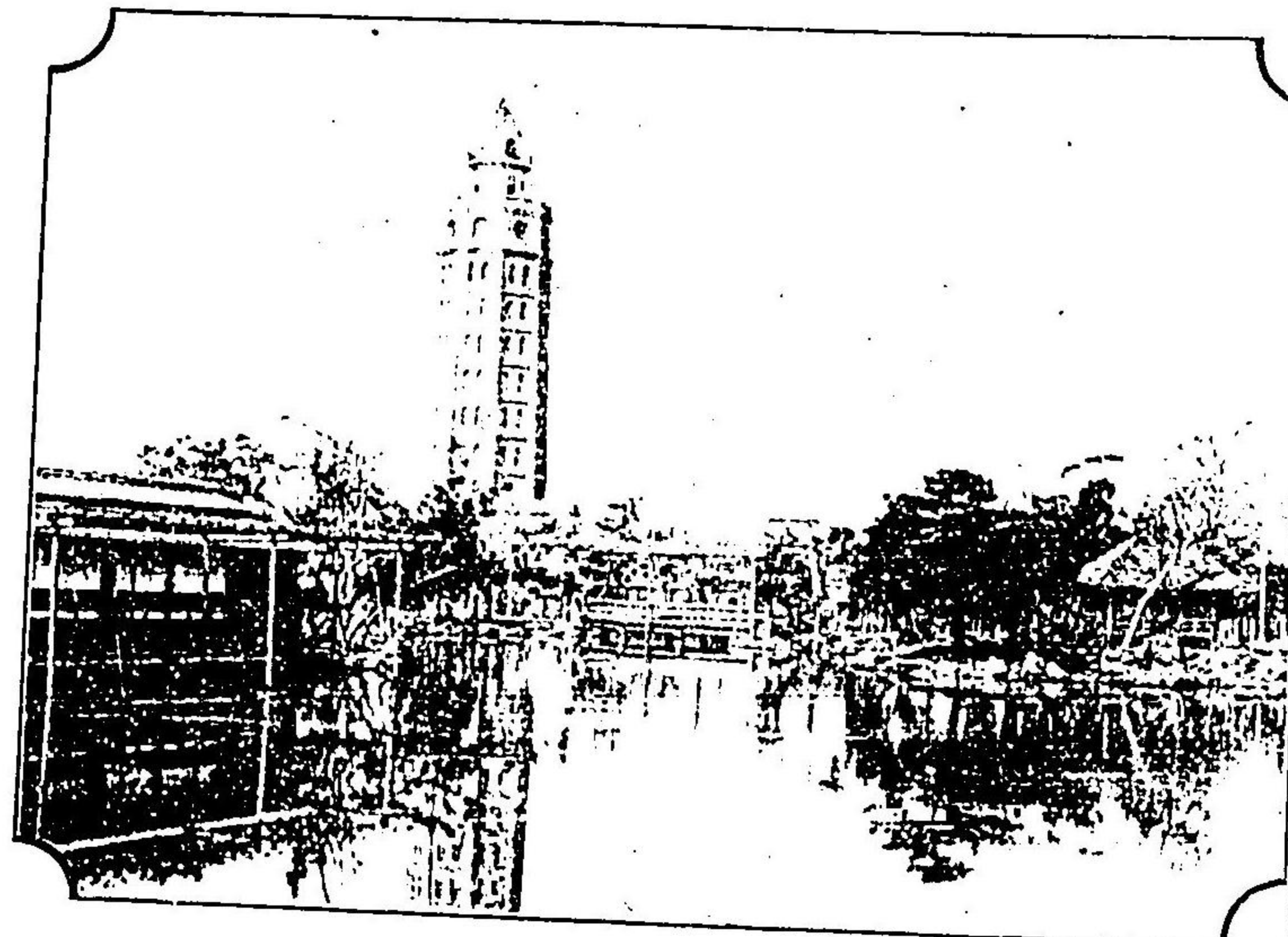
學 大 國 帝



會 議 國 帝



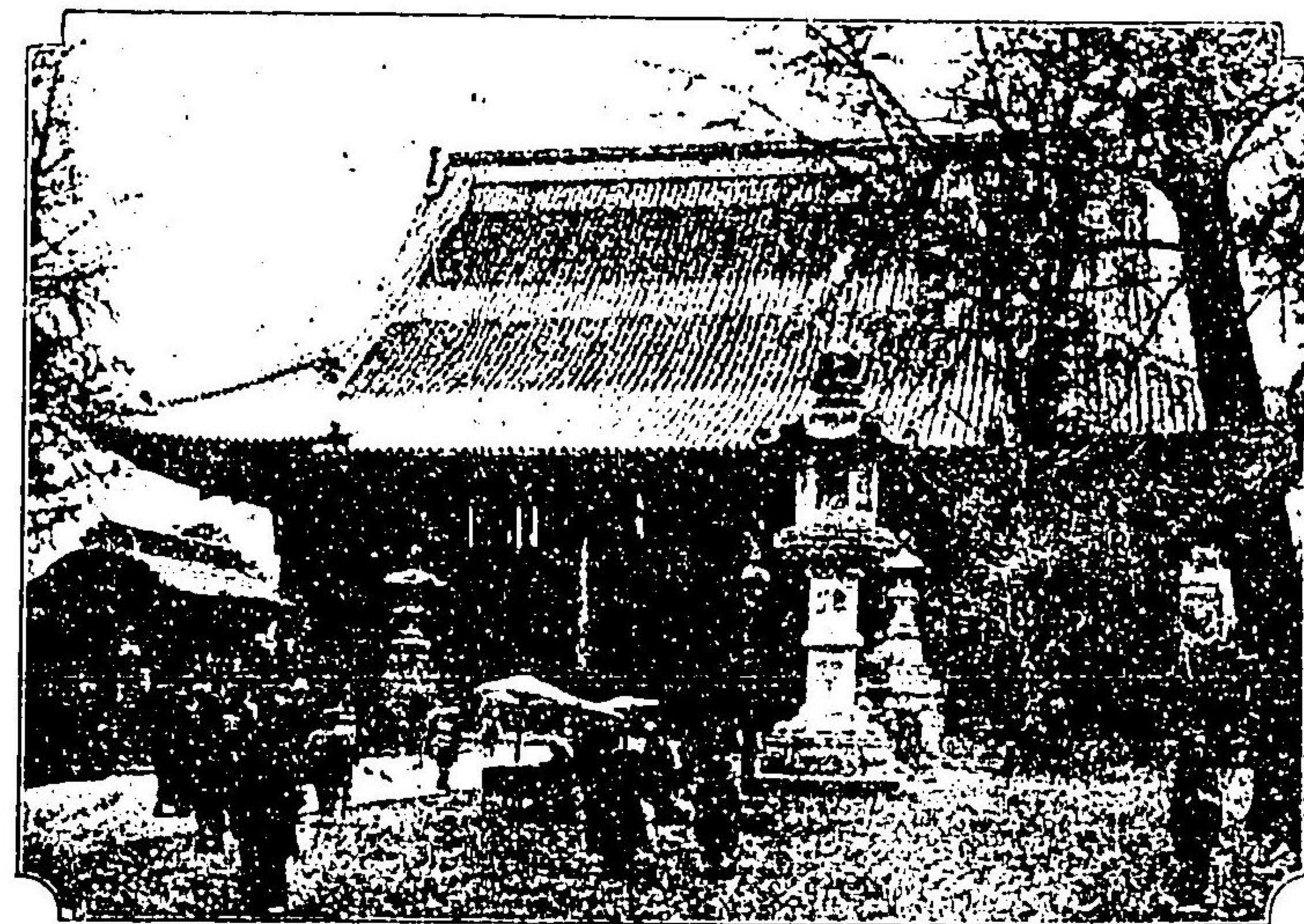
九段招魂社



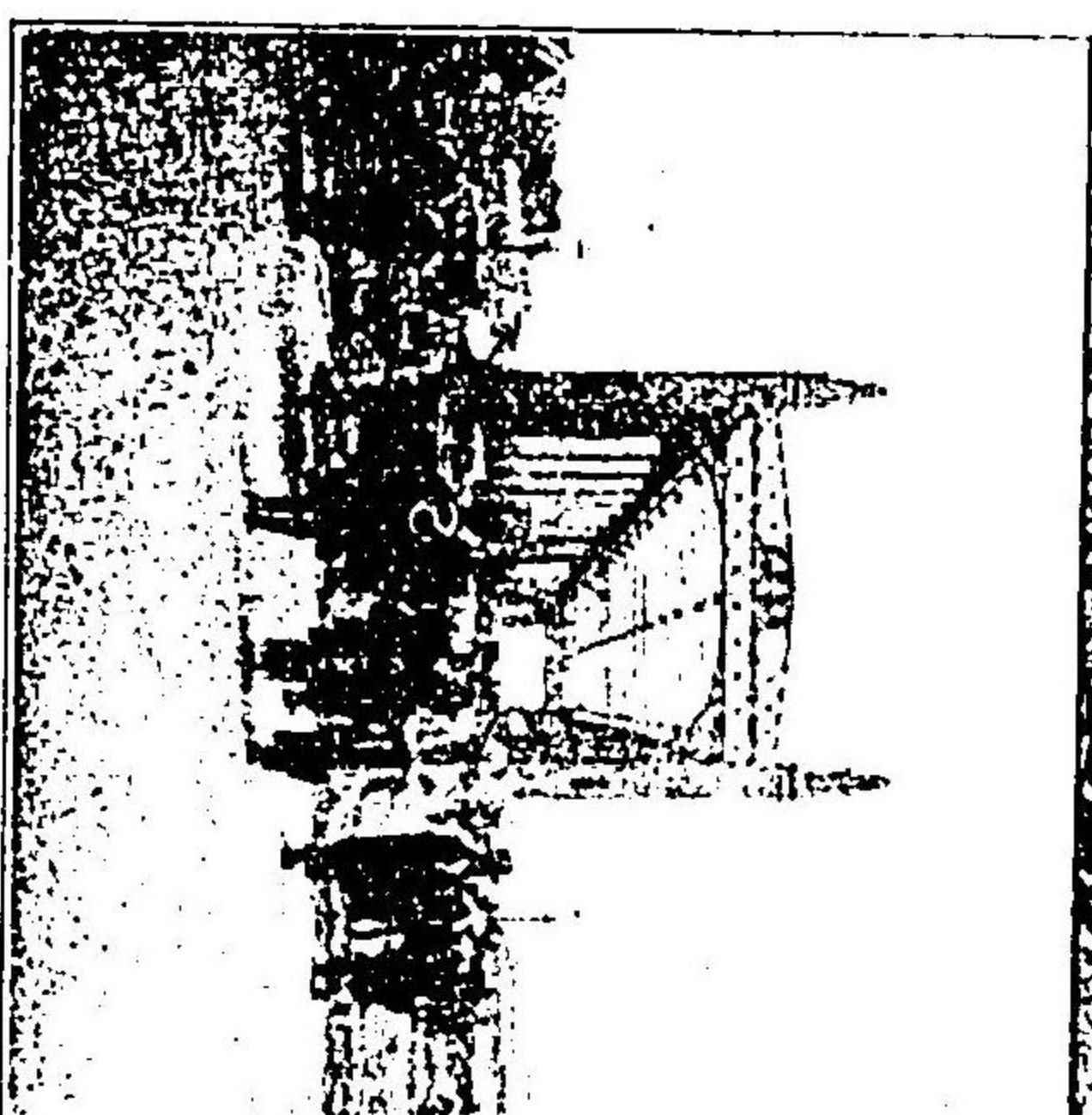
淺草凌雲閣



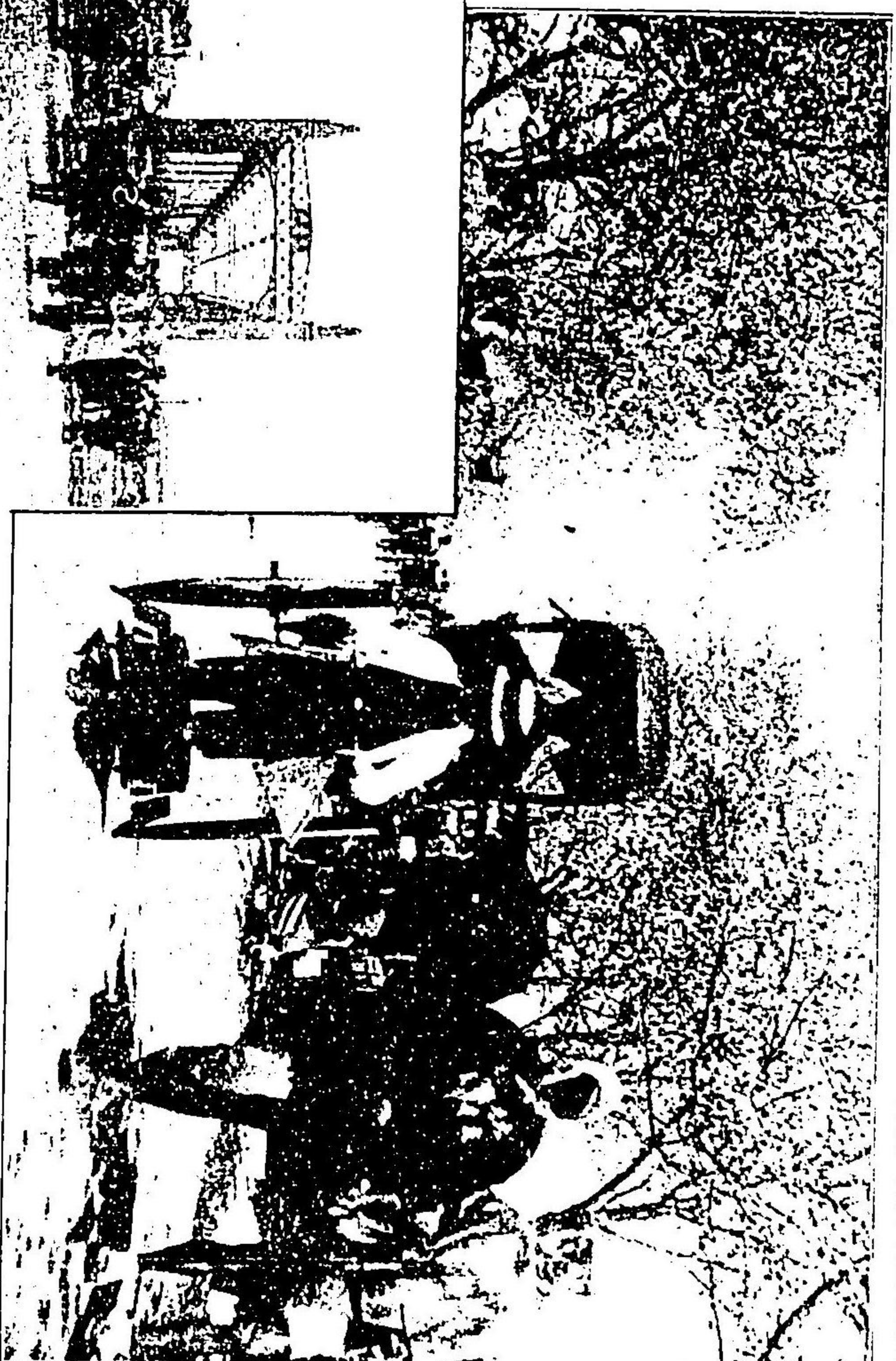
寺水清園公野上



堂音觀寺草葎



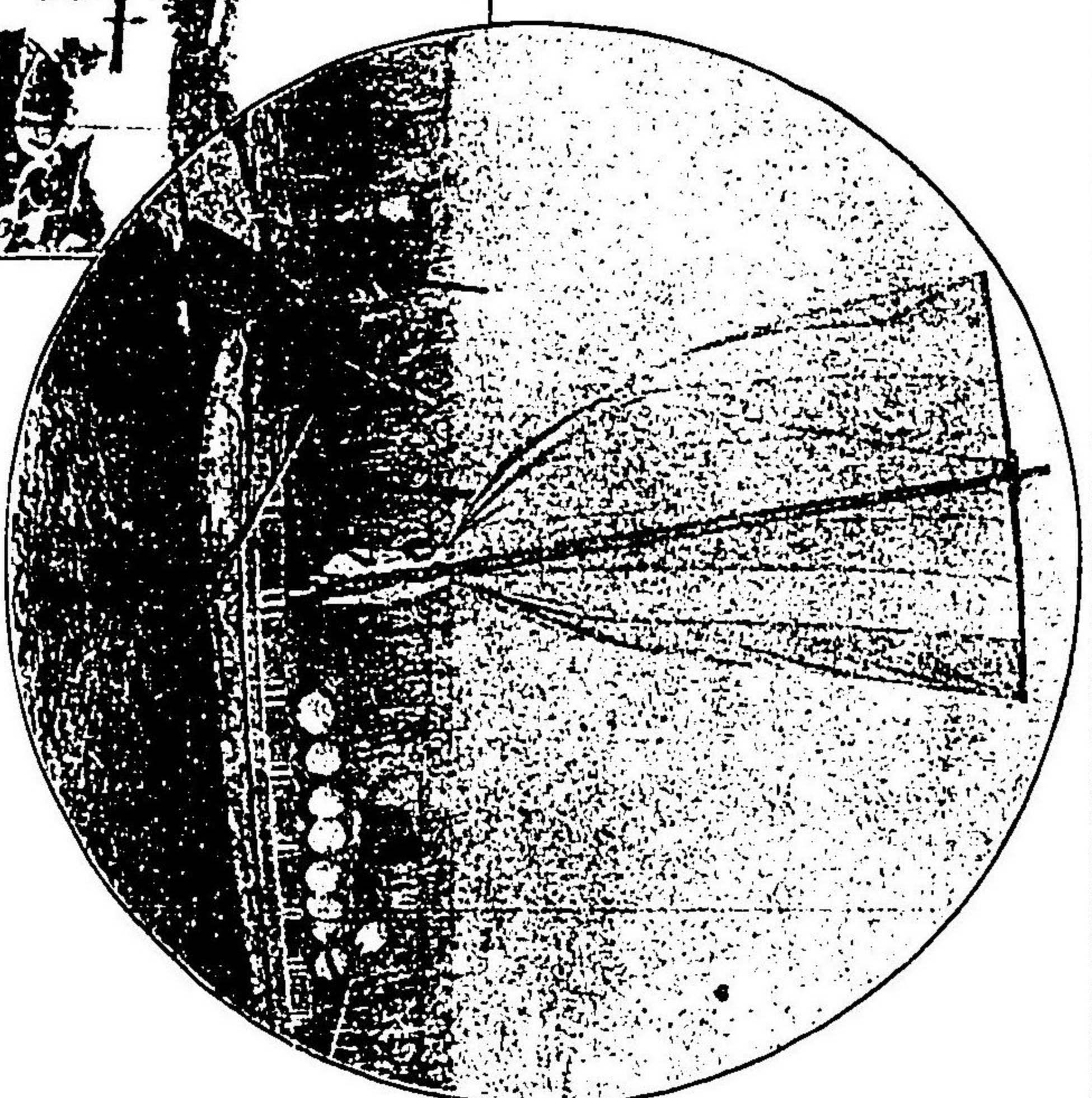
橋 梁 吾



旅 之 堤 岸



橋代末



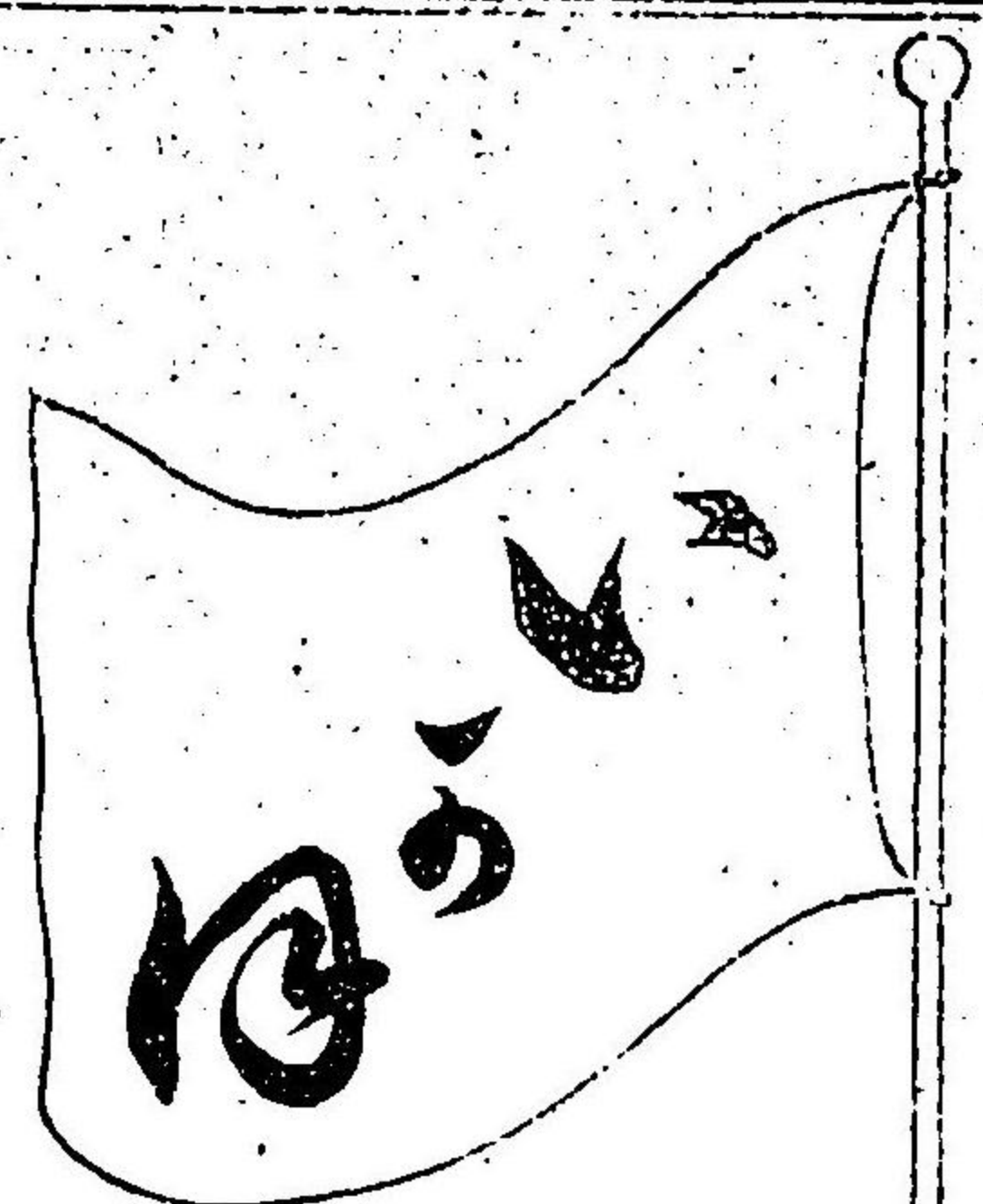
帆船之浦芝



新吉原遊脚



新橋藝妓街



温泉

鮮魚
御料理

上のまん坂鶯溪
電話本局 七九六

大廣間其他小座敷はなれ座敷等敷間あり
何れも空氣流通清潔にして庭園四季竹木の眺めあり

天狗煙草

陸軍天狗	十本	一錢	木の葉天狗	百本	六錢
海軍天狗	同	二錢	赤天狗	五十本	五錢
義兵天狗	二十本	二錢	白天狗	同	五錢
征清天狗	同	四錢	青天狗	同	六錢
鷹天狗	同	六錢	小天狗	同	七錢
<div style="display: flex; justify-content: center; align-items: center; gap: 20px;"> <div style="text-align: center;"> <p>御賜</p> </div> <div style="text-align: center;"> <p>五十本入 十五錢</p> <p>二十本入 六錢</p> </div> </div>					
日の出天狗	二十本	三錢	金天狗	同	十二錢
中天狗	五十本	八錢	月天狗	同	十五錢
銀天狗	同	十錢	東京市京橋區銀座三丁目		
大天狗	同	十錢	岩谷商會		
日本天狗	同	十錢	大阪市西橋通東上橋角		

前付四

東洋大都會

石橋忍月補
前田曙山編

第一 東京の沿革

茫茫たる武蔵野の原、草より出で、草に入るどや詠じけん、廣袤數里の間、野草茫茫として人稀に、鳥鳴かぞ獸走らず、只これ荒涼たる大平原は、我帝國の首府たる東京市の始めにして、土一升に金一升と唄はれし、花の御江戸の源なり。若夫れ、武蔵野の逃水退へば影なく、捉へんとすれば形なくして、仰ぎ見る半空

東京の沿革

の月一輪、依稀として丹陽を出づるに似たるの時、誰か肩摩殺擧車馬轆轤たる此大繁榮を思はんや。

東京はもと江戸と稱し、江戸の地、荏土に作る、鎌倉氏の覇府を東海の濱に開くや、葛西氏の族江戸太郎重長なるもの、此地の一廓により、豊島權守清光なる者北隅豊島の莊に在り、双々相對峙して雄を擁ひたりしが、降つて東山公足利義政の時に至り、關東管領上杉定正の家宰太田持資、始めて城を此地に築きて、武蔵野の風物稍見るに足るに至りしが、幾干もなくして持資諷口の陥る所となりしより、定正曾我豊後守をして代つて之を守

一

らしめぬ、爾來上杉朝長朝興前後相繼いで之に據りしが、大永四年小田原の島雄北條氏綱の爲に謀られて、城陥り家亡び、妻子眷族東西に離散して、昔日の豪華只一朝の夢とぞなりける。

管領家の支城として、雄を八州に揮ひたりし江戸の城も、此に至つて空しく新九郎氏が末葉の恣にする處となり、其端將富山遠山の徒、相托して之を守る事數十年、天正十八年に到り、北條氏の豊公の爲に亡ぼさるゝや、秀吉徳川家康をして、封を此地に移し以て關東を領せしむ。

海廣からざれば鯨鯢棲まず、山深からざ

れば猛獸無し。滿目渺々たる武藏野の原は、眞に以て英雄の立脚を占め、雄を四方に揮ふの地點たり、彼の家康なるもの、兵馬倥傯の間に由で、不世出の大略を抱き、胸中大に造營する所あり、其虎を博ち獅を履すの貔貅を包蔵して、勤めて頭角を僭輩の間に顯はすを避くると雖も、錐の囊中にあるもの、其末立所にあ

らはれずんばあらず。渠が封を受けて此大平原に臨むや、江戸の古城によりて更に一廓を畫し、丘陵を夷げ、洧澗を填め、水運交通の途を開くと共に、市街を開き邸第を敷き、恩を以て靡け、威を以て制し、力めて紛々たる

人心を糾纏するに專にせり。

時に海内の民ひさしく兵馬塗炭の苦に疲れ、鶴首して南風の馥郁として來らん事を思ふ、彼の大活眼を有し大手腕を抱けるの英雄は、能く四民の輿望を容れて政を行ひしかば、終に能く豊臣氏を夏冬の兩戦に夷けて、慶長の初年大將軍の宣下を蒙り、征夷の府を開きしより爾來二百七十有餘年、其間に於て野草丈を埋むるの大平原は、如何に長足の進歩をかなしたる。

泰平の風飄々として、千代田の岡の松の緑、彌榮をゆく御代をや霧ぐらん、東に筑波西に富士、南は若海漫々として、北

は荒川の流れ滔々たり、此好天地の間に於て、聳然として彩雲の間に挺づるものは千代田の城、丹鶴ゆるく舞ひて日麗らかなるの下、幾千方の人士は泰平を跋扈し、翼々として其徳を仰ぐ。抑も平安の京城は、皇上の在す處と雖も、治國の大標は江戸城の裡にありて、事實に於て此地は大帝國の首都を以て目せられぬ。

彼の長祿の始めに於て、緩かに渺たる一市街を畫せるの地は、須臾にして倍せらるゝ事數十、大厦高樓軒を接して、淺草の北隅、芝の南端に至る迄、所として家屋の櫛比せざるなく、人口の稠密ならざるなし、昔在五中將がいざ言問はんと詠

じたりし隅田川、漫々たる水に泛べる都鳥のみは、我思ふ人の像を止むると雖も、千住吾妻兩國永代新大橋の五大橋は、宛ら虹霓の若穹に懸るが如くに架せられ、篠守を渡し守は今何處の隈にかもどめん、春は上野の花、秋は隅田の月、夏は兩國の納涼、冬は墨堤の雪、四時の眺めに榮華駟奢の家遊を恣にする、新吉原の不夜城、幾千百の妓院教坊、麗を競ひ、美を戦はす、眞箇是東海の大桃源、夜々幾万の嫖客、花に焦がれ月に浮かれて、黄金白金を湯水の如くに溺溺するもの、誰か此地を以て其古に鬼抜りといふ淺茅ヶ原の夫と思はんや。

徳川氏の覇を聞きしより、古今未曾有の繁榮を極めたる江戸の地も、驕る者久しからざる春の夜の夢淡くして、家康より慶喜氏に至る十五代、末路瑤陀たり易く、終に軍職を解いて列侯となり、大權を奉還したるものは、實に徳川氏の末路なり、然り、徳川氏は斯の如くして退隱し、征夷の大權は又江戸のものならずと雖も、江戸は徳川氏の退職の爲に、反つて江戸時代の繁榮よりも數十層の大繁榮を來すを得たり、何ぞや、車駕遷都の議これなり。

維新の始め、薩南に遠觀の士あり、甲東大久保利通といふ、渠は參與の職を奉じ

て、能く大政を輔佐し、復古の偉業を翼賛したるの功臣なり、渠因循姑息の月卿雲客の間に介在して、車駕東遷の議を建て、同列の名士と共に、百方異論を排擠して、終に大日本帝國の首都を江戸と定め、始めて東京と稱し、日出帝國の首腦となすに至りたり。

江戸時代に於てすら、東洋の大都會たりし此地は、皇居を此處に下せられしより、駁々として開明に進み行く字内の趨勢は、此大首都を驅つて、泰西文物の輸入を導かしめ、官省を設け學校を建て、電線を縦横ならしめ、交通機關を改善せしめ、僅かに二十餘年ならずし

て絶大の進歩をなさしめ、外人をして神來の大技術あるかと驚歎せしめたるものは、實に我帝國の首都たる東京市の形勢なり。

實に江戸時代より今に至る四百有餘年の間、或は建設となり、破壊となり、戦亂となり、平和となり、大火あり大風あり、幾度も狂瀾怒濤の急渦に陥りたりと雖も、比較的破壊少なくて建設多く、戦亂少くして平和多く、其間に着々として開拓の歩を進め來りし我東京の歴史は、多々益々繁雜にして、之を詳説せば本書を代ると雖も恐らくは盡きざるべし、此處に僅に其梗概を序して、沿革の大要

とす。

第二 東京の地理

長祿三己卯二月の地圖に於て、本郷村と稱し神田村といひ、牛籠村と呼ばれ、市谷村と稱へられ、然して日本橋京橋麹町の稱を見る能はざりし我東京市の位置は、武藏の東南隅に位して、東徑百三十九度五十四分三十五秒乃至三十四分五秒、北緯三十五度四十九分乃至三十二分十八秒の間に在り、東は南葛飾の豊饒なる地を以て千葉縣に接し、西北は北豊島南足立の兩郡を以て埼玉縣に隣り、西南は豊多摩荏原兩郡の沃野を以て神奈川縣

と土壤を接し、然して東南は直に東京灣の風光を眉目の間に臨む、東西二里十五町南北三里十町、面積五方里有餘にして、宛ら小判の形に似たるもの、實に先天的富宥の兆を現はすものといふべし。地勢概ね平坦にして、間々上野道灌山飛鳥山等の丘陵、麹町四谷牛込大塚青山白金等の高原起伏するも、概して平衍にして山岳なく、遙かに筑波秩父を雲烟の間に望むのみ、其間只芒漢渺々たる大平原にして、幾億万の家屋も、櫛比し悉して必らずしも狹隘を感ぜざるもの、實に我東京の特色にして、又以て大帝國の首府たるに恰好の地たり。

然く東京は山岳の不便なくして、而して水運の便利を享有せり。玉川は源を甲斐の界に發して、蜿蜒として平野の間を流れ、荏原橋樹の境を過ぎて六郷川となり、川崎より直に海に注ぐ、市を南北に貫流するものは大川にして、源を秩父に發して荒川となり、豊島川となり、綾瀬の流を隅田村關屋の里に合して隅田川となり、更に宮戸川の稱は淺草の東を流るゝに依りて起れり、吾妻橋より以南は一般に大川と稱せられて、永代の下月島佃の間より東京灣に注ぐ、實に帝國有數の大川にして、底深く水緩やかに、大船巨船を通ずるに難澁を見ず、之を以て永代

の下に在つては、孟春の如き飛艦、明治頼朝の如き大船をすら繫泊すべく、隅田九大川丸の如き小蒸溜は吾妻永代の間を自在に遊弋し、彼の發然たる大鐵艦を、一撃の下に粉砕すべき水雷艇の如きすら、恰も鯨鯢の波間に躍るが如く、綽横に河流の間に馳突す、又以て其舟筏に便なるを見るべし。

神田川は神田上水の末流にして關口より牛込小石川の間を流れ、迂回して船河原橋に出で、此處に外壕の水を合して小石川橋水道橋の流となる、御茶之水橋の下には小赤壁の稱あり、芳代橋昌平橋和泉橋美合橋皆此川に架せられ、淺草橋柳

橋の下を過ぎて直に兩國の上流、百本杭の對岸に注ぐ。

其他中川は木下川押上の水を合せて海に注ぎ、江戸川は利根の支流にして、下總國關宿より分れて南下し、千葉東京の界より海に入る。

抑も東京の繁榮は徳川氏の經營にたり、大平原の地便によると雖も、此水運の利あるにあらざれば、いかでか今日長足の進歩を見るを得んや、現時瀛車の便ありと雖も、其以前魚介荷物の江戸に入るものは、房總より來るは内海を横貫して永代より大川に入り、靈巖島より斜に日本橋に來る。銚子よりするものは、利根を

遡りて江戸川に下り、新川より中川を横断して大川に來り、秩父埼玉よりするものは荒川の水利による等一として此河流によらざるべからず、彼の梢乗り込む山谷堀の頃あるを以ても江戸人士の遊所に到るにすらも尙此河流を利用したるを見るべし、然して此河流は唯に交通運搬の利あるのみならず、近郊の田家皆此水を利用して田圃の灌漑に用ひたれば、旱魃の凶歳と雖も、敢て愁眉を要せず、東京近在の富有を稱せらるゝも、皆な是河流の賜物なり。

東京の地は武蔵野の一部なれば、山岳の蜿蜒たるを見る能はざれども、多少岡陵

の起伏點在するを拒む能はず、徳川氏の頃、所謂將軍の威勢を以て、人を従し黄金を散じ、尙列侯に命じて扶役として土工を起さしめられたれども、流石に平坦砥の如くならしむる能はずして、現今尙四方に走るの丘陵あり、皇城の西南は一般に山の手と稱して、或は牛込四谷の如き、或は白金の如き、或は本郷臺の如き、或は上野忍ヶ岡の龍蛇の尾を揮ふるが如くに、飛鳥山に至りて了るあり、目白臺の如き、駿河臺の如き、人家稠密の爲に蔽はれて、丘陵たるの觀に乏しけれど、平野必らずしも平野にあらず、反つて東京の風光を美ならしむるに足れり。

東京市高低表

麹町區

麹町三丁目二番地邊	一〇五尺
四谷門邊	一〇五
紀尾井阪邊	九五
霞ヶ關邊	六〇
牛込門邊	四〇
内幸町邊	二〇
有樂町邊	自九
飯田町邊	至十九
平河天神邊	九五

永田町一丁目邊	九〇	今川小路邊	一一
靖國神社邊	八五	日本橋邊	一九
市谷門邊	七〇	本銀町邊	一九
神田區		日本橋邊	一九
駿河臺鈴木町邊	七五	小舟町邊	一七
西紅梅町邊	六五	小網町邊	一六
師範學校邊	六〇	一石橋邊	一五
神田明神邊	五五	濱町邊	一三
水道橋内邊	二五	京橋區	九六
神田橋外邊	一九	新橋邊	一五
萬世橋邊	一八	銀坐邊	一六
龍閑橋邊	一七	木挽町邊	一五
一ッ橋通邊	一五	築地西本願寺邊	一八
松枝町と玉ヶ池邊	一五	芝區	一八

三田一丁目邊	九五	丹後町邊	九〇
二本榎邊	九〇	豊川稻荷邊	八〇
三田巧運町邊	九〇	田町邊	四〇
愛宕山	八五	四谷區	
三田四國町田町邊	八五	東信濃町邊	一五
愛宕町邊	八五	左門町邊	一〇
新網邊	九	鮫ヶ橋邊	六〇
新錢坐邊	九	牛込區	
麻布區		藥王寺前町邊	一〇
三軒町邊	一〇〇	袋町若宮町邊	九五
本村町邊	九五	神樂阪上邊	九〇
我善坊邊	九五	新小川町邊	一三
森元町邊	九〇	小石川區	
赤坂區		西宮阪傳通院邊	一五

西江戸川町邊	一四	自吾妻橋至枕橋邊	至一〇八
本郷區		元町邊	至一〇六
帝國大學邊	八〇	外手町石原邊	至一〇六
麟祥院邊	七五	相生町四五丁目邊	至一〇六
壹岐阪邊	七五	吉岡町長岡町邊	至六五
無縁阪邊	至五五〇	深川區	
下谷區		富吉町邊	一〇
上野廣小路邊	一七	八名川町東六間堀邊	至一〇八
二長町竹町邊	七	伊勢崎町邊	至一〇七
淺草區		西大工町清住町邊	至一〇七
仲町三間町邊	至一九五	深川公園木場邊	六
東本願寺邊	一〇	靈岸町邊	六
鳥越三筋町邊	至一四七	又隅田川の淺深を示すも決して無用の業	至一〇五
本所區		にあらざるべし、先づ千住大橋の邊より	

始めれば左表の如し。

隅田川淺深表

千住大橋字砂尾堤先深所	一八尺	百本杭の北端藤代町先深所	二〇
全 字牛田耕地先深所	二三	兩國橋深所	一七
綾瀨川と合流する深所	二三	元柳橋地先深所	一八
關屋より梅若地先深所	二〇	一ツ目渡中流深所	一七
小松島後橋場渡し中流深所	一七	濱町河岸深所	一七
今戸渡(中洲と三箇の間)深所	一五	安宅渡深所	二〇
枕橋渡深所	一五	新大橋中流深所	二〇
吾妻橋中流深所	一五	万年橋地先深所	二三
駒形渡中流深所	一四	中洲渡清住町地先深所	二三
厩橋中流深所	一二	全上 中流深所	一五
富士見渡中流深所	一〇	永代橋中流深所	一二
		佃島住吉渡深所	一八
		臺場近傍	三乃至五

第三 東京市の市制及區畫

東京市は十五區に區分せられ、市に市長あり、特別市制を敷き、府知事を以て市長を兼しむ、市長の下に市参事會あり、市會あり、市参事會は市に於て名望あるものを以て之を任ず、市會は一、二、三、三階級の公民より、配名投票を以て撰定する事、尙衆議院議員撰擧の如し、凡て名譽職たり、各區には區長あり、書記あり、以て市制の普及を計る。

本郷、下谷、淺草、本所、深川をいふ、區を分つて町となし、町を分つて番地とする事、全國を通じて同一なりとす。今各區の町數及人口を擧ぐれば大略左の如し。

町	坪數	人口
麴町區	五 七四、三三三	五、〇〇〇
神田區	一 二八、一三〇	二、九一五
日本橋區	二 二〇、八六四	一、三、一八七
京橋區	一 三三、六三三	一、四、〇二六
芝區	一 五九、七五五	一、三、六二一
麻布區	五 三、六四〇	四、一八一
赤坂區	五 四三、四三四	三、七八八

四谷區	四 一三、三六〇	三、四〇三
牛込區	五 四一、九六六	四、七五五
小石川區	八 五九、四七三	四、四四四
本郷區	五 三、四〇〇	六、三二五
下谷區	五 三、三三三	七、四九六
淺草區	一 七〇 三、六四〇	一、四、三三〇
本所區	七 三、九一六	一、四、五九九
深川區	一〇〇 四一、九六六	八、〇、七
總計	一、三三三 五、六、九、〇〇八	一、二、六、八、六、七

前表に於て麴町區の面積他に卓絶して、人口比較的少なきは、該區は皇城の如き、或は諸官衙兵營學校會社練兵場等の如きものを有し、従つて空漠の地多きに由るのみならず、所謂貴顯紳士の廣大なる邸宅を有する等に原因するものなり。

第四 諸官衙の所在地

内閣	宮城内
樞密院	全
宮内省	全
外務省	麴町區霞ヶ關
内務省	全大手町
大藏省	全

陸軍省	目 麹町區永田町一丁目
海軍省	麹町區霞ヶ關
農商務省	京橋區木挽町
逓信省	全
文部省	麹町區竹早町
司法部	麹町區霞ヶ關
貴族院	麹町區內幸町
衆議院	全 內幸町
會計検査院	全 大手町
參謀本部	全 永田町
警視廳	全 八重洲町
憲兵本部	全 大手町
鐵道局	京橋區木挽町
印刷局	麹町區大手町

行政裁判所	全 紀尾井町
大審院	全 霞ヶ關
東京控訴院	全 霞ヶ關
東京地方裁判所	全 霞ヶ關
東京區裁判所	全 八重洲町
東京衛生試驗所	神田區和泉町
東京集治監	南足立郡小菅村
千住製絨所	北豐島郡千住町南
東京衛戍監獄署	赤坂區一ツ木町
砲兵工廠	小石川區小石川町
第一師團	赤坂區青山南町
水路部	芝區芝公園
海軍造兵廠	全 赤羽町
海軍火藥工廠	荏原郡目黒村

近衛師團 宮城內
陸軍監軍部 麹町集町

第五 郵便電信局電話交換所所在地

東京郵便電信本局	日本橋區本材木町一丁目
東京電話交換所	麹町區錢瓶町
浪花町電話交換所	日本橋區浪花町
中央電信電話局	京橋區木挽町十一丁目
日本橋郵便電信電話局	日本橋區元四日市町
兩國郵便電信電話局	全 元柳町
神田郵便電信電話局	神田區須田町
下谷郵便電信電話局	下谷區上野山下町
淺草郵便電信電話局	淺草區馬道町

郵便電信局電話交換所所在地

本郷郵便電信電話局	本郷區元富士町
駒込郵便電信電話局	同 駒込東片町
飯田町郵便電信電話局	麹町區飯田町
麹町郵便電信電話局	全 麹町三丁目
新橋電信電話局	新橋停車場外
芝口郵便局	芝區芝口一丁目
木挽町郵便局	京橋區木挽町
西久保郵便局	芝區西久保神谷町
赤羽郵便電信電話局	全 赤羽町
三田郵便局	全 三田同朋町
麻布郵便電信局	麻布區宮下町
葵町郵便電信電話局	赤坂區葵町
青山郵便電信局	赤坂區青山南町
四谷郵便電信電話局	四谷區忍町

牛込郵便電信電話局 牛込區通寺町
 小石川郵便局 小石川區水道町
 本所郵便局 本所區横綱町
 深川郵便電信電話局 深川區小松町

第六 警察署所在地

京橋警察署 京橋區川岸地
 日本橋警察署 日本橋區久松町
 阪本町警察署 全 阪本町
 神田警察署 神田區錦町
 下谷警察署 下谷區西黒門町
 本郷警察署 本郷區元富士町
 淺草警察署 淺草區泉涌町
 麹町警察署 麹町區麹町八丁目

麻布警察署
 芝警察署
 四谷警察署
 赤坂警察署
 牛込警察署
 小石川警察署
 本所警察署
 深川警察署
 千住警察署
 品川警察署
 板橋警察署
 新宿警察署

麻布區永阪町
 芝區愛宕町
 四谷區左門町
 赤坂區表町
 牛込區神樂町
 小石川區水道町
 本所相生町
 深川區龜住町
 北豐島郡千住町中組
 荏原郡品川町
 北豐島郡板橋町
 豊多摩郡内藤新宿町

第七 區役所所在地

深川區役所

深川區深川靈岸町

第八 官立學校

國民の教育は國家の元氣なり、教育の良否は國家の消長に關す彼の清國人士の腐敗は儒教を誤釋したるの結果に外ならずや。

我日本帝國の教育に意を用ふる、明治の初年より始終一日の如く、銳意専心つとめて教育の普及を計り、改善をつとめ、今は各府縣は元より、臺灣沖繩等に至る迄、兒童走卒といへども一文字を書し得ざる者なきに至りぬ、特に帝國の首都たる東京の地は、教育の根源にして、文部

麹町區役所 麹町區麹町一丁目
 神田區役所 神田區錦町二丁目
 日本橋區役所 日本橋區鬮町二丁目
 京橋區役所 京橋區築地四丁目
 芝區役所 芝區愛宕町三丁目
 麻布區役所 麻布區市兵衛町二丁目
 赤坂區役所 赤坂區表町一丁目
 四谷區役所 四谷區新堀江町
 牛込區役所 牛込區笹塚町
 小石川區役所 小石川區金宮町
 本郷區役所 本郷區龍岡町
 下谷區役所 下谷區仲徒町四丁目
 淺草區役所 淺草區馬道一丁目
 本所區役所 本所區相生町五丁目

省直轄の下に帝國大學あり、高等學校あり、師範學校あり、中學校あり、高等女學校あり、軍事教育には、海陸軍大學士官學校幼年學校あり、其他諸般の科學を教授するもの、法學醫學工學理化學の專門學校あり、今陸軍省直轄の諸學校より列記すれば。

陸軍士官學校 牛込區市ヶ谷加賀町
本校は陸軍各兵科の士官候補生を召募して、生徒となし、初級士官に必要な戰術等を授くるを以て目的とす、修業年限は歩騎は三年砲工は五年なり。

陸軍中央幼年學校 牛込區市ヶ谷加賀町
軍人の豫備教育を與へ、士官候補生たる

べきものを發生す、他日の大將たるもの、又必らず此校よりや出ん。

陸軍大學校 赤坂區青山北町二丁目
大學校は將校生徒に、最高等の戰術を教授し、他日參謀となりて參畫する、所謂帷幄の士を發生するものにして、生徒は皆在官の儘なり。

此外直轄學校の重なるものを示せば大略左の如し。

- 砲兵工科學舍 東京砲兵工廠所屬
- 陸軍砲工學校 牛込區若松町
- 陸軍戸山學校 同區同町
- 陸軍々醫學校 陸軍省醫務局所屬
- 陸軍々樂學舍 牛込區若松町

陸軍經理學校 約町區九段坂上

陸軍乘馬學校 荏原郡目黒村

陸軍獸醫學校 同郡同村

陸軍被服工長學舍 陸軍省經理局所屬

海軍省直轄學校

海軍大學校 築地元海軍省跡

海軍省直轄の學校は、多く鎮守府所在地にあるを以て、其東京にあるは、只此大學校のみ、陸軍大學校と同じく、各將校の爲に、高等の戰術を教ふる所なり。

宮内省直轄學校

學 習 院 四ッ谷區尾張町

華族女學校 麴町區永田町

共に華族の子弟、縉紳の子女を教育する

所、皇室の藩屏たる有爲の人才は、多く此處に輩出す。

遞信省直轄學校

東京商船學校 京橋區靈岸島銀町
商船學校は、四面環海の我帝國には一日も欠く可らざるの學舍たり、本校の卒業生は、多く日本郵船會社及其他の航海業者が所有せる船舶に分乘して、或は運轉手となり、或は機關師となり、乙種甲種の船長となり、平時に在りては豫備士官たり、戰時には時として、直に現職に登用せらるゝ事あり。

東京郵便電信學校 芝區芝公園内
専ら通信技師及電線電柱建設に關する學

術を教授するを以て目的とす。

文部省直轄學校

帝國大學 本郷區元宮土町
法醫文工理農六科の最高最遠の學理を教授する所、各分科に分科大學長あり、大學長の上に大學總長あり、大學全體の事務を監督す、本校の卒業生は直に學士の稱號を與へらる、大學を出で、尙最遠の學科を研究せんと欲せば、更に大學院の設けあり。

其他東京市に存在する直轄學校は、
第一高等學校 本郷區駒込東片町
高等師範學校 本郷區湯島三丁目
高等商業學校 神田區一ツ橋通り

女子高等師範學校 本郷區湯島三丁目
東京工業學校 淺草區御藏前片町
東京美術學校 上野公園内
東京盲啞學校 小石川區指ヶ谷町
高等師範學校附屬音樂學校 上野公園内
女子高等師範學校附屬高等女學校 本郷區湯島三丁目
の九校とす

東京府管轄學校

東京府高等女學校 神田區神田橋外
東京府尋常中學校 京橋區築地三丁目
東京府尋常師範學校 小石川區竹早町
開成尋常中學校 神田區淡路町
城北尋常中學校 麹町區飯田町五丁目
司法省指定學校

日本法律學校 神田區三崎町三丁目
東京法律學院 神田區錦町二丁目
東京專門學校 牛込區早稲田
和佛法律學校 麹町區宮土見町六丁目
明治法律學校 神田區駿河臺南甲賀町
專修學校 神田區今川小路二丁目

文部省指定學校

日本中學校 麹町區山元町一丁目
獨逸學協會學校 神田區小川町一丁目
東京敎學院尋常中學 神田區猿樂町
素修學校 麹町區飯田町四丁目
麻布尋常中學校 麻布區東鳥居坂町
錦城學校 神田區錦町三丁目
明治機會尋常中學校 麹町區宮土見町四丁目

第九 私立學校

官立學校と對峙して、教育の普及を圖るものは、私立學校とす、世人往々私立學校を以て、官立學校に劣れるものとすれども、必ずしも然るにあらず、師弟の關係等、反つて官立學校より見るべきものあり、今其著名なるものを列舉すれば。

二松學舎 麹町區一番町
イーストレーキ塾 全區四番町
成城學校 牛込區原町
先進學院 芝區三田四國町

水産講習所 全區全町
 女子學院 麹町區上三番町
 東京佛蘭語學校 麹町區富士見町六丁目
 東京高等產婆學校 日本橋區濱町二丁目
 東京產婆學校 日本橋區矢ノ倉町
 東京慈惠醫院醫學校 芝區愛宕下町二丁目
 東京女學館 麹町區三年町
 東京商業學校 神田區錦町二丁目
 東京獸醫學校 牛込區市ヶ谷河田町
 立教中學校 京橋區新榮町七丁目
 日本中學校 麹町區山本町
 日本藥學校 神田區仲藏藥町
 日本藥學協會 全區錦町三丁目
 豐國學校 京橋區木挽町四丁目

東洋英和學校 麻布區島居坂町
 東京物理學校 神田區小川町
 立教女學校 京橋區築地居留地
 歐文正鶴學館 京橋區築地居留地
 海軍豫備學校 麹町區元園町二丁目
 大日本實業學校 京橋區錦屋町
 大日本女學校 麹町區土手三番町
 大成學館 神田區三崎町一丁目
 高山齒科醫學院 芝區伊皿子町
 曹洞宗大學校 麻布區北日ヶ窪町
 外國語學校 神田區錦町三丁目
 藥學校 下谷區四町
 慶應義塾幼稚舍 全區三山三丁目

慶應義塾商業學校 全區
 普連土女學校 芝區三田功進町
 香蘭女學校 麻布區永坂町
 攻玉舍 芝區新錢坐町
 工手學校 京橋區南小田原町
 國學院 麹町區飯田町五丁目
 國民英學會 神田區錦町三丁目
 哲學館 本郷區駒込蓬萊町
 跡見女學校 小石川區柳町
 青山學院 豊多摩郡澁谷村元青山
 濟生學舍 本郷區湯島三丁目
 共立女子職業學校 神田區一ツ橋通
 明治學院 芝區白金今里町
 明治女學校 麹町區下六番町

明治商業學校 全區飯田町四丁目
 女子教育獎勵會 全區三年町
 女子神學校 神田區駿河橋北中實町
 尙武學校 全區錦町三丁目
 頌榮女學校 芝區白金銀町
 順天求合社 神田區仲藏藥町
 以上は其概略のみ、尙公私立無數の小學校幼稚園は之を記さず。

第十 病院

明治時代に於て、特筆大書して其進歩を稱すべきは醫術なり、現時醫學は獨逸を以て碩學の淵藪と稱す、然して我東京は實に東洋の獨逸といふも、決して誇張に

はあらざるべし、今著名なる病院を列擧すれば。

- 醫科大學第一醫院(各 科) 本郷區元富士町
- 醫科大學第二醫院(各 科) 神田區和泉町
- 井上病院(眼 科) 神田區駿河臺東紅梅町
- 岩佐病院(内外科) 日本橋區船場二丁目
- 岩佐病院(内外科) 麹町區一番町
- 石越病院(内外科) 京橋區三十間堀二丁目
- 博濟病院(内外科) 日本橋區龜島町一丁目
- 日本橋病院(内外科) 全區青物町
- 日本赤十字社病院(各 科) 南豊島郡下込谷村
- 外郎病院(精神科) 四ノ谷區永住町
- 外浦病院(内 科) 芝區高輪南町
- 東京病院(内外科) 全區愛宕町二丁目

- 東京慈惠病院(内外科) 全區全町
- 東京府本所病院(傳染病) 本所區松代町三丁目
- 衆濟病院(瘧 疾) 本郷區千駄木町
- 大西醫院(眼 科) 神田區錦町
- 宮下病院(眼 科) 京橋區猪鬣町
- 根岸病院(瘧 疾) 下谷區根岸金杉町
- 瘋癲病院(瘋癲々癲) 本郷區田町
- 好生堂病院(内外科) 淺草區東三筋町
- 赤坂病院(眼 科) 赤坂區氷川町
- 淺田病院(内 科) 牛込區横寺町
- 櫻井病院(婦人科) 日本橋區矢ノ倉町
- 桐淵醫院(眼 科) 下谷區練馬町
- 杏雲堂病院(内外科) 神田區西紅梅町
- 明々堂病院(眼 科) 小石川區春日町

なる者を擧ぐれば。

- 明治病院(内外科) 淺草區須賀町
- 耳科 院(咽喉科) 神田區小川町
- 順天堂醫院(内外科) 本郷區湯島五丁目
- 神保 醫院(脚氣病) 神田區北神保町
- 東京真鴨病院(瘧 疾) 本郷區真鴨町

此外避病院の如きは之を記載せず。

第十一 救濟院

救濟は慈善の事業にして、博愛の高義を表明するもの、彼憐むべき鰥寡孤獨廢疾の者を救濟するは、實に吾人の義務たらざるはあらず、我東京市民の公共慈善の志に厚き、幾個の救濟院を設立して、此漂泊の細民を救ふの道を講ず、今其著名

東京府養育院 本郷區長岡町
 養育院に収集したる窮民にして、老朽若くは痴呆にして用に堪へざる者の外は、院内の工業場に於て、夫々自産の業をなさしめ、又幼者には筆算所を設けて學に就かしむるの方法あり。

福田會育兒院 佛教主義救濟所
 大慈大悲の心を垂れて、貧困無告の兒女を救濟する所にして、彌陀の福田を擴充するの主義なり、抑も福田とは、昔佛印度に於て敬恩悲三種の福田を設けたるに基き、専ら淨財の喜捨を募りて孤兒の救恤を圖るにあり。

東京感化院 豊多摩郡澁谷村
 不良の少年を感化矯正して、悔過遷善の道を得せしめ、以て罪惡を未前に防ぎ、併て家庭教育を補益する所、専ら道德の涵養所なり。

第十一 銀行

金錢の融通機關にして、全國經濟界の牛耳を執るもの、之を銀行とす、然して銀行の木鐸として鏘々たるものも、又東京市の中央に匯集せり。

官設及國立銀行

にありては、著名なるもの左の如し
 日本銀行 日本橋區本兩替町

- 勸業銀行 日本橋區北新堀町
 第一國立銀行 全區兜町
 第三國立銀行 全區小舟町
 第五國立銀行 全區麩殿町
 第六國立銀行 全區本町
 第十五國立銀行 京橋區木挽町
 第二十國立銀行 日本橋區伊勢町
 第二十七國立銀行 日本橋區本材木町
 第三十國立銀行 京橋區越前堀町
 第四十五國立銀行 京橋區本松町
 第六十國立銀行 日本橋區本銀町
 第八十四國立銀行 京橋區南新堀町
 第九十五國立銀行 日本橋區本町
 第一百國立銀行 日本橋區萬町

- 第一百十二國立銀行 日本橋區坂本町
 第一百十九國立銀行 神田區淡路町
 第一百三十二國立銀行 京橋區南鍋町
 第一百五十二國立銀行 日本橋區北鞘町
 新瀉第四銀行支店 日本橋區南茅場町
 福島第六銀行支店 全區濱町二丁目
 甲府第十銀行支店 日本橋區堀留町二丁目
 富山第十二銀行支店 全區吳服町
 大坂第十三銀行支店 全區南茅場町
 上田第十九銀行支店 全區堀江町二丁目
 大坂第卅二銀行支店 京橋區南傳馬町
 静岡第卅五銀行支店 日本橋區兜町
 前橋第卅九銀行支店 全區小網町二丁目
 前林第四十銀行支店 全區小松町二丁目

私立銀行

- 栃木第四十一銀行支店 全區富澤町
 仙臺第七十七銀行支店 全區南茅場町
 八王子第七十八銀行支店 全區大傳馬町二丁目
 徳島第八十九銀行支店 全區青物町
 京都第百十一銀行支店 麴町區麴町四丁目
 函館第百十三銀行支店 日本橋區本材木町
 三井銀行 日本橋區新右衛門町
 安田銀行 全區小船町三丁目
 川崎銀行 全區檜物町
 東京貯藏銀行 全區萬町
 東海貯金銀行 全區檜物町
 東京割引銀行 全區本町四丁目
 東京貯蓄銀行 全區兜町

東京商業銀行 全區大傳馬町一丁目
 東都家壽多銀行 全區品川町裏河岸
 帝國商業銀行 日本橋區兜町
 中井銀行 全區金吹町
 田中銀行 全區坂本町
 廣部銀行 全區本町四丁目
 東海銀行 全區堀江町一丁目
 田中銀行 神田區今小路三丁目
 山本銀行 日本橋區堀留町三丁目
 今村銀行 全區南茅場町
 壬午銀行 全區兜町
 相模銀行 全區本材木町
 商買銀行 全區堀留町三丁目
 三頭銀行 全區小網町

岡本銀行 全區堀江町一丁目
 久次米銀行 同區本八丁目二丁目
 東京商工銀行 芝區濱松町三丁目
 芝銀 行 全區兼房町
 愛國銀行 日本橋區室町二丁目
 麴町銀行 麴町區麴町五丁目
 東京石炭倉庫銀行 京橋區東町一丁目
 下谷銀行 下谷區上野元黒門町
 商榮銀行 日本橋區本銀町
 品川銀行 荏原郡品川町
 日本貯蓄銀行 神田區表神保町
 東西銀行 日本橋區横山町
 東京銀行 日本橋區田所町
 東華銀行 京橋區北新屋町

遠州掛川銀行支店 日本橋區芳町
 第二銀行支店 全區大傳馬町
 下野佐野銀行支店 全區本材木町
 名古屋伊藤銀行支店 全區大傳馬町三丁目
 長野信濃銀行支店 全區小船町二丁目
 鹿島銀行支店 全區本材木町
 成田銀行支店 全區通旅籠町
 横濱銀行支店 全區小船町

第十三 會社

明治の初年、泰西の制を取りて、會社設立に關する條例を發布せしより、資を集め、財を合して、諸般の會社を設立するもの幾千百、或は金融界の恐慌の爲に亡

び、或は機に投じて、其基礎を定め自然淘汰を以て、其存在する者は、殆ど確然として動かざりしが、二十七八年、戰役の後、戰勝の聲に酔ふたる國民が、到る所會社熱に襲はれ、或は其間投機師の煽動する所となりて、深く會社の性質をも極めず、猛然として舉手賛成したりしも、今は自然の趨勢の爲に、多くは設立せずして仆れ、或は自ら解散し、現今組織せらるる者は、大抵確乎たる信用を有す。今合名會社の部より記せば。

合名會社

三井物産合名會社 日本橋區阪本町

内外物産直輸出販賣を専業とするもの、富豪三井家の組織する處にして、我帝國各開港場、直接輸出港は元より、各府縣有数の地に支店を有し、海外にありては、朝鮮支那香港孟買新嘉坡英米各國に支店を設け、當時其旺盛を極む。

三井鐵山合名會社 日本橋區駿河町

三井一家の所有にかゝる、各地鐵山の採掘販賣の業務を司るものにして、採掘する所主として石炭を多しとす。

合名會社 大倉組 京橋區銀座二丁目

土木建築諸般の用途銃砲火藥等の營業に有名なり、紳商大倉喜八郎氏の組織にかゝる。

合資會社

共濟生命保險合資會社 日本橋區小網町

富豪安田一家の組織に成れるが如き觀あり、元成島柳北翁等の創意になれるもの、共濟一錢社是れなり、保險金より生じたる利分は、被保險人に割戻すの方ありて、頗る手堅しとて世評宜し。

三菱合資會社 麴町區八重洲町

有名なる岩崎彌太郎氏の創設せるものにして、本邦航海業者の嚆矢たり、彼海上王の稱ありし岩崎氏の富豪を致せしも、必竟此會社より生ぜし利潤によれりとす、曩に航海業を船舶と共に日本郵船會社に譲りしより、今は其大株主なり。

傍船舶石炭雜貨の賣買をなす。

日本鐵道合資會社 京橋區月島第二號地

批難の聲は一時世に高かりしと雖ども、我邦鐵道業の鼻祖として、先鞭者の名は決して奪ふ可らず。

日本建築合資會社 麴町區永田町二丁目

和風洋風の建築、熟練なる技師に乏しからず、數百間にわたれる大層高樓の建築にも、寸毫も踟躕する事無しといふ。

株式會社

東京市の各區に散在する株式會社に至りては、其數殆んど枚擧に追わらず、鐵道に物産に運輸に交通に、工業農業等各種の營業に従事するものに就て、其著名の

者を掲ぐれば。

日本鐵道株式會社 下谷區上野山下町

明治十四年十一月の起業にして、本邦鐵道會社中の巨擘たり、鐵線の延長官有鐵道にまさる、上野驛を發して直江津に到るもの、青森に到るもの、水戸久之濱平間、高崎前橋間、宇都宮日光間、小山栗橋古河を経て水戸に到るもの赤羽より板橋を経て、東京の西北を迂回して品川に到るもの、或は仙臺より鹽釜に走るもの、其總理數殆んど七百哩に達せり。

總武鐵道株式會社 本所區柳原町

東京の東端本所太平町を起點として、市川中山船橋千葉酒々井を過ぎて佐倉八日

市場銚子に到る、千葉よりは以て房總線に連絡すべく、佐倉よりは以て成田線に接続すべし、全長大ならずと雖も、収入の多額なる驚くべし。

甲武鐵道株式會社 目 麹町區飯田町四丁

外環牛込塚の沿岸を西走して、遠く八王子に達するもの、此鐵道が市中に有する停車場は、三崎町、牛込、市谷、四谷、信濃町、新宿の六停車場とす、車輛輕便にして、尤も便利なり。

川越鐵道株式會社 目 日本橋區本町一丁

川越鐵道は武藏國川越町を起點として、一は日本鐵道會社線に連絡し、一は甲武鐵道會社線に達するもの、

水戸鐵道株式會社 日本橋檢物町 創業以來日尙淺しと雖も、頗りに業務の擴進を見る。

兩毛鐵道株式會社 下谷區上車坂町

日本鐵道線と連絡して兩毛の野を走るもの、茲に日本鐵道と合併の談ありたり。

日本郵船株式會社 麹町區八重洲町

これ當年の海上王岩崎彌太郎氏が、拮据經營したる三菱社の進歩したるもの、政府の保護助成金を受けて、外國航路を開くと共に、船舶を新造し、資本を増加し現時一隻一萬噸の排水噸數を有する土佐丸の如き船あり、其他黃海の激戦に雄名赫々たる西京丸、或は山城横濱東京等の

稱號ある船舶百餘隻を以て數ふ、營業の種類は、内外海上貨物及旅客運輸にあり。

内國通運會社 日本橋區佐内町

明治十年西南の役に際して設立したるもの、水陸諸貨物の運輸及貨物の保險業をなし、全國著名の市府には大抵代理店又は支店あり。

日本運輸株式會社 日本橋區大傳馬鹽町

明治二十年の起業にして、一時内國通運會社と激烈の競争を試みたる事あり、營業の種類は内國通運と密同し、資本金五十万圓

東京馬車鐵道株式會社 芝區汐留町

東京市民の爲に最大至便を與ふるは此馬

車鐵道に如くはなし、起點を新橋に發して、京橋日本橋を經、一は本町より分れて淺草線となり、一は直行上野線となり市内繁榮の個所を貫通す、今青森の端より、中國の果まで旅行せんとするもの、上野停車場前より之に乗り、新橋停車場前にて下車すれば殆んど足を地に着けずして、全國を旅行するを得、一區二錢半區一錢の賃錢にして、上等車は二倍なり。

日本麥酒株式會社 荏原郡目黒村

エビス麥酒の醸造元にて、組織の整頓、構造の偉大目を驚かす。

櫻田麥酒株式會社 櫻田紀尾井町

日本にて麥酒を醸造せしは、札幌の鮫島

麥酒と本社とを以て鼻祖となす、飲口稍苦味多きを以て一時販路の減少を感ぜしが、現時は大に改良を施したり。

東京倉庫株式会社 深川區小松町

資本金百五十五万圓を以て組織し、諸荷物の保管、預、貸庫の營業をなす。

東京米穀倉庫株式会社 深川區黒江町

所謂深川の米廩なるものなり、東京米穀取引所の受渡米を保管し、又他の米穀をも保管す、或は預り手形を出し、其手形に對して貸金をもなす、我東京市民の常食は大抵此會社の倉庫に藏せらるゝものと知るべし。

東京電燈株式会社 京橋區新着町

倅々として晝を欺き、造化の至妙を奪ふの電光は、市内家々に點せられて、天下又闇夜なし、莫大の發電力を具へて、市民の需用を充す。

品川電燈株式会社 芝區田町四丁目

芝高輪より品川町邊の電燈に點火するを以て營業とし、社運頗る隆盛なり。

帝國電燈株式会社 麻布弁町

東京電燈會社に次いで起りしもの、發電所の數東京電燈程多からずと雖も、社運は伯仲の間あり。

王子製紙株式会社 日本橋區兜町

各種の西洋紙を製するを以て營業とす、起業は明治二十年、無慮數百の男女工を

使役し、機械力と相俟つて莫大の製紙を出す。

富士製紙株式会社 京橋區三十間堀

製造所は駿河國富士川の畔にあり、有名なる製紙會社にて、新式の機械を具ふ。

千壽製紙株式会社 京橋區本材木町

工場は豊前國企救郡篠崎村字中島にあり、各種の洋紙を製出し、大いに好評あり。

江戸川製紙株式会社 牛込區西五軒町

日本紙の製造を以て名あり、近時市民の使用する江戸川半紙改良美濃紙等殆んど此會社の製紙にあらざるはなし。

日本舎密製造株式会社 日本橋區小網町

理化學的藥品を製造販賣す、起業明治二十二年八月

大日本製藥株式会社 京橋區木挽町

營業品目は重に藥品製造にありて、世評尤もよし。

東京製藥株式会社 神田區鎌倉町

藥品の製造及販賣を専らとす、資本金二万五千圓

東京製氷株式会社 京橋區新榮町

資本金四十万圓を以て組織したり、人造氷の大製造をなす、彼の盛夏の候、食卓の上に忽ち大水塊の置物あり、其内に各種の草花の綻ぶなど、皆此會社の製造する所たり。

東京瓦斯株式會社 芝區濱崎町
 市中の街燈、家々店頭の明光、電燈と光彩を競ふものは、此會社の供給なり。
 東京砂糖株式會社 日本橋區南茅場町
 和洋の砂糖を製造し又之を一般に販賣す。
 日本土木株式會社 京橋區船屋町
 土木工事に有名なり、帝國議會東京ホテル博覽會歌聲伎座等、此會社の建築になる。
 大日本建築株式會社 日本橋區大傳馬町
 土木建築製圖測量建築用品販賣煉瓦製造を以て名あり。
 内外用達株式會社 京橋區銀座二丁目

海外輸出入品取扱諸官廳用途にて資本金七十万円
 東京綿株式會社 日本橋區新材木町
 綿花綿糸綿布の賣買にて、明治二十一年九月の起業にかゝる、資本金十萬圓
 東京紡績株式會社 深川區東大工町
 紡績業に於ては有數の大會社たり。
 日本織物株式會社 日本橋大傳馬町
 各種の織物を製造す、全國の木綿問屋呉服商の大なるものは、大抵此株主たり。
 鐘淵紡績株式會社 南葛飾郡隅田村
 梅若詞畔墨水の畔、巍然として、雲を凌ぐ大層は、開雅幽邃の地をして、轉た俗了せしむるの憾あれども、またこれ一大

偉觀ならざるにあらざるは、鐘淵紡績會社なり、男女の職工數千人を役使して本邦紡績業の巨擘たり。
 小名木川綿布株式會社 南葛飾郡大島村
 小名木川の水利を應用して、地を此處に卜せり、營業は天竺木綿、唐棧、小倉、其他の綿布を製造す、又機械系、大巾金巾を販賣す。
 東京毛糸株式會社 北豊島郡王子村
 毛糸紡績及洋服地織物等一切の毛織物を製造し、又原料を賣買す。
 東京組紐製造株式會社 日本橋區横山町
 機械力を用ひて、各種の組紐を製造す。
 東京機械製造株式會社 日本橋區彌生町

理化學蒸気々鐘、電信、測量機械、其他諸工業用の機械をも製造す。
 東京製綱株式會社 麻布區本村町
 工業用其他の綱網を製す。
 東京銅鐵株式會社 日本橋區彌生町
 金屬の地金及製品を製造及發賣す。
 東京板紙株式會社 北豊島郡南千住町
 宏壯なる建築を以て、大機械力を運轉し、板紙厚紙壁紙等を製造す。
 東京帽子株式會社 小石川區氷川田甫
 帽子製造會社中の尤古きものにして、現時は各種の帽を製作し、世評大によろし。
 銅真鍮板製造株式會社 日本橋區龜井町

營業は社名の如く各種の金屬地金を發賣し傍ら諸機械をも販賣するにあり。

東京乗合馬車株式會社 本所區菊川町通俗赤馬車と唱へ、東京市街を往復し、一區一錢五厘を以て乗客賃金とす。

日本馬車株式會社 神田區鎌倉河岸上等馬車製造及貸馬車を以て營業とす、幌馬車箱馬車、二頭立一頭立、孰れも顧客の需めに應ず、之を借て市中を乘廻し、蒙然王公貴紳を學ぶも妙ならんか。

日本點燈株式會社 神田區柳原河岸戸々の依頼により、石油點燈の請負をなす、輕便にして安價なれば、市内到る所として、此會社の利便によらざるなし。

株式會社秀英舎 京橋區西紺屋町明治九年の創立にして、市内有數の大活版所たり、諸新聞雜誌書籍の印刷請負をなす。

株式會社築地活版印刷所 京橋區築地二丁目活版銅版石版活版機械字母等を發賣し、又精巧なる印刷をなす、特に歐文に妙を得たり。

東京印刷株式會社 日本橋區兜町もと製紙分社と稱せるもの、變化なり、また活版印刷に妙を得、精巧なる罫組に名高し。

帝國印刷株式會社 京橋區築地元海軍近年の設立にかゝると雖も、事務頗る見

るべきものあり。

大日本圖書株式會社 京橋區三十間堀文部省出版の圖書を印刷し發賣す。

丸善株式會社 日本橋區通三丁目舶來の書籍及雜貨を販賣して有名なり。

株式會社石川島造船所 京橋區石川島船舶の製造諸機械器具等を發賣す、嘗て軍艦千珠を進水したるを以て名あり。

東京家禽市場會社 淺草區千束町表田家禽の繁殖及賣買の市場を以て營業とす資本三十五万円。

東京人造肥料株式會社 南葛飾郡大島瀛鐘を具へて、肥料を製造するもの、天然肥料より安價にして、効果多しとい

よ。

東京肥料株式會社 日本橋區東港町骨製肥料の販賣を以て營業とす。

品川硝子株式會社 荏原郡品川町各種の硝子器具を製造す。

日本煉瓦製造株式會社 日本橋區武藏國榛澤郡上敷面村に製造所あり、精巧なる白煉瓦を製す。

金町製瓦株式會社 南葛飾郡金町村煉瓦石土管を製造販賣す。

東京海上保險株式會社 日本橋區南茅場町明治生命保險株式會社 麴町區八重洲町東京火災保險株式會社 日本橋區西海岸明治火災保險株式會社 麴町區八重洲町

帝國生命保險株式會社 日本橋區繪物町
 職工生命保險株式會社 全 本町一丁目
 海國生命保險株式會社 全 樽 正 町
 仁濟生命保險株式會社 京橋區南紺屋町
 眞宗生命保險株式會社 全 南傳馬町
 日宗生命保險株式會社 日本橋區繪物町
 內國病災生命保險株式會社 京橋區三十間堀
 愛國生命保險株式會社 日本橋區本材木町
 有隣生命保險株式會社 全 茅 場 町
 明教保險株式會社 京橋區三十間堀

保險事業は人世の進歩と共に必須の要務なり、病災に天變に、失火に凡て人の生命財産に保險をなす事は、尙其生命若くは財産を護衛するものにして、寧ろ人間

の義務にして存す、以上の諸會社は多きは百万圓、少なきも十萬圓に下らざる資金を以て、最も確實に、最も熱心に業務の進行を圖るものなれば、吾人は安心して我生命我財産を委託すべきものたり。

第十四 取引所

東京株式取引所 日本橋區兜町
 資本一百二十五萬圓の組織にして、營業の科目は、國債、地方債、株券、證券、等大略百餘種の公債株券を取引す。
 取引に、定期、直、延の三種あり、立合時間は季節により多少の異動あるも、大抵午前八時より始まり、午後三四時にて

散會す、現今賣買の玉高は、一日四万乃至五六万に至り、月末の受渡し價格は、二百有餘萬圓に及ぶといふ。

米穀取引所 日本橋區麩売町
 我國産第一位の米を以て營業とす、實に全國取引所の主腦たり、各地の取引所、皆此取引所の立相場を聞いて、始めて立會ふに至る、一日の賣買玉高、大凡五万石より、十二万石に至る、所謂一夜大名一夜乞食の稱あるは、此相場の高下によりて、仲買客筋の浮沈を言ふなり、又以て其如何に激甚なる立會なるかを知らるべし。

深川廻送問屋市場 深川區小松町

これ即ち深川の正米市場にして、相場の高下ある事尙定期米の如し、其價格は大抵定期米に連れて高下すれども、時に反比例を出す事あり。これ定期と正米と自ら其性質を異にすればなり。

深川米穀問屋市場 深川區小松町
 同じく正米の市場なり、重に地廻米を當てて買入す。

魚 市 場 日本橋區魚河岸

魚市場は各種の市場中尤も古きものにして、徳川氏入國の際、攝州佃の人森孫右工衛門なる者、始めて佃大和田の漁夫三十餘名を率ゐて江戸に來り、所獲の魚

を、幕府の臆所に獻じ其の殘餘を賣買するに始まりしが、終に慶長年間森九右衛門なる者、始めて賣場を小田原町に開始せり、往古は日本橋近傍五箇所にありしが、今は日本橋より江戸橋に到る河岸の北岸を以て魚市場となし、これを魚河岸といふ、本船町、安針町、小田原町、長濱町等皆魚問屋仲買等を以て充され、魚河岸の威勢恰も旭日暈々たるの趣あり。朝に暮に、幾百千艘の解舟、魚介を輸送し來る事其數幾千万、東京府下百四十餘万の人士が、魚介の需用を此處に仰げば、賣買の總高元より驚くべき多額なり、毎早朝より正午頃まで、賣買の市をなす

事、宛ら喧嘩争論の如く、悪口罵詈を以て魚河岸の得色となすは、驚くべき奇風ならずや。
東京人士が氣風は、凡て淡泊にて清水の汚泥を止めざるが如き中にも、此魚河岸の氣風こそ、尤も面白けれ、暴言を以て常套となし、罵詈を以て應對となし、貴紳と庶民とを論せず、立合中に此一廓に入れば、買ふ者怒り、賣る者怒り、熱罵怒嘲の内に、忽ち相場定まり、賣買成立するを見る、之をしも奇と言はずして、何をか奇とすべき、然して一朝事起れば、忽ち庖丁を手にして躍り出で、他の強を怖れず、暴を避けず、奮然として

猛進し、敢て身の危険を知らず、怒る時は熱拳亂打すると雖も、事理秩然たれば忽ち光風霽月の如く、數分前前に争鬪の在りし事を忘れたるが如し、信を人の腹中に推て怪しまざるものは、これ魚河岸の氣風にして、江戸見の魂なるものなり。

青物市場 京橋區竹河岸

魚河岸の如く亂雜の光景を映じ出さずと雖も、又これ他地方に於て見る可らざる青物の市場なり、神田須田町に於ける青物市場と共に、全國青物市場の模範たり、此外青物市場は市中各所にあれども、神田須田町、京橋竹河岸の二箇所に

如くものなし。

東京十二商品取引所 日本橋區蠣壳町
石炭、薪炭、紙、煙草、製茶、醬油、木材、樽、酒、繪具染料、藥品、乾物、の十二品を取引する爲に設けらる、理事長は岩谷松平氏なり。

商品取引所 日本橋區蠣壳町

鹽、砂糖、肥料、綿糸、綿花、木綿、金屬、雜穀、等の取引所なり。

第十五 新聞社

東京日々新聞 京橋區銀座四丁目 日報社
時事新報 京橋區南橋町 時事新報社
日 本 神田區雄子町 日本新聞社

萬朝報 京橋區三十間堀
 每日新聞 京橋區尼張町
 東京朝日新聞 京橋區澁山町
 中央新聞 京橋區銀坐四丁目
 東京新聞 京橋區山下町
 國民新聞 京橋區日吉町
 讀賣新聞 京橋區銀坐二丁目
 やまど新聞 京橋區尼張町
 報知新聞 京橋區三十間堀
 都新聞 京橋區內幸町
 中外商業新報 日本橋區北島町

第十六 通信社

東京通信社 京橋區三十間堀

中央電報社 全
 帝國通信社 全
 內外通信社 全
 相場電報社 日本橋區鱷壳町
 廣目屋 京橋區銀坐二丁目
 金蘭社 神田區南乘物町
 正路喜社 京橋區宗十郎町
 弘報堂 全
 廣告社 全
 尾張町新地 南鍋町

第十七 廣告取次社

第十八 著名辯護士

前大審院 三好退藏 法律學士 飯田宏作

法學士 城 敷馬	法學士 小川平吉	法學士 江木 衷	法學士 平田讓衛
高梨哲四郎	齋藤孝治	法學士 高橋捨六	法學士 芹澤孝太郎
利光鶴松	磯部四郎	法學士 朝倉外茂鉄	法學士 鹽谷恒太郎
法學士 長島惣太郎	江間俊一	法學士 澤田俊三	法學士 岡崎正也
法學士 石橋友吉	岸小三郎	法學士 菊地武夫	花井卓藏
法學博士 熊野敏三	守屋此助	法學士 原 嘉道	法學士 關 直彦
法學士 兩角彦六	小川三千三	法學博士 岡村 輝彦	法學博士 增島六一郎
板倉中	法學士 宮古啓三郎	法學士 元田 肇	沼田宇源太
曲木如長	島居斷三	法學士 生沼永保	法學士 富塚玖馬
法學士 宮本五朔	松尾清次郎	印東胤一	法學士 竹内平吉
高橋庄之助	松田道尾	北田正望	法學士 熊谷 操
佐々木文一	高木益太郎	法學士 山田喜之助	町井鉄之助
法學士 鈴木充美	森 肇	久保田與四郎	高木祖來
法學博士 鳩山和夫	法律學士 岸本辰雄	橋本好正	小島忠里

佛國醫學博士 中島又五郎 山田泰藏
重岡謙五郎 侯爵 中御門經明

第十九 著名醫士

醫學博士 橋本綱常 岩井禎三
ドクトル 加藤照應 醫學士 山根正次
侍 醫 高階經本 魚住完治
軍醫總監 石坂惟寬 醫學博士 河本重治郎
醫學博士 岩佐 純 岩佐 新
陸軍々醫 西郷吉義 醫學士 堤 宗卿
ドクトル 長與稱吉 醫學博士 池田謙齋
井上達九郎 井野春毅
醫學博士 濱田玄達 ドクトル 小此木 信六郎
醫學博士 樫村清徳 渡邊 良齋

醫學士 賀古鶴所 ドクトル 金杉英五郎
吉田宗全 高田耕安
醫學博士 宇野 朗 江馬春熙
醫學博士 佐々木東洋 醫學博士 佐々木政吉
醫學博士 佐藤三吉 宮本 伸
角倉賀道 峯 秀世
竹村良庵 醫學士 櫻井郁二郎
ドクトル 入澤達吉 醫學士 濱野 昇
岡 玄 卿 醫學士 佐々木永三郎
醫學士 伊勢鏡五郎 醫學士 森篤次郎
戸塚文海 醫學士 岡本武次
醫學士 加藤時次郎 醫學博士 高木兼寛
隈川宗悦 深薮ムネ
木村助三郎 桐淵道齋

醫學士 宮下俊吉 高山紀齋
松山棟庵 醫學士 中井常次郎
醫學博士 北里柴三郎 後藤新平
長與專齋 伊澤信平
醫學博士 實吉安純 九茂文典
醫學士 柳順次郎 馬島初太郎
穴倉織造 醫學博士 石黒忠憲
淺田恭悅 醫學博士 片山國嘉
西尾 良伯 醫學士 三浦省軒
醫學士 山崎元脩 醫學士 田口和美
江波知輝 醫學士 長谷川 泰
醫學博士 佐藤 進 醫學博士 緒方正規
間宮八重子 醫學士 九茂文良
山本安三郎 土岐政次郎

第二十 著名書家

高松凌雲 六郷政寛
醫學士 二宮誠一郎 ドクトル 鳥居東洋
峰千 尋 醫學士 池邊棟三郎
醫學士 朝倉良佐 郷 郁太郎
中村田鶴 波多野 俊太郎
故米庵翁の末男にして米法に精し
万市川 三兼
諸躰變化極りなしと雖とも概ね歐法を主
とす其初蘭州に學ぶ 桂伊藤 信平
始め米庵翁に學ぶ龍爪の法に巧なり
鹿服部 和喜
宇旭新岡 久頼
書法に精し

萩原秋巖を學び亦書論に長せり

山橋小室 正治

書法に精し席上大書千枚書を以て顯はる

大城瀨 温

六朝の遺風を顯せり

橋中野 隆經

半仙翁の男にして書法を父に學び隸書を

長技とす

中根 肅

菱湖風にして書法に精し秋巖を學ぶ

尤も隸書に巧なり

山高齊 有常

洞西川 元城

第廿一 著名書家

日本書家

荒木寛畝 山田敬中 端館紫川

川端玉章 下村觀山 福井江亭

橋本雅邦 川邊花陵 野口幽谷

寺崎廣業 在原古玩 池和亭

小堀彌音 高橋玉淵 大出東阜

菱田春草 佐久間捷谷 松本楓湖

横山大觀 望月金鳳 尾形月耕

西郷孤月 熊夕谷直彦 金森南塘

村田丹陵 田口米作 佐竹永湖

岡倉秋水 跡見花蹊 村上委山

山名貫義 跡見玉枝 松野霞城

野村文舉 高橋松亭 平村探溪

福田曙 阪卷耕漁 住吉廣一

村瀬玉田 荒木寛友 渡邊省亭

白瀧幾之助

第廿二 雅樂

雅樂

芝 葛鎮 牛込區砂土原町

東儀季照 全 矢來町

林 廣繼 廻町區飯田町六丁目

多 忠廉 全區富士見町五丁目

東儀頼玄 牛込區中町十二番地

山井基萬 全區矢來町八番地二號

東儀季芳 全區中町三十五番地

能樂

能樂は聖德太子奉河勝と謀り、三十六番

野口少齋 川崎千虎 三島蕉窓

久保田桃水 川合玉堂 小林清親

猪瀬東寧 小阪象堂 武内桂舟

水野年方 豊原國周 筒井年峯

橋本周延 山中古洞 梶田半古

右田年英 小林永興 富岡永洗

菅原白龍 鈴木華邨 笠井鳳齋

洋畫家

原田直次郎 渡部金秋 黒田清輝

松井昇 久米桂一郎 龜井至一

松岡壽 藤島武二 渡邊文三郎

淺井忠 平木政次 渡部審也

安藤伸太郎 小山正太郎 中村不折

山本芳翠 和田英作 石原白道

の舞曲を作り、以て神前に舞はしむ、即ち神樂なり、後年申樂となり、文和の頃伊賀の人秦清次なる者あり、一夕夢に觀世音菩薩出現して、一首の歌を與ふ、歌に曰く、「向ひ觀世なかくちかひをますかゝみ疊らて富貴の徳を照さん」と、之より清次拮据經營、遂に觀世流なるものを興すといふ、八世の孫元尙の弟、分家して今春流を出し、其他金剛、寶生、喜多等相踵いで興り、以て今日の能樂をなすに到れり。

- 金 春 流 櫻間伴馬 本所區元町
- 觀世流家元 許 觀世 清廉 目 難町區飯田町四丁
- 觀世流連家 梅若 實 淺草區南元町
- 全 上梅若六郎全 正

- 全 上梅若万三郎全 上
- 觀世 分家 觀世鉄之丞 淺草區四島越町
- 寶生流家元 寶生 九郎 深川區青木町
- 寶 生 流 松本金太郎 神田區裏糺樂町
- 金春流家元 金春 八郎 四谷區左門町
- 金剛流家元 金剛鈴之助 赤坂區新町
- 金 剛 流 金剛氏重全 上
- 金春流地謠 大谷 奉道 京橋區大銀町
- 喜多流家元 喜多千代造 日本橋區濱町
- 笛 寶生流坐附 一噌幸太郎 芝區三田四國町
- 小鼓 金春流坐附 大倉 六藏 赤坂區靈南坂町
- 大鼓 觀世流家元 森田 登喜 本所區綠町
- 大鼓 石井 流 石井 一齊 豊多摩區花籠園
- 大鼓 觀世流家元代理 津村 又喜 本所區綠町
- 大鼓 金春流 金春五十男 淺草區吉野町

太鼓 觀世流 松村 末男 神田區四小川町
能衣 兼井に能樂師 關岡 長右衛門 日本橋區馬喰町四丁目

洋樂

- 鳥居 忱 遠山甲子子
- 奧 好義 多 久隨
- 小山作之助 上 眞行
- 辻 則承 幸田 幸子
- 中村 祐庸 瓜生 繁子
- 古谷 弘政 四元 義豊
- 芝 萬鎮 四籠 訥次
- 幸田 甲子 内田 菊子
- 鈴木 米次郎

仁明天皇の承知五年、(千六十)從五位上 掃

琵琶

部頭藤原朝臣貞敏、唐國より琵琶の妙曲を學び、譜數十卷、及紫檀紫檀の琵琶各一面を得て歸る、是蓋し琵琶の秘曲を我國に傳へたる始ならん、後其曲宛轉して平家物語等を諷誦し、之れに合して彈するに至り、其音益々高尙優美の妙を現はせり、又薩摩琵琶あり、其形象音調及之を彈奏する狀に至るまで、頗る尋常の琵琶に異なり、唐の白樂天が琵琶行の詩に、大絃嘈嘈如急雨、小絃切切似私語、嘈嘈切切錯雜彈、大珠小珠落玉盤と、此歌頗る薩摩琵琶に似たり、蓋し唐國の音調流傳して存するものか。

平家琵琶 原口喜遊 赤坂區傳馬町

薩摩琵琶 西 幸吉 麻布區山本町
 全 宮春巖次郎 芝區葺手町
 全 吉水經和 全區公園地内
 全 山下壽助 全區巴町
 全 別府眞彦 麻布區長坂下

琴
 琴には八雲あり、八雲に本曲組と外曲組あり、八雲諸振は本曲にして、築紫振、神樂振、催馬振、出雲舟振は外曲とす、其他普通十三絃の俗曲一絃二絃七絃等あり。

大岸 玉琴
 増田 愛琴

等にして
 畔柳覺二郎 (一絃)
 神田 竹住 (二絃)
 千波 伊勢 (一絃)
 加藤 進信 (二絃)
 井上 竹逸 (七絃)

竹琴
 此琴は竹にて造りたる一種の琴にして、明治十九年静岡の人田村與三郎の發明にかゝる、後歌入海上胤平古今の名歌三十六節を撰びて新たに節付をなし、是を中

八雲の名手は

- 伊藤 貞琴
- 山下 まち

川流といふ。

元 祖 田村竹琴 日本橋區本町
 中川流元祖 中川竹陽 神田區錦町
 十三絃の名手にありては

中能島松聲 本所區元町
 山田流の名人にして斯道の泰斗たり、愛玩の筆二張あり、一は「また草」と名け、初代山登檢校の愛藏せしもの、一は藤堂侯より「松之聲」の銘を得たるものなり。

山勢 松韻 下谷區仲徒士町
 又山田流の名人なり、元山勢家には初代山勢檢校の愛玩せる、重元辰藏作の筆二張あり、一は正理、一は奎目にして、希

代の逸品たりしが、其後高弟、馬場みせ女の乞により、正理の一張を譲り、方今は奎目のみ山勢家あり、今の松韻氏は、高等官を以て、音樂學校の教授たり。

山田生田流 奥村眞砂 日本橋區北島町
 山田 流 山登万和 本郷區湯島天神
 全 町田 杉勢 神田區五軒町
 皆な名人上手の稱なり。

尺八

荒木古童 淺草區下平右衛門町
 方今無双の名人にして、斯道の妙を究めたり、元來尺八は支那より傳來のものにて、殆んど二千五百有餘年前の技なる

が、其曲譜の如きは古傳の三曲、霧海篋
 鈴幕、虚空幕、眞虛靈之外、吾妻獅子、
 玉川、松竹梅、安宅、潮汲、江の島等の十
 數曲に過ぎざりしが、翁の斯道に勉むる
 の篤き、多年の苦心にて、終に春の曙、
 越後獅子、夕顔、浪花獅子、春の調、殘
 月、末の契、里の曉、七小町、宇治巡、
 四季の詠、西行櫻、浮寝、若菜、茶湯音
 頭、四段砦、深夜の月、四の民、青柳、
 磯千鳥、更衣、雲井弄齊、躑躅、新都獅
 子、櫻盡し、名殘の月、六段戀幕、嵯峨
 の春、玉の蟲、三段獅子、吼鷹等、其他數
 多の曲譜を作り、念々尺八の聲名を天下
 に現すに至れり、其愛玩の一管は、安政

元年武州千住在關原不動前中曾根村山中
 某の藪より自ら杖壺をなし、日々其製管
 を事とし、十年の星霜を経て、初めて出
 來せり、即ち之を名けて「變幻百出」
 と云ふ、實に古今の名器なり、翁復一管
 を造り、名けて「空山雷」と云ふ、亦頗
 る名器にして「變幻百出」と伯仲の物な
 れども、翁は深く之を秘して猥りに人に
 示さずといふ。

上原 虛洞 神田區仲猿樂町
 松平 虛童 本郷區梅園町
 稻葉 節童 麻布區飯倉町
 關戸 翠香 淺草區福井町
 等有數の妙手なり。

清樂

清樂は當今大いに衰頹したれども、間々
 玩弄せざるものなきにあらざ。

- 大阪流に於て
 - 長原 梅園
 - 長原 春園
- 長崎流に於て
 - 松本 端蘭
 - 山本 玄藤
- 溪庵流に於て
 - 津田 旭庵
 - 井出 一溪

等其著名なるものなり。

第廿三 茶湯生花

茶道

- 不自千家 川上 不自
- 不自千家 川上 關雪
- 全 川上 宗順
- 千家 流 中島 宗範
- 全 前田 丁伯
- 全 杉田 宗貞
- 石州 沈信流 松浦 詮
- 石州 清水流 谷村 嘉順
- 石州 野村流 山尾 靜江
- 千家 裏流 中田 宗閑
- 偏 流 脇阪 安斐

遠州流	小堀正快	全 家元千松庵隱師	古松庵仲女
生花		全 正風遠州流	本松齋一甫
生花の宗匠は其數夥だしく、枚舉に遑あらず、今茲に家元と稱するもののみを舉ぐれば。		全 八世家元	貞松齋一馬
遠州流 元祖家元	本松齋一得	慈 漢流	一瓢庵關里
全 庭松齋一晴	萬松齋一曲女	微 笑流	一月齋素秋
全 萬松齋一曲女	寛松齋一典	池 坊流	英星軒一曜
全 春秋軒一葉	松軒一星	古 流	梅陰亭月窓
全 隱 師	月華園桐翁	遠州流 插花道具	松盛齋理順
全 隱 師	里松庵一壽	諸品販賣	河井屋清右衛門
全 四世家元	寶霞庵一也	第廿四 鑑定家	京橋區中橋廣小路
		書畫鑑定	
		古筆了悅	下谷區竹町

鑑定家なり。

酒井法逸 日本橋區南橋町

古書骨董の鑑定家として名あり

刀劍鑑定

本阿彌忠敬 下谷區徒士町

全 長藏 本郷元富士町

全 成善 下谷區徒士町

日置仁平 麴町區富士見町

第廿五 武術

徳川氏盛なりし頃は、市内各所に道場を開きて門生に教授せしが、維新後大いに廢れたりと雖も、日本の精華として、又体育必須上のものでして、近來またく

和漢書畫の鑑定家にして、古筆の本家たり、真物には鑑定書を附し、以て偽物と判別す、但無落款の畫は鑑定書を附せず。

古筆了仲 下谷區徒士町

開祖古筆了佐の三男古筆勘兵衛の末葉なり、和漢書畫の眞偽を判別する事本家と同じ。

田澤靜雲 日本橋區大傳馬町

骨董商にして斯道の妙を得たり、眞偽を斷ずるに、嘗て誤まる事なし

須原鐵治 神田區錦町

又書畫商にして鑑定をなす事田澤に同じ、實に二人は弟たり難く、兄たり難き

隆盛にいたらんとす。

擊劔家

北辰一刀流	小栗徳三郎	鏡心明知流	中村仙次郎
眞影流	小谷 信友	北辰一刀流	崎田 義實
無念流	齋藤彌九郎	鏡心一刀流	小林 定之
鏡心明知流	邊見 宗助	全	村井 光智
直眞影流	得能龍四郎	全	中村又太郎
無念流	後藤 相馬	北辰一刀流	渡邊樂之助
北辰一刀流	宮部東太郎	鏡心明知流	坂部 大作
無念流	梅澤 清策	全	杉本友三郎
全	小野田伊織	無念流	前田 忠翠
鏡心明知流	大田 實道	眞影流	柿本 清吉
示現流	樋口 正行	全	眞見 忠篤
鏡心明知流	金松 直康	二刀流	三橋隆一郎

柔術家

眞影流	木村 敷秀	鏡心明知流	磯貝重次郎
北辰一刀流	下江秀太郎	全	田丸 太郎
全	海保 振	無刀流	合田定二郎
北辰一刀流	千葉 之胤	無念流	前田 忠翠
眞影流	今泉 六郎	講道館	嘉納治五郎
竹内流	金谷仙太郎	全	四郷 四郎
起介流	吉田 直	關口流	久富鉄太郎

馬術家
鹿島流 草刈庄五郎 駒馬師 宮下 幸知
全 草刈 親翁 同 目賀田雅周

第廿六 彫刻

漫に彫刻といへども、彫刻中には木彫あり

り竹彫あり、象牙彫あり、金屬彫あり、
諸は篆刻印版木版に至る迄、皆此範圍中
に網羅し悉す、乃其彫刻家中著名の人を
擧げんか。

木彫

西牧美雲	高村光雲	武本觀谷
山田鬼齊	後藤貞行	竹内久遠
竹彫	加納鐵哉	土屋竹齋
		松原竹仙
金屬彫	伊藤勝見	海野勝珉
		香川勝廣
	水野月洲	豊川光長
		榎本壽明
象牙彫	海野盛壽	野村勝守

布目象箆

石川光明	大川宗民	岡田鋤次郎
川本州樂	鶴澤春月	淺井寛齊
鹿島一布	牧野成秀	鹿島光敬

芝山象箆

芝山宗一	都筑利貞	片岡源次郎
------	------	-------

鎚金

鈴木長二郎	平田重太郎	大塚正壽
-------	-------	------

像型

大熊氏廣	長沼守敬	鈴木長吉
------	------	------

篆刻

泉 整乘	大島如雲	寶子山宗眠
------	------	-------

篆刻

中井敬所	濱村 薇山	齊藤拜石
------	-------	------

芝山與兵衛 畑河 雄 蘆野 楠山
土橋 嘉助

護謨印刻

江木松四郎 毛利敬房

木版彫刻

五島徳二郎 山本信司 安井豊助
宮田 六左衛門 松崎留吉 木村徳太郎
合田 清 北野雪光 櫻井留二郎

第廿七 煙草

嫌ふ者は阿呆草と腹め、嗜む者は憂忘れ
草と喜ぶ、元より養澤品の部に屬せば、
これ無くばとて事缺くまじとは、四角四
面の理窟にして、一吹の煙の消えぬ間に

忽ち精神を壯快ならしむるは、理窟の外
の妙味にして、食はず嫌には語るべから
ず、論より證據は、列國各地の大都會よ
り僻陬に到るまで、何處として培養せざ
るなく、販賣せざるなく、重税をかけて
も、販路の縮少せざるを見て知るべし、
外國婦人が金看板は、瓢箪胸と禁煙なれ
ど、夫は表向の躰裁にて、内實御勝手向
の内證へ立入れば、咬へ煙管のヌバリ
と、輪に吹く煙の朦朧たるは、反魂
香にさも似たり。
忍んでも呑み、隠れても吸ふ、單に是の
みを以て、直に人世習慣上必要品の要
素たるを體め得べし。

煙草は元我邦の産物ならず、支那より渡
來したるものにして、始めて我邦に培養

見れば、又假に商業界一方の覇者たるべ
し。

せしは、肥前長崎の櫻の馬場なり、之よ
り忽ち全國に種子を傳播して、薩摩煙草
となり、水戸煙草となり、或は泰野三州
越後信州等、各地有数の産物として、支
那及び其他の諸國にも輸出するに至れ
り。

岩谷商會 京橋區銀坐三丁目
勿驚税金三十万圓職工一万五千人とは、
實に此商會が大聲疾呼して江湖に呼號す
る所たり、木挽町豊玉河岸に廣大なる工
場を有し、大阪にも支店あり、發賣する
所の煙草には凡て天狗の名を附し、陸軍

近年邦人の西洋煙草を嗜む者漸く多きを
加へ、ゴールデン、フラグランド、カメ
ヲ、シヨウウツア、マニラ等の刻巻兩種の輸
入年々増加するの傾向あり、されば東京
市中各所に煙草商の間屋小賣店の夥だし
き、其日々の賣上高巨万の上に登れるを

天狗、海軍天狗、義兵天狗、征清天狗、
鷹天狗、木の葉天狗、赤天狗、白天狗、
青天狗、小天狗、日の出天狗、中天狗、
銀天狗、大天狗、日本天狗、金天狗、月
天狗あり、孰れも人口に適して、其賣上方
の多額なる、無慮六億万本と稱せらる、

實に東洋煙草大王の名に背かず、市中下流の婦人、又は小官吏の妻君が内職に此巻煙草の紙巻をなす者、實に五万人に下らずといふ、銀座三丁目東側の大半は、此商會の建物にして、朱塗の柱、龍大の文字、其思ひ切つたる様には、地方人士の上京せるものは勿論、都人士さへ一驚を喫すべし、然して以上諸天狗の外に「御賜」と命名せるものあり、五十本入拾五錢の太巻なり、此煙草に御賜の名ある所以のものは、明治二十七年征清戦役の際、在陣軍人の疾苦を慰勞せしめらるゝ恩召を以て、畏くも 陛下より恩賜せられたる、其巻煙草の製造を宮内省よ

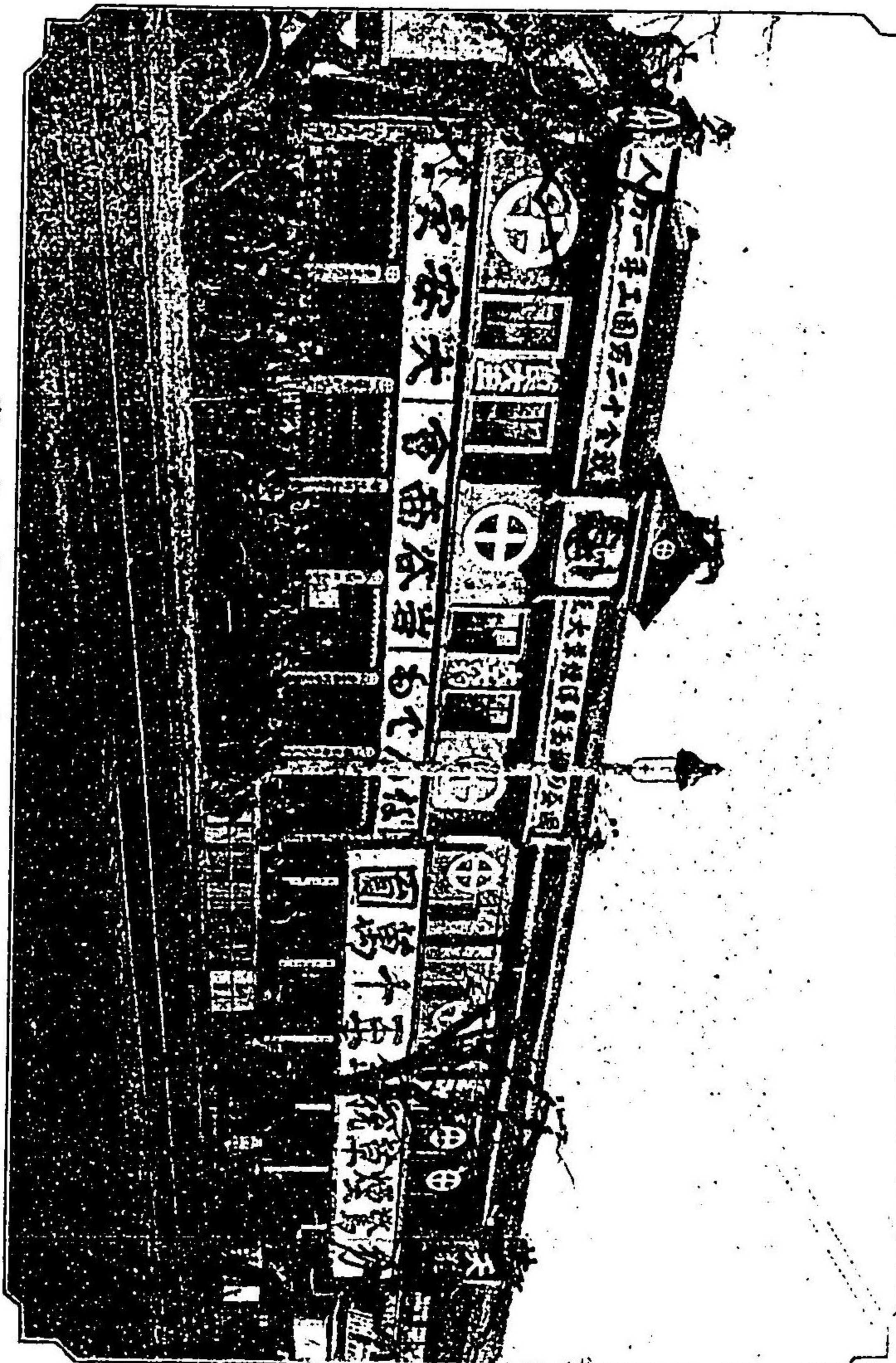
り命ぜられたる紀念として、同形の巻煙草に御賜の名を附して發賣せるなり、其品質大小等に當時の製造に則りて、寸毫も軒輕を見ずといふ。

江 副 商 店 葛橋區南金六町

外國煙草の輸入店にして、重に卸賣をなせども、又小賣にも出精せり、各國煙草會社と直取引の契約をなし、入船毎に莫大の荷を揚陸し、盛んに直輸入の便を計る、シヨウカア、プリシラア、リツチモンド等尤も有名なり。

木 村 商 店 京橋區南傳馬町

パイレットと呼べる外國煙草は此店の一専賣なり、外國煙草商中屈指の店舖に



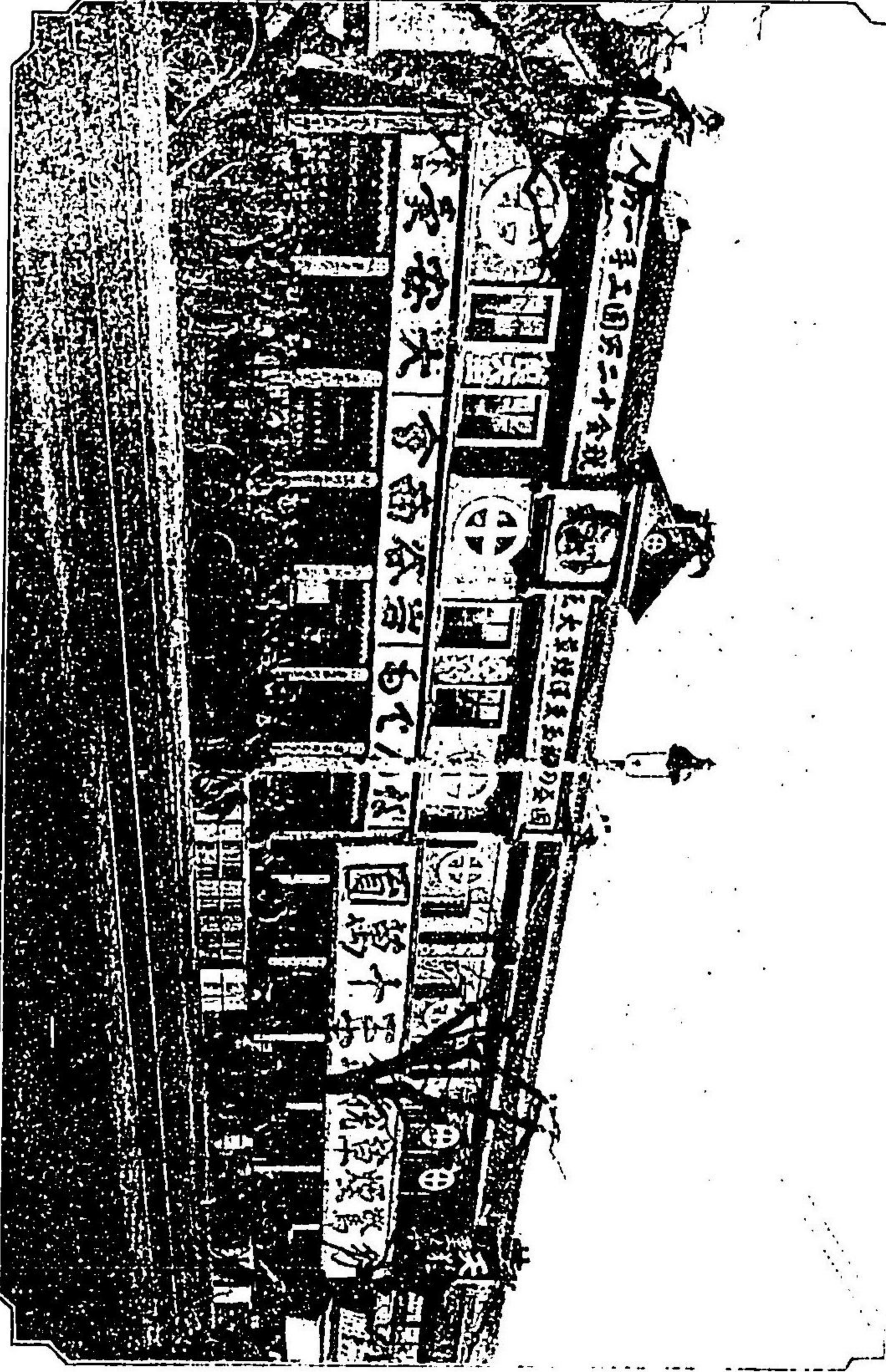
店 本 京 東 會 商 谷 岩

實に東洋煙草大王の名に背かず、市中下流の婦人、又は小官吏の妻君が内職に此巻煙草の紙巻をなす者、實に五万人に下らずといふ、銀座三丁目東側の大半は、此商會の建物にして、朱塗の柱、龍大の文字、其思ひ切つたる様には、地方人士の上京せるものは勿論、都人士さへ一驚を喫すべし、然して以上諸天狗の外に「御賜」と命名せるものあり、五十本入拾五錢の太巻なり、此煙草に御賜の名ある所以のものは、明治二十七八年征清戦役の際、在陣軍人の疾苦を慰勞せしめらるゝ思召を以て、畏くも 陛下より恩賜せられたる、其巻煙草の製造を宮内省よ

り命ぜられたる紀念として、同形の巻煙草に御賜の名を附して發賣せるなり、其品質大小等に當時の製造に則りて、寸毫も軒輕を見ずといふ。

江 副 商 店 京橋區南金六町
外國煙草の輸入店にして、重に御賣をなせども、又小賣にも出精せり、各國煙草會社と直取引の契約をなし、入船毎に莫大の荷を揚陸し、盛んに直輸入の便を計る、ショウカア、プリシラア、リッチモンド等尤も有名なり。

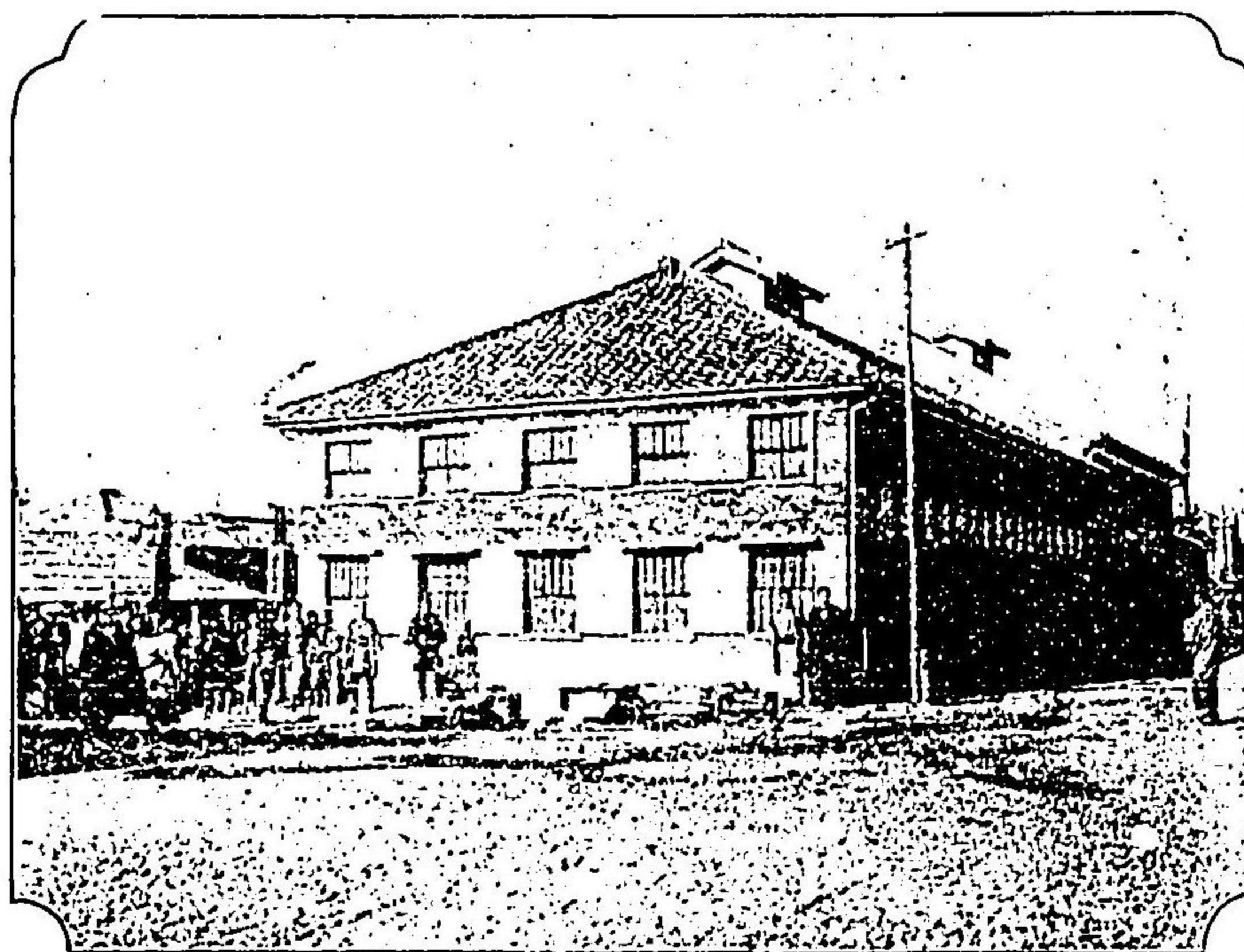
木 村 商 店 京橋區南傳馬町
パイレットと呼べる外國煙草は此店の一専賣なり、外國煙草商中屈指の店鋪に



大日本會社 東京



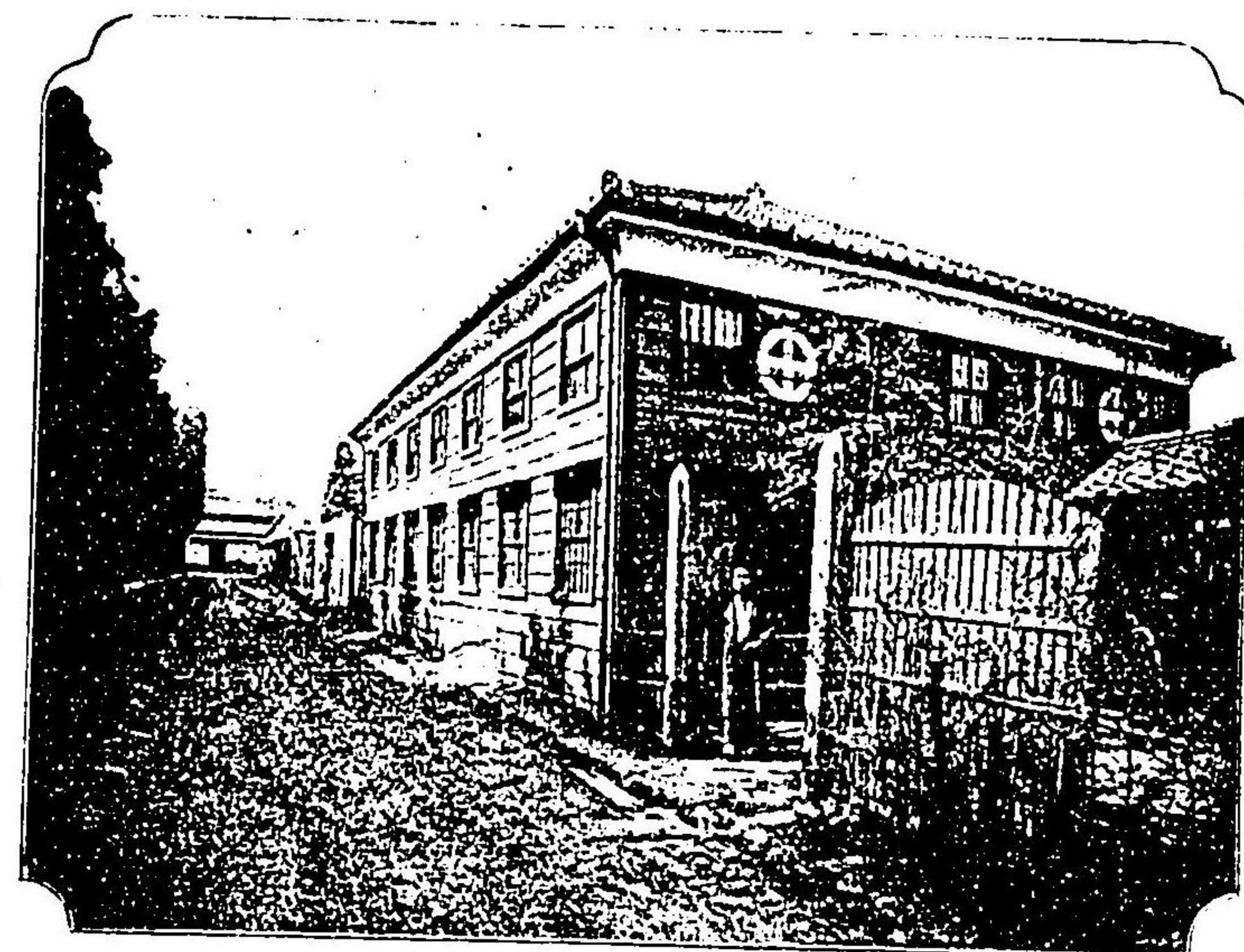
岩谷商會第一工場



岩谷商會第二工場



岩谷商會第四工場



岩谷商會第三工場

して、近來懸賞を以て看板の意匠を募集せるは一の廣告新案なるべし。

村井商會 日本橋區室町

これ當年ヴァラン騒動なるものありて、雷名全國に轟く、本店は京都に在りて、東京は其支店なり、サンライズ、ペアソン、ローロー等、價格廉にして飲口佳良なれば、廣く全国各地に行はる。

柳屋 日本橋區通二丁目

外池といひて日本煙草の老舗たり、店頭舊習によりて赤陵籬をかけ、老實正直に營業す、此家の煙草は凡て源氏名を用ひ、譬へば明石、若紫といへるが如き銘を附す。

千葉商店 京橋區銀座四丁目

日本巻煙原の製造販賣に有名なり、此店の煙草牡丹印は一時全國を風靡して評判頗る宜しく、當時と雖も岩谷の天狗煙草に次いで多數の顧客を有せり。

此外肥前屋の外國煙草に於ける、中島屋の日本煙草に於ける、或は中央煙草會社大阪煙草會社支店の和洋煙草に於ける、列舉すれば殆んど本書を填むるも尙足らざるべし。

第廿八 書肆

我東京は留學の學生多きを以て、書肆の多き事譬ふるにもなし、本郷神田の兩區の如き、一町内殆んど軒を並べ廂を接

して、店頭顧客を争ふの状あり、小説舗あり、雜誌店あり、洋書を購ぐあり、古本を商ふあり、千差万別、各々出色を以て誇らんとするに似たり、今此處に記す所の者は、出版書肆中の巨擘を列挙するに止むるのみ。

吉川 半七 京橋區南傳馬町
通俗近半といふ、和漢書の出版及教科書の發賣を以て名あり、此家より出す所の書籍は、誦讀優美にして、商品の趣きあり、日本字書言海の如きは、此店に於て有名なる出版物なり。

富山 山房 神田區裏神保町
政治法律文學等の書籍及中等教育の出版

を以て有名なり、舊幕府は月刊の雜誌にして、毎號数千部を賣悉すといふ。

阪上 半七 神田區新石町
和文の書籍並びに中小學教科書を出版して、大いに江湖の信用を博せり。

八尾 書店 京橋區銀座三丁目
法律書類の出版に於ては、當時比肩すへき者なし、特に官報の賣捌を以て聞ゆ、此家の主人八尾新助氏は、征清役當時の功を以て、特に勳六等に叙せらる。

敬業 社 神田區神保町
敬業社も亦中等教育の教科書出版を以て有名なり、大阪に支社を有し、優に出版社會一方の覇たり。

金 港 堂 日本橋區本町

一時小説書籍を出版したりしが、今は一意教科書にのみ熱心せり、小學讀本の如きは、日々数千部を製本して、尙需用に應ずる能はずといふ、方今教科書出版書房の牛耳を執る。

文 學 社 日本橋區本町
金港堂と双々並を摩し、相對峙して伯仲の間であり、多數の編輯員を置いて、教科書出版を専業とす。

博 文 館 日本橋區本町
書肆にして運送馬車を持つものは、實に此家を以て嚆矢とす、此家の得色は廉價の書籍を出版するにあり、雜誌は尤も得

意の出版にして、太陽、少年世界、文藝俱樂部、明治小説文庫外國語學雜誌等、毎月數種の雜誌を發行す、店內の組織能く整頓し、駁々として業務の隆盛を見る。

春 陽 堂 日本橋區通四丁目
小説書肆中殆ど比敵すべき家なし、中等教育の書籍にも富めど、其聲名は小説に於て顯はる、又美術的繪畫の畫帖等を出版し、嘗て米國シカゴ府の大博覽會に出

品したる美術世界全二十五卷の如き、大に歐米人の注意を喚起し、銅牌の賞を得たり。月刊雜誌には新小説春陽文庫あり。文學雜誌中の白眉にして最も發賣高多きものなり。

嵩山堂 日本橋區通四丁目
 嵩山堂は大阪の支店なり、巍然たる大厦を構へて、各書林中尤も外見に富む家たり、小説及繪畫の出版に名高し。

大倉書店 日本橋區通二丁目
 江戸時代には繪草紙類の出版にて有名なりしが、今は其像として各種の畫卷畫帖の類に富む、近時出版する所は、重に國文教科書及字書等なり。

扶桑堂 日本橋區南嶺町
 黒岩派香氏の探偵小説のみを出版す、所謂派香本屋と言はるゝは此店なり、數年前迄は書物の釘裝など左して意を用ひざりしが、近年は所謂赤本の區域を脱して、高尙なる製本を爲す。

金櫻堂 日本橋區通四丁目
 探偵物譚談物或は仇討斷等、所謂赤本なるもの、出版を専業とす、中流以下の得意を用し、發賣の部數頗る多し。

有隣堂 京橋區南傳馬町
 農業及山林等に關する書籍を出版す、各書林中一種の特色ありて、地方に多數の顧客を有せり。

建築書院 京橋區日吉町
 工業に關する書籍を出版するを専らとし、兼て法律政治醫學等の書類を出版す。

英蘭堂 日本橋區馬喰町

島利といひて、醫書出版を以て名高し、本郷にも支店を有し、醫書出版者の牛耳を執れり。

朝香屋 神田區新石町
 英蘭堂より遙かに後年の書肆たりと雖も、其出版の醫書は殆んど彼を凌駕するの勢あり、以上二書肆は、刀圭社會の讀者のみを有す。

須原屋 日本橋區通二丁目
 各書林中の老舗にして、和漢の雜書及神道佛家の經典等を出版す。

嵩山房 日本橋區通二丁目
 小林新兵衛といふ、教科書物の出版及法醫等の参考書をも出版し、兼て和漢の古書鑄刻に名高し。

第廿九 紙商

此處に記載する紙商は、市中問屋中の尤も著名なる者なり、小賣店は略して記さず。

洋紙細川商店 京橋區銀座三丁目
 洋紙小津洋紙店 日本橋區通三丁目
 和洋紙三河屋 日本橋區大傳馬町
 洋紙北川洋紙店 全
 洋紙中井商店 日本橋區十軒店
 洋紙榎原洋紙店 日本橋區万町
 洋紙柏 原 京橋區南傳馬町
 洋紙杉井商店 京橋區竹川町

和洋紙勝 島 日本橋區人形町通

第三十 銃砲火藥

戰役後尙武の氣運動興したるより、從つて銃獵の大流行を來し、都下の銃砲商は追々多きを加ふるに至りたり。「ダイナマイト」及工業用火藥買取は、所轄警察署の許可證を要し、又銃獵用の火藥雷管等を購ふには、狩獵免狀を示して買取るを要す、左にかゝくる銃砲商は大抵其店に賣る處の獵銃短銃の圖及其定價表等を印刷したる書籍又は一枚摺の表を顧客に送る。

大倉組銃砲店 京橋區銀座二丁目

二連元送、元折形、村田銃、レミントン銃形、無鉛頭、新式銃、室内射的用銃、短銃、を始めとして、和洋最新式の小銃及火藥雷管、其他銃砲用鑛業用火藥一式を販賣す。

十文字商會 神田區須田町
商會主十文字信介氏は前代議士にして銃獵の名手なり、されば此商會より出版したる銃獵新書は、實に狩獵家の指南車ともいふべし、一式の銃器火藥類は皆精練なるものなり。

川口龜吉 日本橋區本銀町
佛國新着時計形短銃、獵銃、ダイナマイト導火繩、鑛業用火藥各種を發賣す。

遊 谷 日本橋區本石町
英國ノール會社のダイナマイト五十磅箱入、同ザエリツクナイト五十磅箱入其他重に鑛山用の火藥雷管導火繩等を發賣す。

第三十一 藥舖

醫術の進歩と共に、双々兩輪の如く、相俟て離るべからざるものは、醫藥の運命なり、名醫ありと雖も、名藥ありざれば、普醫も其神腕を如何せん、此醫此藥は、正にこれ連理比翼の契ともいふべきか。

藥舖には皆藥劑師あり、藥劑師は醫師と

同じく、正則の修業をなして、内務省の檢定試験を受け、以て及第の榮を有せざる可らず。單に賣藥取次舖ならば即ち已む、苟くも藥舖として、醫士の處法を調劑するに於ては、必らず此藥劑師を雇はざる可らざるなり、今市中の藥舖中、其著名なるものを擧れば。

- 資生堂 京橋區出雲町
- 近藤藥局 本鄉區春木町
- 風雲堂 神田區淡路町
- 雨宮藥舖 麴町區三番町
- 博愛堂 日本橋區本石町
- いはしや 日本橋區本町
- 島久本店 日本橋區本町

大木口哲 日本橋區兩國廣小路
 尾澤藥舖 牛込區築土前町
 守田寶丹 下谷區池之端仲町
 遠山藥舖 淺草區並木茶屋町
 中田清兵衛 日本橋區通二丁目
 須原屋 日本橋區通二丁目
 此外醫療器械に於ける本町のいはしや本郷の万木等の如き、或は質母散(京橋區大鋸町喜谷)中將湯(日本橋區通四丁目津村)精錫水(京橋區銀座一丁目岸田吟香)清婦湯(日本橋區大坂町高木)順氣散(日本橋區通二丁目須原屋)梅花香(京橋區桶町瓢箪屋)の如き、舉て數ふ可らず。

第三十一 時計商

天賞堂 京橋區尾張町
 歐米の新流行を逸早く輸入し來るを以て名あり、同店は金銀ブランチ等凡て懐中時計を専らとす、其外一切の附屬品及眼鏡、指環、帶留、根掛等の美術品をも販賣し、廣く廣告を利用して盛んに營業す、特に此店に於ては、買戻し、取換品割引等の規定ありて便利なり。
 玉屋 京橋區銀座三丁目
 銀座の玉屋といへば、誰一人知らぬものなし、各種の時計の外寶石指環等、頗る高

價なるものを販賣し、其組織の手堅き事は、同業中の第一たり。

服部時計店 京橋區銀座四丁目
 玉屋より一丁餘新橋に寄りたる角にして、巍然として天に聳ゆる大時計塔、其四方には電燈を點じて光輝市街を照らす、近年の開業なりと雖も、能く各地方並に諸外國との取引をなし、本所太平町に於て柱時計の大製作場を有せり。

吉沼時計店 日本橋區兜町

懐中時計柱時計を以て有名なり、廣大なる工場を有して、多數の職工徒弟を養生す、一步を服部に譲ると雖も、都下屈指の時計店なり。

京屋 神田區旅籠町

銀座にも支店を有し、外國直輸入の時計店にて、重に寶石類、並に懐中時計を取扱ふ、此外各區に散在する大小時計店の數は、實に清夜の列宿の如き觀あり。

第三十二 小間物

全世界に於て尤も進歩したる頭髮の粧飾は日本婦人の級の髮なり、彼の歐米人が貴重する金髮の美しきも、到底我婦人の頭髮の如く、之を結び上げて優美高尚なる鬘を造る能はず、丸鬘や島田や、銀杏返しや、唐人鬘や、栞は糸三、おばこ、桃割、長船、天神等の數十種、各々

其形によりて、櫛笄の趣きを異にするなど、實に我邦の美風にして又特有なる粧飾とす、されば其髮飾に要する櫛簪等を鬪く家、一町内に必らず兩三軒ありて、之を小間物屋といふ、今其著名なるもの、二三を擧ぐれば。

白 牡丹 京橋區尾張町

白牡丹の本店にして、都下小間物商中實に一二を争ふの家たり、白牡丹とは、店の名代なる白粉の名にして、直に取つて家號としたるものなり、禮式用の櫛笄及美術的新意匠の彫刻詩繪等を施したる中挿櫛等にて有名なり。

白 牡丹 京橋南傳馬町

尾張町の白牡丹について、贅澤なる小間物を商ふ、軒を列ねて店を二軒に分ち、一は禮式用の小間物を鬪き、一は花簪草物紅白粉を賣る、都下屈指の店なり。

わんぶらいすしよつぶ 日本橋區三丁目

京都の支店にして、池の端仲町にも分店を有す、紅、白粉、花簪、洗粉、手柄、造花等凡て京都本店に於て製作したるものを商ふ、商號のわんぶらいすとは、邦語唯一の價といへる義にて、即ち正札の外決して懸値なきを表はすものなり。

紅 勘 淺草區藏前

紅勘の祖先は、竹の棹味噌瀝の胴にて造りたる三味線を鳴らして、市中家々に藝

を賣りたるもの、頓て産を作り家を起して、今紅勘といへば、誰も知る老舗となり、紅白粉及高等なる花簪にて有名なり。

百 助 淺草區駒形町

百助は白粉を以て名あり、紅勘と同じ町側に在り、紅勘と共に淺草の二大老肆とす。

奥 田 屋 京橋區南傳馬町

外國に取引先を有し、重に泰西諸國最近の流行品を發賣す、美術的伎藝を要する時繪彫刻には、帝室技藝委員に托して、嶄新にして高逸なる美術品を造る。

相 德 京橋區尾張町

古來鼈甲細工に於ては、此店の右に出づ

る者なし、禮式用の小間物は、殆ど此店に限れるが如し。

長 岡 商店 神田區須田町

左して老舗といふにはあらねど、近來頗る世評よろし、特色は鼈甲細工にして、櫛笄等最も精巧優美なる品を商ふ。

兼 安 本郷區本郷三丁目

村 田 日本橋區大傳馬町

芳 信 日本橋區葎町

等又小間物の贅澤屋として著はる、化粧品を鬪く家としては。

小町 水 平尾 登平 日本橋區馬喰町

キレー水 山崎帝國堂 神田區花房町

御所櫻齋藤商店 日本橋區瀬戸物町

兎月石輪 清水開花堂 日本橋區通油町
 美人かつら 佐々木商店 京橋區銀座三丁目
 玉の肌 稻生商店 芝區四久保巴町
 樂屋道名題 梅 素 亭 淺草區黑船町
 洗粉
 花王白粉 脇田眞盛堂 日本橋區橋山町
 吾妻ぶし 高松商店 神田區橋本町
 杜 鵬伊 賀屋 日本橋區海運橋際
 仙女香 阪本仙女香 京橋區南傳馬町
 柳清香 柳 屋 日本橋區通三丁目
 菊 童菊 童 京橋區常盤町
 櫻 香守田櫻香 下谷區車坂町
 夕 顏 駿河屋 日本橋區瀬戸物町
 花王石輪 長瀬富郎 日本橋區馬喰町
 等化粧品商として著名なり。

第三十四 西洋雜貨商

大 津 屋 京橋區南傳馬町
 舶來物の流行を撰みて、多く上等品のみ
 を販賣す、賣品悉く精撰にして、此邊屈
 指の店たり。
 田 屋 京橋區銀座一丁目
 体裁と實用とを兼ね、便利にして商品な
 る商品を陳列するを以て、常に顧客の注
 意をひく、殊に外國人の來り購ふ者多
 し。
 芳 野 屋 日本橋區通三丁目
 雜貨及帽子を販賣す、高等なるハンカチ
 ーフは此店の特色にて、莫大の販賣高な

りといふ。

藤田商店 日本橋區彌売町

此邊相搦師等多きを以て、値高きも品物
 の上等ならん事を希ふ、藤田は實に斯
 る顧客を得意とせざるなれば、其品の佳良
 なる推して知るべし。

菱 屋 日本橋區通三丁目

此店は九善の支店にして、香水を以て名
 を博せり、商品凡て善良にして、日本橋
 附近第一の店舗と稱せらる。

便 利 堂 神田區裏神保町

場所は神田にて、學生連の得意多けれ
 ば、到底以上の諸店の賣澤品多きに及ぶ
 べくはあらねど、正實と實用とを以て、

其商號の如く尤も便利を客に與ふる事を
 期せり。

關口商店 京橋區金六町

婦人小兒向の品物多し、特に西洋人形は
 此店の誇る所にして、他店の物と品質大
 いに異なれりとして、外人間に賞賛せら
 る。

此外、南傳馬町の樹水屋、鞆繪屋、銀座
 の辻屋、伊勢屋、武田屋、永峯商店、日
 本橋の藤田唐物店、鹿島屋、神田の松屋
 西宮、塚谷、本郷の開福堂、小島、芝の
 野村、本木、壽屋等、其著名なる者なる
 べし。

第三十五 袋物附煙管

京極商店 京橋區銀座三丁目
人造合成金の製作をもなせども、博多織にて、尙尙優美なる袋物を販賣す。

玉 資 堂 下谷區池の端仲町
嶄新優美なる意匠を凝して、諸種の袋物を製す、廻町本郷邊の官吏等に信用あり。

龜 甲 屋 京橋區銀座二丁目
此店の袋物は華美に流れず、實用を重んじて評判頗るよし、一見ふるへ附くといふべき品はなけれど、長く用ひて始めて眞價を知るべし。

丸 幸 日本橋區十軒店
上等品を販賣するを以て有名なり、通人向又は藝妓向き等にして、従つて價格も又高し。

伊 勢 新 京橋區尾張町
新意匠の製作をなし、新流行の兆を作らんとす、其抱負の大なる丈従つて其製品も尋常一様の品ならず、四季袋の如きは、伊勢新の特色とす。

武 田 屋 京橋區銀座一丁目
伊勢新と相對峙して相下らざるの店、尙優美なる製作品を出す。

村 田 屋 日本橋區米澤町
これ村田張煙管の本来なり、此村田張は

吹売の出よく、且つ堅牢なるを以て、當時大いに嗜好せらる。

住 よ し 日本橋區立花町
住吉張といへば直に村田張を連想し、村田張といへば又住吉張のある事を思ふ、此兩家は煙管商の兩大關ともいふべし。

第三十六 洋傘

洋傘は實に明治以來の流行にして、洋服靴などと共に、僅々三十年の商品たるに過ぎざれど、日傘としては方今此品より外に用ふる物なし、蓋し晴雨兩用にして、又携帶の便あるが爲なれど、實用と飾裁とを兼ねる雨得もあればなるべし。

甲 斐 絹 屋 神田區小川町
其家號の如く甲斐絹張の傘にて著はる、價廉にして丈夫なるは此家の特色なり。

柏 屋 京橋區銀座四丁目
舶來品の精巧なるも、到底此店の巧みなるに如かざるなり、改良傘と稱するは旅行用の便を圖りて創作せるものにて專賣特許品なり。

仙 女 香 京橋區南傳馬町
仙女香といへる白粉を賣りたるより、今も尙ほ之を以て家號とす、内國外國共に特約販賣店を設け、盛んに洋傘製作に力む、紋織絹、縞子、純子等の美麗なるものに名あり。

以上は幾千軒中の著名なるものなり、其
他各區各町に散在する店は、一々列擧の
違わらず。

第三十七 下駄屋附傘

南部の表、桐の糸紐、或は雪駄の二枚重
三枚重、或は鼻緒の八幡黒絹眞田一樂風
通天鶯絨等、日と共に月と共に贅澤の一
方のみ進み、皆は一足の下駄に三十圓
の價あるに至る、昔東奥の某侯が伽羅の
駒下駄を穿ちしといふも、今に於ては敢
て奢侈と稱するにも足らざらんか、下駄
屋は大抵雨傘を併せ商ふ、雨傘は美濃張
を尊び、其種類には、蛇の目深蛇の目奴

吾妻大黒等あり、蛇の目は上品なりとし
て人の喜ぶ所、其色にも黒紺の三種あ
り、濫蛇の目は洒落者多く之をかざす。

香 取 屋 淺草區須賀橋際

江戸時代よりの老舗にして、全國に其名
高し、此店の履物は決して鼻緒のゆるむ
事なしとて稱せらる、道中下駄といへる
は、朴木齒の低き下駄にして、道中に妙
なりとて、昔より人に珍重せらる。

安 田 日本橋區照降町

小賣店中此の如く、繁昌なるは稀なり、
此店には駒下駄の上等物多く、魚河岸向
の粹なる拵あり。

大 和 屋 日本橋區下植町

小さな店なれど、老舗にして上等品の
みなり、價格廉ならざれど、廉ならざる
所乃ち此店の特色にして、穿ちたる上に
て、其價値を知るべし。

六 門 屋 日本橋區登屋町

花柳社會の婦人、或は贅澤なる通人の爲
に賞賛せらる、老舗にして上品のみな
り。

池 田 屋 京橋南傳馬町

此店の塗下駄は、本堅地を用ひ、其上
に本塗を施せば、決して容易く剝脱する
事なし、柱目も木口の上きを尊び、鼻緒
も上品にして丈夫なり。

伊 勢 屋 日本橋區新乘物町

贅澤なる人には適せず、價格の高直なる
は恐らく東京市中隨一なるべし、他店に
て二圓の品も此店にては三圓五十錢位に
向ふ、同様の品にして忽ち一圓五十錢の
相違あるは、蓋し所以なくして可ならん
や、穿たざれば踏るに足らず。

尾 張 屋 淺草區田町

此店は吉原邊に得意多し、女下駄の鼻緒
は此店に及ぶものなし、遠く日本橋京橋
より誂へに來る客ありといふ。

万 藤 日本橋區新渡町

此家の品は凡て風雅の趣ありて、茶席
の庭下駄などは、蓋し此店の看板ともい
ふべし。

秋 永 本所區相生町
相模常用の下駄を製す、一種の拵あり
て、江東第一の店たり

竹 内 日本橋區彌生町
傘専門にて上等向ならば、如何なる贅澤
品にてもなしといふ事なし。

第三十八 足袋商

足袋に種々の贅澤を好み、製作の巧拙を
吟味し、穿工合の宜しきを尊ぶは、特に
東京人士なりとす、絹足袋は贅澤の頂上
なれど、衣服の裾を破らぬを思へば、反
つて安價なるべく、絹かけ足袋は穿工合
よろしく、昔は粹人の好みたるものなれ

ど、流石に今は用ふる者なし、飛白足袋
及キヤラコ足袋は近年の流行にして、裏
白紺足袋は昔は無粋なりとせしが、今は
反つて大いに流行す、今も昔も變らぬは
白足袋にて、何處迄も品位よきものなり、
昔は多く紐メを尊びしが、近年は甲馳を
用ひ然して甲馳にも數種あり、今著名の
足袋屋を記さんに。

- 茗 荷 屋 日本橋區浪花町
- 全 全 米澤町
- 海 老 屋 全 吉川町
- 全 京橋區銀座一丁目
- 中 川 屋 全 南傳馬町
- 全 神田區御成道
- も の じ 京橋區尾張町

- 武 藏 屋 神田區御成道
- 万 屋 日本橋區人形町
- 仙 屋 全 登屋町
- 鼠 屋 日本橋區通四丁目

第三十九 吳服

昔は京の着付れといひたるもの、今は東
京の盛とはなれり、華をきそひ、美を
てらふの餘、織元は年々新機を出し、吳
服商は毎年新意匠を凝らす、其新意匠と
新機とは、駁々として水の低きにつくが
如く、一瀉千里の勢を以て、我東京の吳
服店に來り、又忽ち市内幾十万の家々に
向つて去る、若し衣服を以て只寒を凌ぐ
のものとするれば即ち已む、若し然らずし

て威嚴を存し、邊幅を修飾するの具と
なせば、乞ふ吳服店の著名なるものを舉
げんか。

太 九 日本橋區通旅籠町
大傳馬町の南側通旅籠町の角にあり、百
餘名の店員を便役して、大々的營業をな
す、原來上店にして、家に婦女子なし、
此家の商品は凡て正札附にて、間口三十
六間奥行廿二間の唐構なれど、十錢二十
錢の買物をするとも、千圓二千圓の品を
購ふとも、客によつて其取扱を二三にせ
ず、此店は實に二百年來の舊家にして、
東京吳服店中の巨擘たり

- 三井吳服店 日本橋區駿河町

これ當年の越後屋なり、近來組織を改善して單に三井吳服店と稱す、二階には陳列場を設けて顧客の便をはかれり、大丸に劣らぬ番家にして、尤も進歩主義をとり、新意匠の模様を染出さんが爲に、特に有名なる畫家を備ふなど、其大組織なる驚くべし。

白木 屋 日本橋區通一丁目
白木屋は寛文二年の開業にて、吳服店中の老舗たり、商ひは商利をとりず正直によき物を賣れ末は繁昌」との白木屋憲法を格守して、店員一同熱心に營業す、大丸三井と共に、東京吳服店の牛耳を執り、各家共に賣出し當日には一日十方圓

以上の商ひありといふ。

松阪 屋 下谷區上野廣小路
伊東松阪とて伊勢松阪の支店たり、以上の三軒に次ぐべき大家にて、重に木綿物を以て有名なりとす、商品は悉く商札附きにて、神田川以北の吳服店たり。

松屋 神田區今川橋通
近年の店なれど、營業手廣にして、上中下いづれにも向く家なり、小賣店として市中第一に指を屈すべく、其繁昌なる事は、殆んど以上の四軒をも凌ぐかと疑はる。日本橋區通四丁目にも支店あり。
岩谷 商會 京橋區銀座三丁目
大島袖薩摩飛白等を商ふ、價廉にして品

質佳良、本業の天狗煙草と共に世に稱せらる、蓋し織物の産地より直接の輸入にかゝれば、他の吳服店よりも格安なるは勿論なり。

此外數十軒の吳服店は、大同小異なるにつき之を除く、之を讀んで其大略を知るべし。

第四十 樂器

山形 屋 日本橋區長谷川町
和清の樂器を製するに尤も用意周到なり、殊に日本樂器は此家の品格別の音色ありとて稱せらる。

鶴川 京橋區和泉町
琴の製作に於ては此家を凌駕する者なし
吻々 堂 京橋區東仲町

琵琶の製作にて名高し、忽ちにして泣き忽ちにして断へ、或は曲泉の流るゝが如く、或は天馬の空をかけるかと怪しまるる琵琶の音色の床しきは、此家を以て最上とす。

此外左の數軒は皆著名なるものなり。

- 菊屋 古助 日本橋區方町
- 山形屋 平兵衛 京橋區南傳馬町
- 菊岡 岩吉 淺草區茅町
- 金本 平八 下谷區西黒門町
- 田邊 眞齋 牛込區山伏町
- 頼母 木聲 巷齋 淺草區片町
- 笹屋 淳一 淺草區下平右衛門町
- 共益 商社 京橋區竹川町
- 十字 屋 京橋區銀座三丁目
- 高木 商店 神田區鍋町

第四十一 文房具

古 梅 園 日本橋區通一丁目
南都古梅園の分店なれど、其賣買高に至りては、殆んど本店に十倍す、文人墨客の愛顧を受け、最も名墨を藏する多し、一挺二百圓以上の墨さへ珍らしからずとす。

法 古 堂 日本橋區通旅籠町
法古堂とは高木の商號なり、筆墨に於ける高木の名は、山間僻陬の地、兒童走卒と雖も知らざるなき老舗なり。

硯 海 堂 京橋區日吉町
所謂平助筆と稱ふる水筆を發賣す、筆墨

共に特に精選したる品を賣り、其價は然も廉なり、龍虎筆と題するは、當時一般に使用せらる。

鳩 居 堂 京橋區尾張町
西京鳩居堂の支店にて、筆墨文房具の外、支那骨董及香燭類を賣る、此店の外にも東京各區に支店あり。

心 正 堂 本郷區湯島女坂下
水筆眞書等細筆を以て名あり、此家にて製造する筆は、廉價のもの雖も、容易に摩損する事なきを以て、學校用又は筆記用には妙なり。

玉 川 堂 神田區今川小路
九段坂の下 狹橋の袂にあり、和漢の文

房具及筆墨の良品にて其名高し。

第四十二 團扇 附 扇子

榛 原 日本橋區方町
當時團扇々子の高品にして優美なるものを得んと欲せば、必らず此店に行かざるべからず、團扇の畫には當時畫家中の名手を僱聘し、若くは依頼して揮毫せしめたるものを、直に本版摺にし、團扇となして賣出す、贅澤物は此の家に限るといふ。

金 花 堂 日本橋區通四丁目
此家は榛原と同じく、色紙短冊團扇等を以て著はるれども、就中扇子は此店の誇

れる所なり、如何なる疎暴の者の使用するども、決して要のゆるむ事なし。

文 雅 堂 京橋區南傳馬町
こも又扇子製造にて著名なり、色紙短冊も頗ふる古風なるものを製するより、雅人顧客の間に喧傳されぬ。

第四十三 金庫販賣店
金庫は火災盜難、其他の天變地異、若くは人爲によりて毀損せらるゝ事なければ、各會社銀行官廳等に於ては、實に欠く可らざる要具なり、其價格は勿論廉ならずれど、數百金を揃つども、數千円を保護するを得ば、實に廉價なるもの

團扇 金庫販賣店

ナシヤヤ。

山田 米吉 京橋區銀座三丁目
 大倉 金庫店 日本橋區本町四丁目
 竹内 善治郎 全 馬喰町二丁目
 此外大小の金庫店あり、確實なる信用を得て營業すれども、以上の三軒は就中著名なるものなり。

第四十四 度量衡商

和洋權衡 原田仙之輔 日本橋區堺町
 徳島尺度 坂戸種三郎 全 瀬戸物町
 斗 量 高津伊之助 全 全
 斗 量 衛 樽 敬 吉 全 元尊屋町
 西洋尺度 竹内治右衛門 京橋區銀座一丁目

第四十五 繪具染草

西洋尺度 清水物太郎 全 銀座四丁目
 斗量衡器 鈴木 榮吉 下谷區仲徒士町
 西洋衡器 中村 榮吉 日本橋區通四丁目

油繪水彩 村田 宗清 日本橋區通旅籠町
 藍等繪具 伊勢町
 アニオン、即半田治兵衛 全
 度藍染粉 染草 小西安兵衛 全
 丹粉 染粉 染小西安兵衛 全
 コーラル、
 ベンキ、ワニ仲 万兵衛 全 本銀町
 ス、給具、染草
 亞仁林、印度
 藍、舶來染粉、柴田藤兵衛 全 瀬戸物町
 和洋洋繪具 關谷正三郎 京橋區南傳馬町
 草繪粉 中村治兵衛 日本橋區万町
 製陶用繪具 新倉和三郎 日本橋區本石町
 工業用染粉 染草 各種繪具

第四十六 寫眞

寫眞を撮れば三年壽命を縮むといひ、或は切支丹の邪法と思まれしものも、人文の進歩につれて、遂に排斥したりしものを、忽ち歓迎するに至る。

寫眞師の數多きは淺草公園にして、各家軒を列ねて客を呼ぶ、多く地方人の遊歩するものを引込む所にして、東京人士は餘り此邊の家を喜ばず、只江崎寫眞店のみは、上等寫眞として稱せらる。

十數年前は、ガラス寫眞紙撮寫眞共に技術拙劣にして、之を當時に比較すべくもあらず。近來は技術日々に進歩して、

早取寫眞、引延寫眞、着色寫眞等、之をなさんとして能はざるものなし、然して單に紙及硝子のみならず、或はハンカチーフに、或は時計の表に、或は鏡に、或は陶器に、各好む處に従つて、之を撮す事を得、今寫眞店中特に著名のものを掲ぐれば、

竹林寫眞場 麴町區一番町
 小川 一 眞 京橋區日吉町
 鈴木 眞 一 麴町區飯田町
 中黒寫眞場 本郷區本郷四丁目
 山本 誠 陽 神田區錦町
 江木松四郎 神田區淡路町
 全 支店 京橋區土橋際

- 中島 待乳 日本橋區吳服町
- 江崎 禮二 淺草公園
- 二見 朝熊 京橋區銀坐一丁目
- 田中 武 芝區日蔭町
- 丸木 利陽 芝區新櫻田町
- 島田 駿 日本橋區住吉町
- 玄鹿 館 京橋區木挽町
- 大川 寫真館 神田區三崎町

第四十七 繪草紙

繪草紙は東錦繪といひて、實に我東京の特産品たり、往古徳川氏中興以降、江戸の人士が泰平の餘澤に化して文弱に流れたりしより、奢侈の風靡然として上下

を襲ひ來りければ、此處に浮世畫師なるもの顯はれ、専ら當時の風俗を描きて木版色摺に印行し、一枚畫となして出版したりしもの、益々其の技術を進歩せしめて、色摺に苦辛し、彫刻に經營し、二枚續繪出で、三枚續繪出で、遂に東都唯一の名物たる大錦繪なるものを出すに至り、東錦繪といへば、地方の人士が東京土産に買ひ受くるを、此上なき樂しみとなすに至り、淺草海苔と共に、到底他に比類し能はざる特有のものとなれり。市中之を商ふ家は、店頭の特載を美麗にし、錦繪を店頭につるして、以て客の足を止めしめん事を計る、之を奢侈の結果

とはいふものゝ、又以て東京人士が如何に美術的思想あるかを知るに足るべし、美術、必竟奢侈の結果にして、多くは生産的ならざるはなし。何ぞ獨り繪草紙のみを咎めん。

大 黒 屋 日本橋區兩國廣小路
 都下繪草紙店中の老舗にして豊國の源氏五十餘帖などの版木を藏し、歌麿英泉等の錦繪をも有す、往古に於ても現時に於ても、繪草紙店中の巨擘たり、世俗大平と呼ぶ
 此外市中の小賣店は枚擧の遑あらず、注文以下の出版元も大抵大同小異なれば略す。

第四十八 書畫骨董商

- 書 畫 田澤靜雲 日本橋區大傳馬町
- 全 須原鐵二 神田區錦町
- 骨 董 佐野 日本橋區東仲通
- 中道具 林屋 日本橋區青物町
- 全 泉田 全 箔屋町
- 金銀象牙 澤田 全 米澤町
- 骨 董 吟松堂 全 箔屋町
- 全 柴田 全 箔屋町
- 全 伊善 全 箔屋町
- 全 吻々堂 京橋區和泉町
- 全 玉山 淺草區藏前
- 全 山榮 日本橋區西仲通
- 芝居道具 相彦 芝區久保町

- 全 水戸幸 日本橋通東仲通
- 西洋古道具伊勢退 京橋區尾張町
- 全 大 半 全 竹川町
- 全 丹後屋 芝區愛宕下町
- 全 伊勢善 神田區錦町
- 全 玉置商店 芝區烏森町
- 全 中野屋 全 田村町
- 支那道具 義昌堂 京橋區尾張町
- 全 文玉堂 全 銀座二丁目
- 全 玉川堂 神田區今川小路二丁目

第四十九 印刷

此處に印刷と稱するは、石版活版寫眞版の三種をいふ、活版の技は古來支那に在

りたりと雖も、元より幼稚にして談ずるに足らず、東洋に於て之が卒先となり、字母製造の備を作りしは、我長崎を始めとす、石版は活版より愈々新らしき輸入にして、近年漸く精巧なる色摺をなし得るに至りたり、寫眞版に至りては、實に其最新中の最新なるものなり、されど本邦人か特殊の腦髓と、非凡の技術とは、須臾にして我邦の出色となし、歐人をして反つて來り托せしむるに至りたるは快といふべし。

- 秀 英 舍 京橋區西紺屋町
- 帝國印刷會社 京橋區元海軍原
- 東京印刷會社 日本橋區兜町

築地活版所 京橋區築地三丁目

國 文 社 全 宗十郎町

東京著名の活版印刷所にして、皆數千人の職工を役し、數百馬力の機械力を用ふ詳しくは會社の部にあり。

信 陽 堂 麴町區有樂町

石版印刷所中尤も信用ある家なり、宏壯なる印刷所を有し、盛んに色摺の技術物を印刷す、此家の特色は、如何なる大版の摺物にても、或ひは多數の印刷物にても、決して逡巡せぬ事なり。

泰 錦 堂 京橋區西紺屋町

秀英舎の石版所とよばる、近年色摺印刷の技頗る進歩して、精巧目を驚かすべき

ものを印刷す

玄 々 堂 日本橋區新右衛門町

玄々堂は石版印刷所中尤も古き店なり、精巧なる印刷をなせども、技量稍舊式に屬す、然れども各地方には多數の顧客あり。

小川製版部 京橋區日吉町

寫眞版の製版印刷に於ては殆ど並ぶものなし、コロタイプ、オートタイプ、寫眞銅版、亞鉛版等尤も精巧美麗なるものを刷出し、時日を與ふれば、色入の手際なる印刷をもなす。

猶 興 舍 神田區鎌倉河岸

寫眞版の嚆矢ともいふべし、尤も多數の

印刷を必らず期日通りに刷上るを以て雜誌社等に得意多し。

玄鹿館印刷所 京橋區築地元海軍原多數の刷出高に誇るよりも、美術的精巧なる寫真版を印刷す、著名なる畫家等を僱聘して、印刷所自身も新意匠を凝すに餘念なし。

第五十 植木商

園藝は商品にして優美なり、天地の美、宇宙の麗を前庭數十間の裡に縮め、居ながらにして八景の美を賞し、三景の雅に吟ぜしむ、市内熱帯の内、忽ちにして深山幽谷を現し、忽ちにして荒涼たる平

野を現はす、園藝の一種に盆栽なるものあり、龍蟠るが如く、虎嘯くが如き老木を方尺の鉢に移し、或は嬌々として美人の笑ふが如き櫻桃梅李を、其自然の風致によつて、人工の技を加へ、人をして咫尺の間に、月に吟む花にうたふの興を添へしむ、園藝といひ、盆栽といひ、共に皆東京人士が贅澤の標示たり。今其著名なるもの數軒を擧れば、

聚 芳 園 北豊島郡駒込染井村 万年青及其他の盆栽に於て有名なり。

清 大 園 北豊島郡下駒込村 此家には豊太閤愛玩の松の盆栽、朝鮮王秘藏の蘇鐵等ありて有名なり、又蓄薇花

處に足を入るれば、神韻縹渺として、殆ど歸路を忘るゝに至る。

香 舍 下谷區上根岸町 万年青の栽培に於て有名なり、一鉢數百圓のもの數十種、十圓前後の如きは、殆ど眼中に置かずと云ふ。

金 魚 屋 龍 金 山本甚兵衛 麻布區宮村町 變リ 鯉 原 源太郎 全 宮村町 變リ 鯉 田中彌兵衛 全 網代町

ランチウ 吉田新之助 本郷區本郷四丁目 鯉 平井庄太郎 下谷區龍泉寺町 ランチウ 錦魚屋龜吉 淺草區千束町 龍金 和 金 高橋大次郎 本所區菊川町

數十種の培養にて著はる。

聚 芳 園 本所區小梅町 老松古梅の盆栽多し、又蓄薇菊をも栽培す。

常 春 園 北豊島郡上駒込村 櫻草の珍花數百種、紅白紫黃其妍を展はして、春和の蕙風掬すべき者多し。

梧 竹 園 北豊島郡上駒込村 花の富貴なる牡丹の各種は、此園の丹青によりて、古今未曾有の珍花を開かしむ。

植 文 本所區四ツ目

牡丹の富麗なる、芍薬の纖嬌なる、蓄薇の妖艶なる、花菖蒲の可憐なる、一度此

- 鯉龍金和金 金原吉太郎 本所區築川町
- 龍 金 三浦清治郎 本所區北二葉町
- 龍 金 梅澤 庄藏 本所區横川町
- 和 金 牛山喜之助 本所區吉岡町
- 龍 金 石井次郎吉 本所區長岡町
- 緋 鯉 高橋鏡次郎 深川區四町
- 龍 金 宇田川勘五郎 南葛飾郡龜戸村
- 龍 金 蛭間庄之助 深川區深川木村
- 緋 鯉 鈴木磯吉 本所區中ノ郷

第五十一 鯉節

鯉節は土佐の名物なれども、其販路は一に東京を以て尤も昌なりとす、東京人士が奢侈なる、何品にても食料品中に鯉節

を用ひざるは殆んど稀なり、鯉節商は多く鶏卵海苔鰯等をも併せ賣れど、單に鯉節のみを商ふも多し。

- 高津伴兵衛 日本橋區瀬戸物町
- 窪田 彌七全 本小田原町
- 片岡徳兵衛全 小網町
- 山本徳次郎全 室町一丁目
- 窪田 よし全 室町一丁目
- 津島 儀助全 通三丁目
- 鹽崎國三郎 神田區東紺屋町

右は多く問屋にして小賣する家のみなり、單に小賣店に至りては、到底枚擧の勞に堪へず。

第五十二 海苔

海苔は東海の名産にして、我東京特有の好下物たり、全国各地の沿岸、海苔の産出に乏しからざれど、決して東都名産の淺草海苔に及ぶものなし、今淺草海苔なる名稱の由来を繹ゆるに、諸説紛々たり、或は曰く、今より三四百年以前は、東京の地多くは江川池沼にして、今の隅田川の如きも、淺草邊迄は海江なりしが、此邊に住む漁民等いつとなく海苔を探ることを覚え、路傍に之を掛けて賣り初めたりしより、淺草海苔の名は起りたり、而して其當時淺草金龍山下に住む漁家を淺

草組といひ、又淺草橋近傍に住むものを神田川組と稱へ、慶長元和の頃より、此地漸く般販に趣き、遂に江川池沼を埋立て市街をなすに至り、其業は轉じて品川大森の地に移りたれども、尙舊の名を襲ひて淺草海苔と呼ぶなりと、説くものあれど、是は大なる訛傳にして、其實は品川大森邊より海苔を取寄せ、此所にて商ひたるを以て、斯くは淺草海苔といはれしなり、地名考といへる古書に「目黒水上は目黒世田ヶ谷の邊大崎の中を流れ、南北品川の境に橋あり、洲崎獵師町を廻りて海に注ぐ、此川は鮮魚及海苔の類を産出し、殊に海苔は南砂水大森邊に

て採取し、之を淺草に送ると記せり、又幕府の文政十年七月、及び弘化二年八月、海苔取調書の中に曰く「海苔採の起りしは、延寶天和の頃にして、漁業八ヶ浦組合(羽田浦、品川浦、御林町)にては、徳川家御城御入國以來、日々魚貝を供進するを以て例となせり、然るに會ま風雨等ありて、數月漁業を休みしことあり、此より常に魚貝を畜養して不時の御需用に應ずる爲めに、畜養所なるものを設けたるか、何時とはなく其畜養所に繞らしたる木竹の柵などに海苔の附着せるを發見し、試みに柵等の枝を海中に差込みたるに、好く之に附着したるを以て、其初

穂を採りて、淺草の海苔問屋永樂屋庄右衛門に送り、徳川家へ献上せしめしが、事の外御意に叶ひ、其後は年々例になりて大森村より献上する事となれり」と、又天保十四年六月御代官所へ書上げたる寫に「海苔採税は延寶天和の頃は無税なり、延享三寅年より稼人軒別割、寶曆七丑年十二月より簡所割を以つて上納すべし」と見えたり、是等を考合す時は、淺草海苔といふは、只だ同所にて廣く商はれしか故に、ものつと斯く稱するに至りしを知るべし、蓋し其當時は淺草に海苔商人甚だ多く、其中にも並木町の植木屋四郎左衛門、正木龍藏などいふ者大株

なりしと云ふ、落穂集の中に「十二月十八日の觀音市には、上總下總常陸相模の國々より參詣するもの、多くは海苔を商ふ家々を宿に借受けたり」と記せるを見ても、淺草に海苔商人の多かりしを知るべし。

東京府下に於て、創業以來海苔採を以て專業とせるは、荏原郡品川浦大井村不入斗村大森村麴谷村の五箇村なり、此五村は海苔採場所の變換及び面積の増減等につき、各々協議を遂げ、官の許可を得て營業し來りたりしが、明治維新の際、大森村は海軍總督の許可を得て、麴谷村及び羽田浦の地先に於て、新に海苔採場を

設け、之を官軍場と稱ふる事となりしより、端なくも協同を欠き、是より羽田村鈴木新田神奈川縣大師河原其他の地先を借受け採取する事となしたるか、遂に今日の如き隆盛を見るに至れり。

今古來よりの税率の沿革を示せば、寛政元年酉御割付より以來、天保度を経て維新に至るまでの税率の振合は、

- 寛政元年酉御割付實歲より亥歲迄十ヶ年季 一 二貫八百九十九文 海苔運上
- 天保三年辰割付子歲より辰歲迄七ヶ年季 一 二十五貫五百九十三文 海苔運上
- 天保十五年辰割付 卯歲より未歲迄五ヶ年季

一 二十五貫七百二十二文一分

海苔運上

右の如く上納し來りしが、明治八年一月太政官第二十三號の布達を以て、從來の慣習税を廢し、同年十二月第九十五號を以て、人民が私に海面を區劃し、捕魚採藻等の爲め使用することを禁止、之に背くものは一切その場所を取上ることを布達し、更に海面拜借所望の者は圖面を添へて其管轄廳へ願出づべしと命ぜり。

然して其筋の許可を得て、目下各浦にて使用する海苔採取場の坪數は。

在麻郡羽田村

六二、七九八、五〇〇

同	麴谷村	六一、一〇〇、〇〇〇
同	大森町	二四〇、二六〇、五〇〇
同	不入井村	一一、一九三、〇〇〇
同	大井村	八二、九二四、〇〇〇
同	南品川畷	一〇一、〇五一、〇〇〇
同	磯師町	一〇二、三七〇、〇〇〇
同	五ヶ町村組合	六〇、三四九、〇〇〇
同	芝區	六二、八五〇、〇〇〇
同	木芝浦	四五、〇〇〇、〇〇〇
同	金杉浦	四五、〇〇〇、〇〇〇
同	京橋區佃島	五、〇〇〇、〇〇〇
同	深川區深川浦	三九、〇〇〇、〇〇〇
同	南葛飾郡葛西村	二一、〇〇〇、〇〇〇
同	砂村	二一、〇〇〇、〇〇〇
合計		一、〇六〇、八九六、〇〇〇

外に大森浦に六万五千三百〇五坪の組合試育場あり

海苔を製するには、鹿菜と名づくる一種の木枝を海中に植て、之に海苔を附發せ

しむるなり、其種類を疊ぐれば大凡左の如し。

(槽)此木は皮肉の離れざる故に最も宜しとす。

(槻)海苔の附發すること槽に次ぎて宜し。

(竹枝)孟宗眞竹の枝を用ふ、木枝は一年限りなれども、竹枝は三年を支ふるを得と云ふ、而して此種の鹿菜は多く高志は場に限るものなり。

(榛)此木の枝は脆くして往々風波の爲めに折らるゝ故に、鹿菜としては不適當なれども、價の槽槻より廉なるが爲めに、間々用ひらるゝ事あり。

(牛殺し)方言に牛殺しと稱する木あり、鹿菜には最も適當なれども、品甚だ稀なり。

(桐木)此木は皮脆く剥ぎ易き故に、海苔の發育を害するると多くは用ひず、其の他椶椎の木を用ふれども、甚だ堅きが故に、鹿菜には不適當なり、尤も海苔は特り木竹にのみ附着するものにあらず、藁細などにも附着する事ありといふ。

鹿菜を植つるの法は、先づ幹枝の本を尖らして、地に挿すの便に供し、三本乃至四本を合して、其本を藁にて束ね、之を植付くるなり、丈は海の淺深に因りて一様ならされども、長きは一丈四五尺、短

きは四五尺なり、扱之を植てんとするに
 は、先づ長さ一丈幅四尺許りの小船に魚
 菜を積重ね、植場に着く時は、「マチヨ
 ミ」といふ四本の鉄脚に椀根細を付けた
 る、二尺或は三尺程の高き木履を穿がち
 て、水上に下り、「ヒッキリ」と稱する
 圓錐形の、長さ四尺乃至五六尺、圓さ一
 尺五寸位なる二本の柄を付けたるもの
 を、足にて泥中に陥入れ、穴を穿ち、其
 穴へ凡そ二尺ばかり魚菜の根を挿込むな
 り、又採獲するに便ならんか爲め、恰か
 も田圃の畝の如く、五六尺づゝ道を隔て
 植つるを例とす。

ヒ、植の時期は通常新暦の九月二十日前

後、即ち舊暦彼岸の候を以て適當なる時
 期とせり、然れども海苔は必竟鹹水淡水
 適度の混和、雨水の媒介とに因りて發生
 するものなるが故に、必ずしも九月二十
 日前後とも限られず、往々氣候の模様
 依て九月十日頃より植初むる事あり、又
 寒植と唱へて、十二月中より植つる場所
 あり、是は春海苔を採る仕組なりとぞ、
 總て海苔はヒ、植の日より大約三十日間
 を経れば、其芽を見るを得べしといふ、
 然して海苔採取の期は、年に依りて一定
 せずといへども、大抵は十二月上旬より
 採り初む、其方法は小船に乗り、手を以
 て魚菜に生じたる海苔を摘採りて筐に入

れ、幾度となく魚菜の間を乘廻りて採收
 するなり。其度合は凡そ二週間に一回位
 なり、又海苔採收に四期の別あり、第一
 を秋海苔、第二を冬至海苔、第三を寒海
 苔、第四を馬鹿海苔、(四月頃即ち終期に)
 いふ其中にも寒海苔を以て最良品とす。
 海苔を製造するには、摘採りたる海苔を
 船もて海岸に持來り、他の筐へ少しづゝ
 移して塵芥を選捨て、更に海水にて洗ひ
 清め、納屋に持込みて、筐のまゝ空樽等
 の上に載せ置き、翌朝再び潮水をもて洗
 ひ、又納屋に入れて能く水を漏らし、水の
 盡るを待て少しづゝ粗の上に載せ、兩手
 に薄刃の庖丁を持て微塵に切刻みたるを

ば、凡そ二升程づゝ四斗樽に移し、之に
 眞水を汲入れて、竹竿にて撻廻し、而し
 て後に漉上るなり、漉上の法は高さ二尺
 五寸位なる蓋の上に、縦二尺深二寸横三
 尺の流船を据え、鼓の穂先もて作られた
 る篋の上へ、海苔判の大小に應じたる杵
 を置き、(杵は七寸横四寸五)もて厚薄なき様、
 彼の水海苔を漉面に流込み、水の滴り落
 るを待ちて杵を採り、篋に付きたるまゝ、
 乾燥場に運び、之を乾燥す、其状恰かも紙
 を漉くが如し、乾燥は日向日向り好く風當り
 なき所を選み、竹又は丸太の木をもて二
 十間乃至卅間の柵を斜に作り、面をば藁
 にて覆ひ、又其上を幅六尺許りの藁篋も

て張り延ばし、海苔の筭形に應したる隔
を取り、竹又は木にて押へ、其上へ海苔
の附きたる筭を立てかけ、釘もて其兩端
を留む、是は風の爲めに飛されざる爲め
なり、斯くして全く乾燥したる時は之を
家に持來りて蓐を除去り、十枚を合せ
て一帖とし、十帖を重ねて一把となし、
次きに奥行二尺五寸幅六尺高六尺の押入
(土間を廻り火爐をなし三方を壁にて
圍み其一方は閉閉の爲め戸を附す)に入れ、五
段の釣段にて焙るなり、初日は上段、翌
日は次段へと一日毎に一段つゝ下し、五
日にして全く仕揚げ、直ちに紙にて包
み、鐵葉の箱に納めて蓋を爲し、尙ほ厚
き紙もて密封し、少しも空氣の入らざる

櫛にして、之を日光の反射せざる場所に
圍ひ置くなり、又翌年八九月の頃まで貯
藏せんとするには、一度焙爐にかけて
後、之を貯藏す、此の如くするときは、
二三年を経過するも決して香色の變ず
る愛ひなしとぞ、因に記す、前記焙爐に
は炭團を用ひ、又時としては藁灰をも用
ふる事あり、海苔を養ふに最も注意すべ
きは、最も地味地質を擇ばざるべから
ず、元來海苔は鹹淡水の交和に因て生ず
るものなるが故に、須らく鹹淡能く交通
するの地位を擇び、雨水の最も稀れなる
時といへども、鹹淡水の配分其の適度を
失ふ如き地を避くべし、又地質は凹凸な

く、平坦にして小砂利の所を宜しとす。
又晴雨寒暖の調和宜しきを得たると否と
に依りては、海苔の收穫上大關係を有
す、今數例を左に掲ぐ

一 河海の水交和能く調ひ、海苔培養
に適する地も、若し降雨甚だしく、河水
溢流して海潮淡薄に赴く時は、遂に調和
を失ふに至る。

二 又之に反し冬期降雨頗る少なくし
て、海水濃厚となり、眞水の調和を失ふ
時は、往々「サイ」と名づくる一種の介様
の蟲發生して、大に海苔の發育を妨ぐる
ことあり。

三 ホ、植の時期は頗る暖和の日を宜

しとし、植付けたる頃より稍々冷氣を催
はすを最上の時とす。

四 寒に晴天打續きて、海苔の色赤く
なる時に當りて、俄然雨或は雪の降り來
るは、海苔發生にとりて至極好し、是れ
其の色の變して黒色となるを以てなり、
然れども又雨雪しきりに打續きて降る時
は、却て害を起すといふ。

五 海苔の發生に大禁物なるは露な
り、たとへ如何程ホ、付好しども、一朝
之に出遇ふ時は海苔忽ちちにして消え亡
せ復た發生せず。

六 ホ、植の當時は風の吹かざるを宜
しとす、蓋し鹿菜の根か未だ締らざる間

に吹き倒ふさるゝ憂われはなり。
 七 「マカンリ」發生の時に際し、暖氣甚しければ三日を待たずして海苔忽ち腐敗す、
 海苔芽の發生せんとする頃に當りて、蛇蟲小蟲などいへる、微細の蟲の湧生することあり、是等の蟲は生長するに従ひ、徐々と塵染に匂上り、芽を嘗り廻はすなり、海苔一たび此蟲に遭ふ時は、遂に發生することなし、然れば當業者は太く此蟲を恐ると云ふ、蛇蟲とは蛇の形に類して小さく、其色黒し、小蟲は蛇蟲よりも細微にして其色白し。
 抑も淺草海苔は此の如き大苦心を要する

者なるか故に、其の價の地方産に比して高價なるも無理ならず、今東京にて著名の海苔屋を列擧すれば
 山形 屋 日本橋區日本橋北河岸
 井上 全 通四丁目
 堺 屋 淺草區並木町
 山 本 日本橋區室町一丁目
 此外幾千百の海苔問屋小賣屋等市内殆んど軒別に散在す。
第五十二 西洋食料品
 海外との交通頻繁になれるより、市内至る所として西洋食料品を露がざるなし、况んや新條約實施に及び、外人の入りて雜居するに至らば、是等の店舗益々増加

すべし、今其著名なるものを擧ぐれば。

- 龜 屋 神田區淡路町
- 龜 屋 京橋區南鍋町
- 三浦 屋 全 尾張町
- 烏 市 神田區佐柄木町
- 篠 原 京橋區入舟町

其他野菜果物類は麴町本郷芝築地邊に尤も多し、蓋し外人の住宅多きと、學生官吏等多數を占むるによるならん、日本橋の多きは、比較的戻つてすくなし。

第五十四 佃煮

佃煮の名は、佃島の者の始めて之を製したるによる、沙入の河流に産する小海老

沙魚、或は蛤石決明、鰯其他の魚を煮るに醬油を以てし、其味の尤も鹽辛き所、戻つて世人の口に適す、旨い物を食し飽きたる揚句、其茶に佃煮は又格別の味あり、各地方の土産としては、輕便にして特に妙なり。

- 玉 木 屋 芝區芝口一丁目
- 玉 木 屋 淺草區茅町
- 玉 木 屋 日本橋本石町
- 寶 來 屋 日本橋區新葎町
- 棚 屋 全 阪本町
- 高 島 全 瀬戶物町
- 中 川 屋 牛込區肴町
- 杉 浦 京橋區銀坐二丁目

山 茂 屋 京橋區尾張
吉 川 神田區連雀町

第五十五菓子

藤 村 本郷區本郷四丁目
舊幕頃より有名なる老舗にして、煉羊羹
及窓の月なる最中を以て現はる、其他茶
人向には大徳寺、一般の嗜好に適するは
田舎饅頭、他店よりは價格高けれど、高
き所即ち藤村の價値なり。
新 杵 日本橋區照降町
横濱新杵の出店にして、開業未だ新らし
けれど、西洋菓子を以て屈指なり、嶺新
の意匠を以て、美術的の菓子を製す、つ

れ、糖、開龍煎餅の如き、蓋し他店に
希なる物なり。

壺 芝區西久保八幡町
壺々といへる最中を以て顯はる、江戸時
代より連綿たる老舗にして、贅澤物多し
其分店なる新橋日吉町の壺屋は、西洋菓
子のみを製し、各國公使館等を得意と
す。

風 月 堂 京橋區南傳馬町
これ風月堂の總本店にして、日々の製造
實に驚くべし、名代物は春日野開化饅
頭金鑄等とす。

風 月 堂 日本橋區米澤町
唐饅頭、カル、ス煎餅等に名代の家な

り、兩國邊には此店を措いて他に求むる
能はざるべし。

風 月 堂 京橋區南鍋町
壺屋と同じく西洋菓子を擧げる家なり、
製造の手際尤も器用にして、店頭常に外
人を以て充たさる、樓上にては洋食をも
供す。

鹽 瀬 京橋區元數寄屋町
有數の老舗にして、贅澤屋中の贅澤屋な
り、打物及漬納豆に名高く、方今宮内省
の御用菓子を製す、新吉田町にも出店あ
り、團子の名物を擧ぐ。

船 橋 深川佐賀町
深川第一の老舗にして、煉羊羹、饅頭、藤

袴等いつれも古來名代なりとす、麴町三
丁目も是が同店にして、松竹梅の打物
は他に比類なし。

越 後 屋 本所區千歲町
君索麵の名代なる家にて、多く茶人向の
菓子を製す。

玉 村 日本橋區馬喰町
最中にて名代の家なり、こも又老舗にし
て、製品一として美味ならざるなし。

古 月 堂 京橋區銀座三丁目
贅澤屋にして、打物を以て自慢とす、毎
歳御歌題に擬して、新意匠の菓子をづく
る。

野 村 日本橋區通四丁目

大時計の向横町にあり、店小なれども、老舗にして、高尚なる美味を製す、尤も餅菓子に名あり。

榮 太 櫻 日本橋區西河岸

東都の菓子商中全國に有名なるは、此店に如くはなし、製品廉價にして美味なり、名代は甘納豆、村雨、村時雨、高麗餅、小倉羹、有平糖等なり、出店三軒あり、皆井筒屋といふ、阪本町、蛸殻町、神明等はなり。

翁 屋 日本橋區濱町

カルカンを以て有名なり、此店のカルカンは、調味一種の商品ありて、他に比類なし。

岡 野 下谷區坂本町

岡 野 淺草區駒形町

岡 野 神田區旅籠町

岡 野 下谷區上野廣小路

岡 野 本郷區本郷四丁目

岡野はいづれも最中にて名高し、且葬禮等の注文にて、一万八前の誂あるも、決して時刻を違ふ事なしといふ、各家皆連合して商業に従事する事、恰も牛肉店のいろはを見るが如し。

蟹 屋 芝區芝口一丁目

蟹屋は江戸時代に一時雷名を轟かしたる家なり、今當年の聲名に及ばざれども、家道決して衰へたりといふべからず、名

代は原蘇おこしあり。

松 月 堂 日本橋區中橋廣小路

其四十郎松屋といはるは、此家の主人芝居好にて、殊に四十郎の狂言に擬して新意匠を出す故なり、名代は薄雪三升なといへる最中、黄金牡丹等なり。

森 田 日本橋區大傳馬町

吹寄、西京落雁、紅白切山椒にて名代なり。

松 岡 日本橋區本町

此家の腰高饅頭美味なりとて賞翫さる。

青 柳 京橋區金六町

磯燒金鑄の名物にて、新意匠の打物等を製して有名なり。

紅 谷 小石區川安藤坂

隅田の月、六の花、石衣、桃山等有名なり、山の手隨一の菓子屋なるべし。

湖 月 日本橋區矢之倉町

常に表障子をべ切れば、知らざる人は菓子屋と氣づく者なし、蒸菓子は何品にても出來ずといふ事なし。

松 屋 淺草區藏前片町

柚餅にて有名なり、蒸菓子も頗る美味なりといふ。

西 村 淺草區雷門廣小路

古來有名なり、蒸菓子干菓子等、此近邊にての美味なり。

空 也 堂 下谷區池の端黒門町

空也煎餅空也餅等名高し、最も茶人向にして、通常人の口には適せず。

龜 樂 日本橋區万町

横濱翁町の出店にして、名物は龜樂煎餅なり。

菊 壽 軒 赤坂區田町一丁目
山の手の老舗にして、餅菓子専門なり、此家の製法は家傳にして、風味他と異なり。

玉 泉 堂 赤坂區一ツ木町
おぼろ饅頭の自慢なり、其他はカル、ス煎餅、磯部煎餅の如き物をよしとす。

筑 紫 堂 京橋區竹川町
此家の名物は、黄金の流と淡雪羹にて、

進物には妙なるべし。

第五十六 日本料理

會席料理

星 岡 茶 寮 麴町區永田町
山王日枝權現の東嶋、老樹鬱蒼として閑雅幽邃なる所、溜池の水に臨みて建つ、其名けて茶寮と言へるによりても、家屋の構造の古雅なる推して知るべし、必竟茶道の會席なるが故に、料理の高尙なるのみならず、給仕の婢に至るまで、進退禮を守り、坐作法に協へば、重に貴顯の愛顧を蒙るといふ。

八 百 勘 赤坂區田町一丁目

庭園の莊麗にして宏潤なる、坐敷の敷多くして然も大廣間に富める、實に山の手屈指の家たり、來客の多くは軍人並に官吏にして、夜々絃歌の聲を絶たず。

三 河 屋 全 田町四丁目

三河屋は八百勘の如く大廣間を有せざる代り、物寂かなる小座敷に富む、山王臺下溜池に沿へる家にして、料理の鹽梅は赤阪屈指といふ。

金 清 樓 神田區進雀町

神田は土地の富有にして繁榮なる割に、料理店の有名なるもの少なければ、此家の如きは實に屈指なるものなり、構造は宏大なる總二階にして各種の大宴會を

開くべく、前庭廣くして雅致に富めり、此家の名物といふべきは、鶴龜の舞といへる踊りにして、講武所の藝妓をして舞はしむ。

開 花 樓 神田區宮本町

欄に凭りて眺望すれば、滿都の風物眉目の間に横はり、軒頭飄飄の棚曳ける所、遠く房總の遠樹を望む、天晴れ日麗なるの時、忽ち富岳の漂渺として東方に聳ゆるを見る、眺望の絶佳なる都下有數の家たり、此家も多く大宴會に適す。

花 屋 神田區旅籠町

但俗講武所の中央にあり、小作りの躰裁よき家にして、開花金清等の官吏學生等

に適せるに反し、此家は専ら商人を客とし、料理の風味も又他家と異なる塩梅あり。

今 金 神田區鍛冶町

眼鏡橋より今川橋へ通ずる大通にありて、従来鳥料理にて有名なりしが、中頃家道稍衰靡したりしより、營業を一變して、當時は純粹なる料理店となれり。

柏 木 日本橋區萬町

熱鬧繁雜なる日本橋の隈、忽ち閑雅なる別天地を現出せしむるは柏木なり、高等の會席茶屋にして、柏木音頭といへる一種の賑かなる踊は、客の好みにより、此家の宴會に於て往々催さる、六疊八疊十

等の座敷夥多あれど、其襖を取外せば忽ち六十餘疊の大廣間となるなど、用意頗る周到せり。

中 安 日本橋區元大工町

元大工町の路次の奥にありて花々しく目立ぬ處最も奥床し、典雅風流の家にして、大宴會の底振騒ぎに適せざるにもあらざれど、四疊半の小座敷に妓を聘しての心意氣、淡泊と遊ぶ通入には最も適せり、料理の風味は此邊にて屈指たり。

藏 田 屋 日本橋區槍物町

坐席の間取り、建築の工合、凡て古風にて雅致多く、廣間小間數多くして、五六十人の集會にも適すれど、又二三人の酒

宴にも適し、料理の美味なるを以て鳴る。

万 千 日本橋區霞町三丁目

流水長へに滔々たる新大橋の袂に在り、古來有名なる割烹店にして、三層樓の建築なり、會社銀行等の大宴會は、多く此處に於て催さる。

福 井 日本橋區高砂町

福井の主婦は元中安の女中頭たり、一度此處の主婦となりしより、致々として家道につとめ、霞町近傍優に同業者の牛耳を取るに至りたり、家に古書畫多く、數寄なる茶室あり、粹人の歩をまぐるによろし。

百 尺 日本橋區新霞町

魚介の新鮮なる、庖丁の潔きよさ、割烹店中の老舗として、其名都下に響く、座敷の構造に巨資を費し、庭園頗る高雅なり、來りて酒肴を命ずるの客は、斬売町の米商多し。

金 清 樓 日本橋區斬売町二丁目

進雀町金清樓の支店にして、三層の大廈巍然として聳ゆ、座席多く器類清潔にして、然も比較的廉價なるより、常に顧客の多きを以て著ける。

菊 隅 日本橋區元大工町

客室の廣きに於ては藏田屋と相匹敵す、表は總二階にして、多數の集會に適し、

奥は小座敷ありて、通入の遊興に妙なり、近年の家なれども、此近邊屈指の稱あり。

采 芳 亭 日本橋區兜町

古の鏡の渡しは此家の邊にして、今の鏡橋のある處といふ、悠々たる水の流れは、家の背後をめぐり、川に臨める小座敷は清遊に最も適切なり、建築雅緻ありて、料理の美味を以て鳴る、株式市場の商人等、多く此家の花客たり。

浪 花 屋 日本橋區元大阪町

元大阪町の舊家にして、器物古雅にして客の接待に懇切なり、風流の家にして風味の佳良なるを以て名高し。

尾 張 屋 日本橋區横山町二丁目

此家は文政の頃、藏前の札差松阪屋の主人が、頗る贅澤なる食膳を好み、江戸市中一も口に適する者なしと誇れる時、尾張屋の亭主あなごの味増漬を調進して一箸を試みしむるに、風味の美なる殆ど人界の物たるかを疑はしむ、流石豪奢なる松阪屋も、始めて此家に食膳の大技あるを知り、大に敬服したりといふ、其あなごの味増漬、今も此家の名物たり、試みに就て味ふべし。

生 稻 日本橋區新柳町

花柳狹斜の衢として、久しく芳名を全國に恣まにしたる柳橋の畔にありて、東

は直に隅田川の長流に臨む、觀月納涼兩つながら絶佳にして、朝景暮色最も揃すべし、料理の美なるは言ふを俟たず、醉歌亂舞の縹渺として常に絶へざる、此家の特色たり。

常 盤 屋 日本橋區濱町一丁目

濱町花屋敷の内において、都下茶會席中屈指とすべし、器具は巨財を惜まらずして貴重なるものを用ひ、庭園の雅なる、調理の美なる、當時割烹店中の巨壁たり。

大 又 日本橋區藥研堀町

名古屋料理にて大いに江湖の賞賛を博す、調味濃厚なれども、反つて平生淡泊に馴れたる東京人士の口に適し、華族貴

紳の愛顧を受く。

島 村 日本橋區通四丁目

昔は所謂留守居茶屋として有名なりしもの、今は老主人が昔の名残の庖丁を振ひて、調味の鹽梅に誇る、階上階下僅に二間なれども、粹士通人の間に其美味を稱され、門前往々箱馬車の供待するを見る、此家の鵜枕盛金數羅は、都下殆んど比なしとて、老主人が常に誇る所たり。

中 華 亭 日本橋區木原店

食傷新道の緒名ありて、飲食店楯比せるの間に立ち、優に食膳中の覇者たり、佳肴美酒最も都人士の口に適し、金

歎羅は島村と其伯仲を争ふ、家屋の構造高品にして清潔に、小座敷多くして、所謂真猫の遊びに妙なり。

伊勢 勘 京橋區南鍋町

鶴料理の調進にて有名なり、区内の舊家にして間敷二十有餘あり、客の接待懇篤にして、世評よろし。

柳花 苑 京橋區築地一丁目

貸席及大集會に適す、もと壽美家の跡を譲受けたるものにして、如何なる多人數の集會をも引受けて有名なり。

野田 屋 京橋區築地三丁目

素人料理といへど、素人料理必らしも素人にあらず、茶會席の品よき家にして、

調味の鹽梅は八百善に近似して、又平清の庖丁に似たる處ありとて、料理通の賞美する處たり。

青柳 京橋區新富町一丁目

卓子料理とて、日本、西洋、支那、いつれにても客の需に應ずるは極めて重寶なり、元より茶會席専門にあらねば風流の雅致に乏しけれど、風味は頗るよし、軍人官吏などの特に來り食するものあり。

躍金 京橋區新富町一丁目

青柳の並にありて頗る舊家たり、調理の割烹美味にして、銀行員御用商人などの集會多し、旨い物屋の評判は此邊に高し。

金六 亭 京橋區南金六町

馴染の妓を伴ふて、閑室に小酒宴の興を行ふには頗る妙なり、燒鳥料理にして、言ふべからざる風味あり。

花月 樓 京橋區竹川町

新橋橋北第一の家、衛生料理と稱して、稍濃厚に過ぎれど、珍奇なる獻立をなす、大集會も催すべく、小酌にも適すべく、此邊の會席を指すもの、先づ指を之に届す。

狐 京橋區三十間堀

狐鮠といへども、今は鮠が専門ならず、好風味なる割烹をなし、閑雅なる小座敷あり、こも又妓を携へて小酌するに

よし。

方安 京橋區木挽町一丁目

庭園の廣大にして珍卉の爛熳たる、大白熱燈は築山の上に在りて、光輝を散むく、敷寄悉したる泉水は潺々として聲あり、鯉魚の潑刺たるは以て酒宴の興を助く可く、構造宏壯にして、幾多の大廣間は、欄を列ね襖を接し、絃歌湧き玉山漸く崩れんとするの時、庭前の小座敷には、絃を捨て、扇みず、飲々膝を交へて低語す、同一料理店中、忽ちにして此別天地を現出するものは、此料理店を措て他にあらざるべし、此家はもと某侯の邸宅なりしを、修繕して料理店となせり

といふ、料理通の眷顧よりも、官吏軍人
或いは社員などの、酒を浴び、妓を呼
びて豪遊するに適す。

永 秀 亭 京橋區靈岸橋側
粹に造りたる座敷多くして、靈岸島藝妓
の馴染客多く來り酌む、此邊廻船問屋多
きを以て、鯨飲快をやるの客多し。

濱 の 家 芝區日影町一丁目
元伊勢源の娘の開業したるものにて、衛
生料理の特色を以て賣る、料理美味にし
て、稍々東京人士の口に濃やかなれど、
地方田の官吏等が發達專一を喜ぶに適せ
り。

万 清 芝區高輪車町

泉岳寺の南にあり、徳川氏全盛の頃、料
理の美を以て、一時江戸市中の割烹店を
して顔色なからしめたり、欄に凭りて眺
望すれば、品海の風光双眸の間に横は
りて、白鷗の波間に隠見するの所、檣歌
摺音の幽かに聞ゆるものあり、調理と風
光と、兩つながら絶佳と稱せらる。

大 野 屋 芝區新濱町
樓は竹芝の浦に臨みて、欄桁直に品海の
烟波に入る、活魚の激湍たるもの、命じ
て以て食膳に供すべく、大廣間あり、海
水浴あり、春光秋夜夏日の清遊を兼ね。

紅 葉 館 芝區芝公園
芝區第一の割烹店にして、又東京有数の

家たり、市中の同業者とは自ら其趣を
異にし、門内の供待は、腕車より馬車の
多きを以ても、其花客の如何なる階級に
屬すかを知るべし、家屋宏壯にして、器
具美麗に、座敷は百疊の大廣間を始めと
して、七十疊五十疊の坐敷あり、古雅なる
庭園老楓樹の蟠るあり、又風雅なる茶
室ありて、客が隨時の需めに應ず、館妓
數十名ありて、酒宴の興を助け、又聘妓
の要なし、門の守衛に巡查の派遣を乞ふ
など、宛然官衙に至るの思ひあり、東京
料理店中一種の趣を異にす。

明 月 樓 芝區芝一丁目

舊伊勢源の跡にして、小座敷多く小酌に

妙なり、調理淡泊にして美味なれば、多
く紳商輩の愛顧を蒙る。

扇 芳 亭 芝區烏森町

三階の大割烹店にして、雅致に乏しけれ
ど、宏壯なる建築なり、料理も稍濃厚に
して、通人粹客の口に適するよりも、官
吏軍人などの喜ぶ所ならんか。

湖 月 芝區烏森町

土橋より南の方、久保町の後に當れり、
近來改築竣功して、庭園の風色大に改ま
り、間廣の座敷を設けて、大小の宴會に
適す、料理の美なるは、此邊第一にし
て、橋北の花月と其名聲を争ふ。

見 は ら し 芝區新濱町

大野家に隣りて、品海の眺望をまつり、美酒の醇、佳肴の鮮を以て誇る。

松 元 樓 芝區宮本町

一酔の小酌を求めて、洵然として神氣の寛ろがん事を求むるには、此樓の小器用なるに如くなし、商家の主人などの、兩三名相會して、神明藝妓の音々を聞くに適すべし。

松 よ し 本郷區本郷三丁目

三丁目通西側の路次の奥にあり、西片町邊の官吏或は大學生などの酒食する者多し、此家の名物焙烙蒸は美味なりとて賞美せらる。

魚 十 本郷區湯島公園

天神社内にあり、高樓高く聳えて、遙かに上野の臺に對し、小西湖の風色を見るべし、本郷第一の割烹店にして、天神藝妓を招ぐに便なり。

松 源 下谷區黒門町

三橋の北、東臺山下にありて、不忍池に臨める一構なり、下谷第一の割烹店にして、大廣間小坐敷等無数の坐席あり、夏季は溜を設けて涼を容るゝに適せしむ、紳士官吏の花客多し。

伊 豫 紋 下谷區同朋町二丁目

下谷割烹店の舊家にして、料理の美なるを以て鳴る、此家の口取物は味佳なりとて稱せらる。

鳥 八 十 下谷區元黒門町

船板塀の總二階、床しき音色の主や誰と問ひたげなり、小宴會に恰好の家なり。

鴨 春 閣 上野公園山王臺

櫻は高丘の上にあり、淺草の方を望んで建つ、舊櫻雲臺にして、春夏秋冬四時の眺めに適す、樓上二百餘名を容るゝの廣間あり。

長 蛇 亭 下谷區不忍池中ノ島

池に流みて風光の明媚を極むるものを、幽邃なる此仙家となす、欄に凭りて小酌すれば、銀燭倒まに池中にありて、水底又一の仙境あるかと疑ふ。

松 月 下谷區數寄屋町

小間取に氣の利きたる家の造りなり、金

麩羅の味美にして、料理も有名なり。

鶯 春 亭 下谷區中根岸町

吳竹の根岸の里、閑靜なる家にして、料理は最も通人向なりといふ、春季には間々鶯の會などありて、料理店中の風雅を獨占す。

龜 滑 淺草區下平右衛門町

流れつきせぬ水の色は長へに若くして烟波渺々たるの所、粹な音々の風にまぎれて切れて續きつ、燭影淡く水に曳ける好風景は、柳橋北畔龜清樓の眺なり、構造の奢侈は伽羅木の床柱、神代杉の天井等を驚かすに堪へたり。

八 百 善 淺草區山谷吉野町
 山谷の八百善といへば、深川の平清と共に、古來江戸の二大割烹店たり、家は古雅にして美に、庭園は幽邃にして轉た人外万里の仙境に遊ぶ思ひあらしむ、實に日本料理の代表者にして、八百善の料理を味へば、他の料理は殆んど食ふに及ばざるなり、其普通の獻立と聞えたるは、汁、向、茶碗盛、鉢物、椀盛、焼物、口取、刺身とす、此家は又香の物にて有名なり、鉢植の茄子黃瓜を、鉢のま、漬物として出すが如きは、今強ち珍らしからずとも、昔は此家の秘法たりしなり。

古き家にして、公園界限隨一の割烹店たり、大集會には適せざれど、小宴を張るには此家をよしとす。

松 島 淺草區千束町三丁目
 近年の家なれど、料理は美味なりとて賞せらる、庭園廣くして、珍奇なる樹木に富めり。

花 屋 敷 淺草公園第五區
 万梅と伯仲の間になり、もと山本某の創設なれど、今は即席料理一直の所有に歸し、盛んに半會席を以て開ゆ。

小 中 村 淺草區下片町
 番川長の跡なる料理店にして、江東中村樓の出店なれど、本店と輪贏を争ふ。

万 梅 淺草公園仲見世

中 村 樓 本所區尾上河岸
 川に沿ゆる大屋にして、二百名以上の大集會に適せり、古くより二州樓と稱せられて、多く文人墨客等の集會によし。

植 半 本所區向島須崎町
 其中の植半といへるは、奥の植半に對して、色別し易からしめんが爲なり、裏は乃ち隅田川の流れにして、昔業平朝臣がいざ言問はんと詠じたりし都鳥は、悠々たる長江に泛び、古し人の像を今見るべく。風景尤も佳なり。

八 百 松 本所區向島新小梅町
 枕橋の袂にありて、三面水を回らし、風光の美なる實に割烹店中其右に出づるも

のなし、樓上廣くして多數の宴會に適す。

平 清 深川區富岡門前東仲町
 淺草の八百善と共に東京二大會席の一たり、舊時深川の隆盛にして、八幡鐘の音に聞えし、深川藝妓の盛なりし頃は其繁昌なる驚くに堪へたるも、明治二十三年頃、深川の地の漸く衰頽するや、羽織衆の派手も噂に止まりて、素肌の帷子も見るに由なく、従つて平清も又舊時の繁榮なけれど、尙依然として宏大なる家を構へ、料理通の爲に庖丁の鹽梅を示めず、此家に道具藏二棟あり、先年失火の際其一棟を灰燼たらしめしも、尙幾多の珍器

を藏し、好事の客に供す。

伊勢平 深川區龜住町
海邊橋の南二丁許にあり、半會席の氣の利きたる家にして、春の朝秋の夕の小酌によし。

橋 本 本所區柳島町

妙見寺の邊にして、押上の水と天神川と會合する汀にあり、近傍に柳島社、菘寺、龜戸天神、吾妻の森、臥龍梅、堀切、四ツ木等の名勝あるを以て、地の邊鄙なる割に、風流人士の來り酌む者多し。

奥の植半 南葛飾郡隅田村
梅若洞畔美童の雨、蕭條として音なきの

夜、奥漸く悉きなんとして然も尙杯盤横はるの時、絃妓側にあり糸を鳴らして徹音に口ずさめば、客微醺を帯びて徐ろに之れに和するもの、實に奥の植半の具景たり、高歌亂舞は野暮の骨頂にして、御樂しみの嫉みを受くるは此處の心上たり、料理はまじみ汁家鴨の鋤焼を名物として、凡て風味よろし。

水神八百松 南葛飾郡隅田村
彼に梅若の好區あれば、これに水神の名勝あり、田圃悉きて綠樹の蔭濃なる所、高樓三叉の水に流んで建つ、興味は奥の植半の趣に似て、反つてまた小人数の集會にも便ならん。

川崎屋 荏原郡品川町鮫洲

南街第一の割烹店にして、古來有名の番家たり、庭内に沙入の池ありて活魚潑刺、捕來つて直に食膳にのぼす。

扇屋 北豊島郡王子村

飛鳥山の麓にして瀧野川の邊にあり、共に有名の番家にして、夏時の納涼を兼て來り酌む者多く、春陽開花の候は殆んど其雜間に苦しむ程なり。

武源樓 四谷傳馬町

山の手有敷の割烹店たり、料理の美にして坐席の清潔なる、四谷第一なり。以上は會席茶屋の著名なるものを擧げしに止まる、會席茶屋は實に東京人士が

食膳の美を望むものと、陶然として酔を買ひ、妓を聘して興を行ふが爲めに設けらるるといふべし、此種の割烹店は、家屋の構造に意を用ひ、器具の清潔美麗なるを以て著はる、家には女中と稱する妓あり(婢といふべからず)配膳の幹旋をなすと共に、又客の興を助く、其藝妓を聘する時は、彼の爲に是の爲に酒間の周旋尤もつとむ、客たるものは纏頭として三十錢前後の幹旋料を與へざる可らず、これ會席茶屋の習慣にして、此處に來り酌むの客は、必らず租税として拂ふべきものなり。

會席は普通二圓前後にして御中酒(半會

席)と稱するものは八十錢以上と知るべし、元より酒の料は此外にして、料理も客の好みによりて、如何なる珍奇なる饌にも應ず、八百善平清等に至りて、饗澤なる好みをなさんと思はれ、少なくとも三十金を懐にせざる可からず、これ寧ろ誠談に類すれども、現に八百善に於て、一皿十五圓の酢の物を喫したる通人あり、料理の饗澤にして、然も美術的なる、恐らく日本料理の右に出づるものなく、日本料理中、我東京市を凌駕するものあらざるべし。

即席料理

普通即席料理と稱する者は、會席半會席

の如く、一間一組の客にあらざして、大廣間に幾組の客を容る、料理の價は各自の好みにもよれど一人四五十錢より一圓前後なり、高きものいたりては會席と甚だしき相違なし、其手輕なるは簡便を旨とするが故にして、料理の美なるは往々會席茶屋をして撞着せしむるもあり。

- 中 鐵 日本橋區青物町
- 梅 芳 全 蛸殼町
- 万 安 全 新乘物町
- 魚 芳 全 蛸殼町
- 征 屋(立場) 全 元四日市町
- 白 木 全 藥研堀

- 千 歲 京橋區南金六町
- 松 田 全 銀座一丁目
- 雁 鍋 下谷區三橋町
- 岡 政 全 池之端仲町
- 滿 津 多 全 元黒門町
- 岡 田 淺草區淺草第二區
- 一 直 全 第五區
- 松 田 淺草區淺草廣小路
- 金 子 全 吉原京町
- 天 勇 全 馬道一丁目
- 万 金 牛込區神樂町
- ち つ な 日本橋區木原店

等其有名なるものなり。又別に温泉料理といへるあり、これ半會席にして、温

泉宿を兼ねるもの、一日時の消閑に適し浴を取りて酒をくれば、興愈々加はりて宛然無何有の郷に遊ぶの思あらん。

- 草 津 本郷區駒込蓬萊町
- 伊 香 保 下谷區上野櫻木町
- 鹽 原 全
- 草 津 日本橋區南茅場町
- 草 津 淺草區千束町
- 万 安 京橋區木挽町
- 松 源 分 店 下谷區入谷町
- 富 士 見 樓 麴町區飯田町四丁目
- 福 住 芝區芝公園
- 福 清 淺草區新福井町
- 紫 明 館 本郷區根津須賀町
- 芝 海 水 浴 芝區芝新濱町

有 馬 本所區向島須崎町
 芝 濱 館 芝區本芝一丁目
 明 保 野 荏原郡大森村池上

第五十七 西洋料理

西洋料理は日本料理の如く長時間を要さずして飲食するに適するを以て、事務繁忙なる人が、通行がけに立寄るなどに妙なり。

帝國ホテル 麹町區内幸町
 有 樂 軒 芝區芝口一丁目
 芳 梅 亭 日本橋區米澤町
 日 進 亭 京橋區銀坐一丁目
 壺 屋 京橋區日吉町
 寶 亭 神田區淡路町

吾 妻 亭 日本橋區小網町
 富 士 見 軒 麹町區富士見町
 精 養 軒 京橋區采女町
 全 上野公園
 三 緑 亭 芝公園
 三 河 屋 神田區錦町
 青 陽 樓 下谷區元黒門町
 三 橋 亭 京橋區西新屋町
 濱 本 亭 京橋區南傳馬町

第五十八 支那料理

支那料理は四客を一組とし、一の卓子に會して飲食するを法とし、食膳は大菜小菜の二種に分てり、此料理は濃厚にして

美味に、邦人の口に適すれども西洋料理程流行せざれば、料理店も僅かに一二軒に止まりぬ。

借 樂 園 日本橋區龜島町
 龜島町地蔵橋の近邊にあり、座敷は階上階下共に日本風の造作にして、紫檀の卓子を置きて食膳を載する用に供す、代價は並食七十五錢位より供し上等は一圓五十錢より二圓三圓以上十圓位迄あり。

此外淺草邊飯田町邊銀座邊等にもあれど大抵傍らの營業にして言ふに足らず。

第五十九 茶漬屋 附天麩羅

宇治の里(煮) 淺草區須賀町
 全 (全) 神田區籠町
 全 (全) 日本橋區通一丁目
 全 (全) 淺草區公園第二區
 中 鐵 芝區芝口一丁目
 寶來屋(煮) 淺草區須賀町
 小 大 橋 本所區藤代町
 九 大 万 日本橋區馬喰町
 舞 鶴(鰻飯屋) 神田區淡路町
 福るびす(鯉こ) 京橋區尾張町
 達 摩 下谷區五條町
 揚 出 下谷區元黒門町
 笹の雪(豆腐) 全 中根岸
 忍 川(豆腐) 全 廣小路町

紫蘇飯(蛤鍋) 全 元黒門町
 ちん屋 淺草區馬道一丁目
 今庄 芝區櫻田久保町
 川崎屋(鯛飯) 全 芝口一丁目
 新芳(鯉こく) 全
 西田(赤行燈) 日本橋區木原店
 麥とろ 全 馬喰町
 三ッ星 京橋區銀座二丁目
 富十(鮎汁) 日本橋區米澤町
 大村屋(鮎汁) 淺草區北清島町
 伊勢庄(鮎汁) 日本橋區中橋和泉町
 天(天鉄羅) 京橋區銀座四丁目
 天源(全) 全
 大新(全) 全 銀座二丁目

天實(全) 日本橋區木原店
 丸新(全) 全 鹽板新道
 伊勢實(全) 淺草區並木茶屋町
 吾妻屋(全) 淺草區淺草廣小路
 長谷川(全) 全 新吉原江戸町
 天虎(全) 京橋區銀座四丁目
 橋善(全) 芝區芝口一丁目
 仲野(全) 下谷區上野廣小路
 全(全) 神田區鍛冶町
 天勇(全) 淺草公園
 三定(全) 日本橋區堺町
 北邑(全) 全 鯛燈町

第六十 鮮屋

鮮には「ちらし」と「にぎり」の二種あり、「にぎり」といへるは、酢をふりたる飯を適宜の大サに握り、其上に、鮪、鯛、さより或は白魚赤貝等の魚介を載せ、又は鶏卵の伊達巻、海苔の磯巻などを、手際よく皿に盛りて客に供す、「ちらし」は井に入る、事、猶鰻の井、天井等に等しく、これを五目といふは、蓋し五種の品を交へたるが故なるべけれど、今は只に五種七種に限らず、幾種類をも嫌はず、單に美味にて奇麗なる事を尊ぶ、鮮屋の飯は肥後米の最もよきものを用ふ、人之を鮮米といひて、米の最上なるものとす。鮮は路傍の屋臺店にも之を開けば、大層

高屋を構へても之を賣る、實に東京人士最下級の所謂立食連中より、最上級に及ぶまで之を飮味珍重すといふべし、其價も一人前五錢前後より二十錢前後に至るされば其數は只に數千軒に止まらず、市中到る處として之を賣らざるものなけれど、其著名なるを左記の家となす。
 與兵衛 本所區元町
 回向院前にありて、奥床しき構なり、此家の鮮は専ら甘口にして、婦女子の口に適す、五目ちらしは古より衆人に珍重せられ、門前往々馬車の供待を見る事あり
 毛 日本橋區住吉町
 毛振鮮は握鮮にて名あり、其鮮を一箇づ

、笹の葉に巻きたるは此家の特色なり、握方頗る堅くして餅のよく利きたるなど、尤も酒間の下物に好しとす、淺草聖天下今戸橋の畔にも出店あり。

松 蕎 司 淺草區下平右衛門町 大六天前の安宅の松蕎司といへば、方今同業者中の巨擘たるべし、與兵衛に比するに稍酢味多くして上戸の口に適す、宏大なる門構にして一見割烹店かと疑はる、日本橋西河岸、下谷池の端にも支店ありて、有名なる老舗なり。

帆 掛 日本橋區通一丁目 日本橋の大通にあり、一見普通の蕎司屋に異なるなく、小さき家構なれど、其味

は此近邊に比なし、此家の名物は玉子餅にして、其伊達巻の如きは、餅通の稱する處たり、京橋三十間堀にも支店あり。

六 蕎 司 日本橋區元大工町 六蕎司は元大工町の狭かなる路次の内にあり、此家の老主人が自慢するは、烏賊の蕎司にして其煮法の旨きは殆ど他に比類なかるべし。

第六十一 蕎麥

東京人士の蕎麥に於ける程便利なるはなかるべし、實に平民的馳走として簡便なるも又此蕎麥に如くものなし、「盛」にかけ「普通二錢位よりして、種物といへる

は、天麩羅、をかめ、五目、月見、しつばく、小田巻、花巻、南蠻、小鳥蕎麥等を

東京の習慣として毎月晦日には家内打揃ひて必らず此蕎麥を喫す、これ細く長くとして縁喜を祝ふなりとぞ、又移轉の際は、蕎麥を向ふ三軒兩隣に配りて、以て向後の交際を乞ふの印とす、即ち所謂投名状の如きものか。

市中蕎麥屋の著名なる者を擧れば。

藪 蕎 麥 本郷區千駄木町

團子坂の藪蕎麥とて有名なり、支店を各區に有し、方今同業者中屈指の家たり、此家の名物は笹蕎麥にして、打方最も堅

く、蕎麥通の稱する所たり。

藪 蕎 麥 深川區銀岸町

團子坂とは名同じくして家異なり、江東有数の蕎麥屋にして、こも又蕎麥通の喧傳する所、日本橋京橋邊より態々出向く者多し。

藪 蕎 麥 神田區連雀町

眼鏡橋の邊にあり、此家の名物は種物にして、小田巻、鳥蕎麥などを有名なりとす。

藪 蕎 麥 本所區向島須崎町

地は墨堤の名勝を占めたれば、陽春開花の候は、客の歩を枉ぐる者多く、殆んど膝を容るゝの餘地なき程なり、名物は笹

蕎麥にして、茶蕎麥も又よしとす。

遊 玉 庵 下谷區池之端仲町
北に小西湖を臨み、東に忍ヶ岡、西に向ヶ岡を望むべし、山水の美に富みて、眺望の佳を極む、名物は芋蕎麥なり

万 盛 庵 淺草公園第六區
前に漫々たる池を臨みて建つ、家屋偉大にして庭園美に、蕎麥屋中の巨擘たるべし、芋、御膳等元より好風味なれど、種物も又よろしとす。

万 盛 庵 淺草公園觀音堂後
六區の方盛庵と同居なり、庭園幽邃家屋古雅にして、蕎麥屋といふよりも、寧ろ會席茶屋といふの適評なるを知る、調理

は六區と同様なり。

米 市 深川區冬木町
深川に在りては、靈岸の藪蕎麥と共に好一對たり、舊來の老舗にして、蕎麥通の爲に稱せらる。

布 屋 麻布區長坂町

布屋といはれ、或は人の知らざるを恐る、通俗更科といへば、遠く山間僻陬の地まで知れ渡りて、城南唯一の老舗たり、家の後に稻荷社あり、高稻荷といふ、更科の蕎麥はよけれど高稻荷森を睨むで二度とこんくとの狂歌あるを以ても、此家の有名なる知るべきのみ、昔は種物を隠がざりしが、今は此家の天麩羅蕎麥名代

となれり、天麩羅に用る海老は必らず伊勢海老にして、苟りにもせいまさき車海老等を用ゐず。

千 歳 京橋區疊町

南傳馬町の大通より西へ曲れる北側に在り、更料藪蕎麥等の躰裁に似ず、腰かけても食ふべき様輕便に設けたり、洋服扮装の紳士も入るべく車夫馬丁の如き者も入るべし、名物は種物にして、「あかめ」の味は頗る美なり。

関 麵 本所區押上町

柳島へ通ふべき押上の堤上にあり、茶蕎麥を以て有名なり、蕎麥通の賞翫する處たり。

高 砂 下谷區上野黒門町

廣小路にあり、小なる樽をなれど、氣の

利きたる家にして、數寄屋町同朋町の藝妓等能く此處に來る、名物は小烏蕎麥にして、鴨蕎麥などの美味なる恐らく比類なからむ。

第六十二 汁粉

小豆を磨りて餡となし、餅牛皮餅等を種にして造る、勿論甘味を尊ぶものなれば、上戸黨には向かざれど、婦女子の愛顧は一方ならず、然して汁粉屋にては必らず雜煮を併せ商ふ。

汁粉の品類は蕎麥と同じく數多けれど、普通は、鹽餡、小倉、白餡、薄茶汁粉、御膳等にして、紅梅、紅葉狩、雪月花、十二ヶ月、春の曙、井手の山吹等は、同

種類に多少の變化をなして、優美なる名稱を附せしに過ぎず。

雑煮にも御膳、玉子、衛生などの名稱あれど、凝り固つては餅となるの譬に漏れず、遂に茶碗盛の中へ餅の切れを入れたるが如きに至れり。

汁粉は大抵一杯三錢位より十錢内外、雑煮は四錢位より十二三錢位を以て普通とす、今其著名なるものを擧ぐんか。

- 梅園 日本橋區木原店
- 全 淺草區淺草公園
- 氷月 下谷區池乃端
- 岡野 全中根岸町
- 常盤 全廣小路
- 萩之 每 芝區芝口一丁目

新 日本橋區葎町

甘泉堂 全 住吉町

秋 本 淺草區淺草公園

松 邑 全

言 間 本所區向島須崎町

時 雨 庵 京橋區出雲町

太々 餅 芝區宮本町

十二ヶ 月 京橋區銀座通

若 松 全銀座四丁目

第六十三 鰻屋

鰻は何時の頃よりか盛んに世に行はれ、一般に人の嗜好に適するに至りたり、其蒲焼といへるは、鰻を開きて細き竹串を打ち、火に炙りて後味をつくるものなり、

其蒲焼の稱あるは、古へ鰻を丸の儘申差になしたるが、恰も蒲の穂に似たるが故に名づくといへど、今悉ふ可らず。

鰻は江戸前といひて、大川に於て獲せらるゝを尤も美味とて稱美す、沼鰻は鰻通の好まざる所なり。

鰻には、蒲焼及井の二種あり、井とは名の如く井に飯を盛り、蒲焼を其上に載せ、鰻の醬油をかけて蓋をなし、むらして客にすゝむるもの、最も一般に嗜好さる、

蒲焼の價は客の好みによりて一定の價格なけれど、普通一皿二十五錢より五十錢のものは食ふに足るべし井は上井にて卅錢前後、並井にて廿錢前後、其外は客の

好みと知るべし、鰻屋の誇る所は香の物と酒にして、蓋し蒲焼なるものは、焼立を稱美するが故に、客來りて註文をなすにあらざれば之を焼かず、故に其調進の間に、客は漬物の佳味なるものにて、酒を呑むの習慣とされるによるなるべし。東京の慣習として、盛夏土用の丑の日に之を食せば流汗目に入らずとて、家々必らず之を食す、其濫觴は昔神田川といへる鰻屋(今の神田川なり)の家道稍衰へたる時、其花客なる太田蜀山翁、戯れに筆を執りて、大なる紙に「明日土用丑の日」と書して、之を店際に掲げしむ、時恰も土用子の日なり主人其故を知らず、之を

蜀山に問ふ、蜀山答へて曰く、我も又其故を知らず、然れども汝家道の衰頹したるを歎ずるが故に、我之を挽回せしめんとして、斯くは謀りしなり、今此張札をなせば人之を怪しみて必らず汝の店に問ふべし、其折汝は店の者をして、土用の丑の日に鰻を食せば、流汗目に入らず、悪疫感染せず、これ古來の説なりと答へよと、主人大に喜ぶ、果せる哉、翌日は四方より來りて鰻を注文する者多く、之より家道爲に回復す、今に至るまで土用の丑の日には、家々必らず鰻を食するに至る、小事と雖も以て蜀山の奇才を知るべし、或はいふ蜀山にあらず、平賀源

内なりと、其孰れなるにもせよ、丑の日の由來は此の如きものなり。

大黒屋 京橋區靈岸島富島町
東京市中第一の家たり、往古より同業者中の牛耳を取りて、聲名市中に高し、調理の美なるはいふを待たず、味は稍辛き方にて、酒の酔なる漬物の佳なる、飯米の精選なる、實に鰻屋中の八百善といふべし、されば價も從つて高價にして、會席茶屋に至るよりも反つて廉ならざれども、此家の調理を食せざれば、又鰻を語る能はざるなり、家は靈岸島の東の袂にありて、構造も又古雅なり、貴紳の駕を枉ぐるに足る。

竹

葉 京橋區新富町
あさり河岸にあり、座敷の造作に結構を悉し、配膳の美を恣にする、鰻屋よりも割烹店に近似したり、舊家にして其名聲大黒屋と伯仲す、京橋區尾張町にも出店ありて、此處にては西洋料理風に鰻を調理すれど、到底本店の日本古有の雅趣あるに及ばず、本支店共に價格廉ならず。

和田平 日本橋區田所町

和田平の鰻は大黒屋に比すれば稍甘し、市中屈指の舊家にして、鰻通の喜ぶ所たり、竹葉、大黒屋、和田平の三軒を推して、桃林義を結べる獨漢の好義兄弟に比すべきか。

神田川 神田區靈所町

明神下に在る舊家なり、其神田川といへるは、神田川に近ければなるべし、以上の三軒につぎて、調理の好風味を以て著はる。

伊勢利 本郷區本郷三丁目

伊勢利は本郷區唯一の老舗にして、又美味なり、學生輩の顧客多く、漬物の美を以て鳴る。

大野屋 日本橋區登屋町

登屋町の目立ぬ路次の奥に在り、彼の鰻井なるものは、天保七年に始めて此家の主人が工夫したるものなりといふ、鰻鍋、鯨の泥鰻煮等又美味にして、頗る繁昌の

家たり。

柳川 日本橋區通三丁目式部小路柳川鍋といひて、人の嗜好する鍋鍋は此家の工夫に出でたるもの、由、蒲焼も美味にして、此邊にて第一の家たり。

前 川 淺草區駒形町

駒形の河岸にあり、他區の者は餘り知らざれども、調理の美なる事は、恐らく淺草第一なるべし。

奴 淺草區北田原町

古へは大道にて鰻の蒲焼を商ひたる家なりといふ、今は宏大なる構にして、單に鰻を供するのみならず、普通の料理さへ客の需めに應ず、家に浴室等ありて、實

に宛然たる料理店なり、此家には泥鰻汁なるものありて、毎朝市中に配達す。

丸 喜 日本橋區室町三丁目

浮世小路の鰻屋とて有名なり、鰻の白焼を自慢とす、蓋し鰻通の賞美する家なり。

喜 多 川 京橋區出雲町

會席料理も兼業すれど鰻の美味を以て稱せらる、三層樓の構造にして、官吏會社員などの、多人數にて會食するに適す。

狐 京橋區出雲町

狐鰻とてもと麻布四の橋際に在りたるもの、今は喜多川と同じく好箇の會席茶屋ともいふべく、單に鰻一方ならねば、大

いに鰻通の愛顧を失ひたれど、調理は舊によつて愈々美なり。

松 金 芝區金杉濱松町

芝濱に瀝みて建つ、新橋以南鰻屋の牛耳を執るもの、曾て某伯の甚だしく眷顧したりしより、名聲一時に高し。

餅 儀 淺草區山谷町

山谷の重箱といひて、都下に其名を藏かす、元來鰻の専門にあらず、鮎の泥鰻煮、鮎の甘露煮、鮎の生作りなど有名なり、市中の川魚通が態々足を此家に向ける者多し、殊に此家は東宮御所の御用をつとむ。

鮎 屋 長 南葛飾郡龜戸村

天神社の後に在りて舊家たり、太田南直翁の昔往々恕を枉げたりしより、翁の書に藏する夥だし、文晁の富士の畫に翁の贊したるものなど、最も逸品とすべし。

餅 林 南葛飾郡龜戸村

鮎屋長と相隣りて、龜戸の老舗たり、調理稍辛き方にして、通人の口に適す。

第六十四 鳥

鳥料理も又東京の一名物にして、東京人士の嗜む事實に甚だし、鳥肉には軍鶏、かしは、家鴨等あり、老人にはたき肉の柔きもの適すべく、所謂鳥通には雜物と稱して、血肝、砂肝或は皮、油身など

を最も旨しとて舌鼓うつ、凡て人すき
 の十八十色、強ちに團扇は擧げ難け
 れど、概して一般の需用反つて供給に過
 ぐるかと疑はる、代價は大抵牛肉の五割
 増と思はれ、さしたる過不及もあらざらん
 か、但し。

大 金 亭 淺草區馬道町
 舞 鶴 亭 芝區南金六町
 高 砂 日本橋區新右衛門町
 等の鳥料理の半會席は此限りにあらず、
 今上等鳥屋として有名なるものを擧げん
 に。

今 鳥 安 日本橋區米澤町
 朝 芝區芝口一丁目

沼 田 日本橋區木原店
 み き や 全
 鳥 又 下谷區上野元黒門町
 鳥 ぼ た ん 神田區連雀町
 鳥 増 神田區須田町
 金 田 淺草區馬道三丁目
 高 砂 全
 菊 水 日本橋區玄治店
 丸屋(坊主軍鶏) 本所區元町
 つ く し 日本橋區濱町
 す が の 屋 全藥研堀
 常 盤 淺草區同公園

以上は、數千軒の中に、最も著名なるも
 のを屈指したるに過ぎず。

一四四

一四五

第六十五 牛肉店

牛肉は維新後の流行にして、諸人舉つて
 滋養物を嗜好するより、其自然の趨勢と
 して、今日の隆盛を見るに至りたれども、
 又其價の易きと、其味の良好なるとは、大
 いに世人の愛顧を得たるによらざればあ
 らず。

牛肉店は、傍豚鳥野猪等の肉を隔ぎ、客
 をして其好む所について、自ら煮自ら鹽
 梅せしむ、これ客に取りては繁に似て反
 て簡なるより、中流以下の人士及學生間
 に於て、賞美する事猶大牢の肉の如し、
 牛肉店は客の需めによりて、間々一二の

牛肉店

西洋料理をも調理す。

今 清 日本區元大阪町
 腹町通にある繁昌の店にして、店頭常に
 供待の車を見る、此邊米穀取引所に近き
 を以て、米商人の就きて食ふ者多し、一
 日實に六七頭の肉を賣悉すといふ。

今 用 日本橋茅場町
 八丁堀の通りにして、石造の家なり、西
 洋料理をも兼ね、調理の鹽梅頗る佳なり
 京橋出雲町、神田旅籠町、本郷二丁目等
 今此處の支店なり。

今 文 神田區錦町
 小川町通りに在り、此邊學生多きを以て、
 廉價にして、食膳の多きを以て客を曳く、

一四五

評判大いに佳し。

中 川 神田淡路町

淡路町の角にあり、牛肉店中尤も古く、然して又尤も美味なり。

江 知 勝 本郷湯島切通上

西洋料理をも兼ね、器物清潔にして取扱親切なり、湯島六丁目、神田錦町、皆其支店なり。

豊 國 屋 本郷區龍岡町

庭園の閑雅なる、客室の清潔なる、蓋し都下牛肉店屈指の家たり、西洋料理の味も美にして、店頭送迎の客に忙がはし、切通阪下も同店なり。

三 河 屋 四谷區廻町十一丁目

一見料理店の如くして、方今山の手第一の家と稱す、肉また美にして、牛肉店中の巨擘たり。

平 野 淺草區千束町

吉原歸の客の爲に稱せらる、家屋の構造美麗にして、庭園雅致に富み、西洋料理には、別に洋室の設あり。

三 ツ 星 芝區飯倉四丁目

此邊隨一の肉店にして、野猪の肉は美味を以て有名なり、麻布宮下町は其支店にして、共に繁榮す。

黄 川 田 芝區二葉町

芝區内著名の家にして、味の美なる殆んど比類なし、芝邊の人士が晝餐晚餐等に

便なり。

吉 川 京橋區銀座一丁目

銀座通東側にあり、實に明治初年の開業にして、牛肉店中の老舗たり、支店は室町三丁目に在り。

河 合 京橋區南傳馬町

江州産の本場牛を用ひて、美味都下に比なし、宮内省の御用をも蒙る、此家の得色とする處は、鍋肉を客に供するには、一々ペタを以て煮たる上、始めて之を出すにあり。

い ろ は 芝區三田四國町

いろはは、其支店を豫め四十八軒に及ぼすを期すといふ、現在第十八支店までを

有す、市中一區としてそが支店のあらざるなく、廉價にして美味なり。

港 屋 本所區元町

三層の高樓川に流んで立つ、此家は牛肉の外に野獸の肉を鬻ぎて有名なり。

第六十六 旅人宿

市内旅人宿(客室二十五坪以上あらざれば營業するを得ざる規則なり)の總數は、無慮七百有餘戸にして、其宿料安きは金廿錢より、高きは金二圓五拾錢位なれども、其普通は金卅五錢より金一圓五拾錢位の間なり、又下宿(客室十坪以上あらざれば營業するを得ざる規則なり)を營

業となすものは、今日まで既に二千餘戸の多きあれ共、爾後益々増加の勢あり、其一ヶ月の宿料賄共にて金五圓より金拾五圓乃至三拾圓位までなり、其他木賃宿と稱するもの(客室等に制限なし)三百戸程あり、之は賄なしにて一泊の料大凡三錢より十錢、普通は四錢より五六錢なり、今其旅人宿中の重なるものを示せば左の如し。

麴町之部

相模屋 (麴町五丁目)(客室五十坪餘)六旅團の定宿をなす軍人客多し
三橋 (平川町四丁目)(客室五十坪餘)相模屋と同様なり

小林 (麴町八丁目)(客室五十一坪)商人旅人多し

帝國ホテル (内山下町)東京第一等の大旅館なり構造凡て西洋風にて建築方頗る横濱のグランドホテルに似たり其三階(下等)は旅客室二十六、外來客室四、廣間一、帽衣置所一、給仕人詰所一、便所四、二階は廣間一、奏樂室一、旅客室十二、外來客室八、給仕人詰所三、帽衣置所一、浴室二、便所四、階下は大食堂一時食堂一、新聞閱覽室一、喫煙室一、談話室一、旅客室九、外來客室三、荷物置所一、電信郵便取扱室一、帽衣置所一、

給仕人詰所三、浴室三、事務室二、便所四あり

神田之部

榎本館 (錦町三丁目)(客室百五十坪餘)紳士官吏多し
龜屋 (錦町三丁目)(客室五十六坪餘)諸國農家の東京見物其他訴訟事件等にて出京する客多し
大野屋 (錦町三丁目)(客室六十二坪餘)栃木、長野の定宿にて其他諸國の官吏の客多し
今井館 (錦町三丁目)(客室七十四坪)諸國の官吏商人多し
賓旅館 (錦町三丁目)(客室三十五坪餘)

千葉、三重、岩手、福岡、愛知、大阪等の定宿にて高等官陸軍々人多し

駒込之部

駒込館 (錦町二丁目)高等官豪農の客多し
春魁樓 (美土代町二丁目)(客室四十坪餘)山口縣の定宿にて其他諸國の旅客官多し
河内屋 (美土代町四丁目)(客室四十坪餘)京都、大阪、和歌山、兵庫、群馬、長野、千葉、茨城、福島、宮城の定宿なり
大泉 (連雀町)(客室二十九坪餘)埼玉、群馬、長野の定宿にて商人多し
加賀屋 (連雀町)(客室三十六坪餘)富山

縣の定宿にて商人の客多し
 萬代屋 (連雀町) (客室二十六坪餘) 岐阜、埼玉、群馬、茨城の定宿にて縣會議員政黨員等の客多し、
 武藏屋 (連雀町) (客室二十六坪餘) 商人及東京見物の客多し
 關根屋 (淡路町二丁目) (客室百五十坪餘三階) 福島、新潟、宮城の定宿にて官吏及農家の客多き旅館なり
 板垣 (猿樂町二丁目) (客室九十一坪餘) 官吏商人の客多し
 加藤 (北神保町) (客室八十六坪) 京都、大阪、長野、鹿児島、高知、島根、静岡、北海道、山梨、岐阜の定宿にて官吏の客

多し此邊にての旅館なり
 旭樓 (表神保町) (客室九十三坪) 諸國の官吏商人の客多し
 櫻田 (表神保町) (客室八十六坪) 官吏客多し
 森田屋 (南甲賀町) (客室九十三坪) 官吏及商人の客多し
 森田 (三崎町二丁目) (客室九十三坪) 栃木、新潟、茨城、長崎、埼玉、千葉、山形、神奈川の定宿にて官吏の客多し
 松本 (今川小路二丁目) (客室百三坪餘) 京都、大阪、千葉、宮城、新潟、兵庫、群馬、神奈川、熊本、廣島の定宿にて商人多し

萬屋 (橋本町二丁目) (客室五十坪七合) 伊勢參宮の客取扱所にして埼玉、群馬、栃木、茨城等の定宿なり
 中野 (下白壁町) (五十一坪七合五勺) 古より此地に於て營業し成田山一新講の定宿にて紳商官吏等の定宿あり
 日本橋之部
 荊豆屋 (馬喰町一丁目) (客室九十坪餘) 諸國商人の品物仕入の爲り出京する者の投宿多し
 伏見屋 (馬喰町二丁目) (客室六十坪) 長野、群馬、神奈川、栃木、福岡、静岡、愛知等の定宿にて商人の客多し

下總屋 (馬喰町一丁目) (客室五十二坪餘) 埼玉、福島、千葉地方の定宿にて其他は得意先よりの案内ある者に限る
 鍵屋 (馬喰町二丁目) (客室四十四坪) 諸國の商人客多し
 山城屋 (馬喰町二丁目) (客室七十坪) 福島、宮城、青森、新潟、静岡等の客多し
 榊屋 (馬喰町二丁目) (客室六十六坪) 栃木、滋賀、福島、山梨、長野、茨城、千葉邊の商人客多し
 會津屋 (馬喰町三丁目) (客室四十九坪) 福島、岩代、會津、若松、一の關、水澤、前澤邊の商人の定宿なり
 大坂屋 (馬喰町三丁目) (客室七十二坪)

諸國の旅人多し
 福島屋 (馬喰町三丁目) (客室五十六坪)
 千葉、茨城、栃木、埼玉、長野、神奈川、山梨、群馬、福島、宮城、山形の定宿なり
 梅屋 (馬喰町三丁目) (客室百十三坪) 諸國の仕入商人の客多し
 藤屋 (馬喰町四丁目) (客室二十六坪) 茨城、埼玉邊の定宿なり
 山田 (小傳馬町二丁目) (客室百四十坪)
 富山、岩手、山形、北海道、青森、神奈川、愛知、和歌山、長野、等の定宿なり
 荳屋 (小傳馬町三丁目) (客室二十八坪) 埼玉、栃木、山梨、福島、岩城、岩手、山形、千葉邊の定宿なり

近江屋 (大傳馬町二丁目) (客室七十四坪) 神奈川、宮城、三重邊の定宿なり
 上州屋 (鹽町) (客室五十六坪) 諸國の旅人商人の客多し
 駿河屋 (堀江町二丁目) (六十五坪) 滋賀、大阪、西京、神奈川の定宿なり
 静岡屋 (小舟町一丁目) (客室五十一坪) 静岡、埼玉邊の荷主客多し又貨物運送店も兼業なり
 小野屋 (小網町一丁目) (客室四十坪) 群馬、栃木、埼玉、長野、福島、千葉、大阪、愛知、滋賀等を重とし其他諸國の商人客あり
 島屋 (小網町二丁目) (客室三十四坪) 和

歌山、青森邊の定宿なり
 喜村屋 (小網町二丁目) (客室四十三坪) 栃木、群馬の定宿にて荷主客多し
 大阪屋 (小網町三丁目) (客室四十五坪) 川蒸涼上下の旅客多し
 井上屋 (蠣壳町二丁目) (客室四十三坪) 茨城邊の商人客多し
 上總屋 (新渡町) (客室四十八坪) 静岡、茨城、三重、宮城、新潟、千葉等の定宿なり
 玉屋 (富澤町) (客室六十一坪) 新潟、山形邊の商人客多し
 八幡屋 (新乗物町) (客室五十六坪) 新潟、長野、北海道、福島、山梨、大阪の定宿なり

木屋 (田所町) (客室六十九坪) 諸國の旅人多し
 杉本 (濱町二丁目) (客室五十七坪) 青森、福島邊の商人官吏客あり
 伏見屋 (本石町二丁目) (客室九十六坪) 越後邊の縮商の得意あり
 若荷屋 (本石町三丁目) (客室四十坪) 諸國商人の客多し
 島屋 (本石町四丁目) (客室三十坪) 諸國商家の客多し
 越十 (本石町四丁目) (客室五十坪) 諸國商家の客多し
 上總屋 (本石町四丁目) (客室五十坪) 諸國の仕入商人の客多し

越後屋 (本銀町四丁目) (客室百三十坪)
 府縣知事高等官及紳商等の客多し
 樋口屋 (本銀町三丁目) (客室六十坪) 諸
 國商人の客多し
 名倉屋 (室町三丁目) (客室八十坪) 樋口
 屋と略々同様なり
 桑島屋 (本銀町三丁目) (三十坪) 商家農
 家等の客多し
 島屋 (西河岸) (客室八十坪) 諸國紳商の
 投宿多し
 三河屋 (西河岸町) (客室三十坪) 官吏の
 投宿多し
 伊勢安 (檜物町) (客室八十坪) 府縣知事
 紳商の客多し

中屋 (檜物町) (客室四十坪) 商家の客多し
 島屋 (數寄屋町) (客室百二十坪) 府縣知
 事及紳商の客多し
 藤屋 (元大工町) (客室廿五坪) 商家の客
 多し
 大野屋 (通一丁目) (客室廿五坪) 諸國の
 商人多し
 西貝 (通三丁目) (客室三十坪) 諸國道者
 の客多し
 蓬萊屋 (通二丁目) (客室七十坪) 諸國商
 人多し
 京橋之部
 西本屋 (銀座一丁目) (客室七十坪) (三
 層樓の構なり) 客は政黨員商人等多し

中央旅館 (五郎兵衛町) (客室七十四坪)
 地方の官吏及商人の客多し
 伊東屋 (南傳馬町一丁目) (客室八十六
 坪) 中央旅館に同じ
 松本 (出雲町) (客室五十二坪) 各府縣の
 官吏及紳商等の客多し 奥座敷は三層樓に
 して特に清潔なり
 桃李館 (加賀町) (客室五十坪) 總て山
 城軒と同格なる好旅亭なり
 万屋 (木挽町三丁目) (客室二十坪) 府
 縣知事高等官巨商等の花客多し
 對山館 (山下町) (客室四十九坪) 府縣知
 事及高等官紳商政黨員等の客多し
 對鶴館 (元數寄屋町) (客室四十九坪) 餘

對山館と略々同格なり
 紅木屋 (宗十郎町) (客室四十五坪) 諸
 國の紳商及紳士の客多し
 厚生館 (木挽町二丁目) 上等客多し
 水明館 (木挽町三丁目) (客室三十一坪
 餘) 府縣知事及紳商等の客多し
 山下館 (山城町) (客室五十二坪) 府縣
 知事高等官紳商等の客多し
 朝日館 (桶町一番地) 地方の官吏紳商等
 の客多し
 都館 (山下町) (客室廿九坪) 府縣知事
 紳商等の客多し
 對城館 (西紺屋町) (客室二十七坪) 官
 吏及紳商の客多し

眞鶴屋 (富島町)(客室四十坪餘)諸國商人の客多し

芝、麻布之部

櫻郷館 (芝櫻田本郷町)(客室大小十四間)陸軍々人の定宿にて其他九州地方の紳士客多し狎み客に非ざれば謝絶す
蓬萊屋 (芝口二丁目)(客室大小十四間)横濱本町の支店にして官吏商人の客多し又郵船會社及鐵道等への客には乗込迄萬事世話をなす
聚星館 (芝口一丁目)(客室大小十間)諸縣の紳士紳商の客又縣知事等も車を任せらるゝ多し此家は西洋作の應接所室一室ありて客の隨意に外來人に對話するに供す

鶴屋 (芝口二丁目)(客室大小十四間)主人能く旅舎の本分を守り客の貴賤老若を問はず厚遇す地方高等官及紳商其他伊勢參宮同行者の客多し三層の樓あり之を上等室となす南は房總諸山西は富岳の眺望あり又銀座街の夜景は坐して弄すべく瀛車瀛船の取扱も丁寧になす
川崎屋 (芝口一丁目)(客室大小十二間)客種は大坂の當舖多し三層樓にて清潔なり瀛車瀛船の積込荷物は迅速に配達するを以て得意とす
田中屋 (芝口二丁目)(客室十三間)商人の客多し瀛船瀛車乗客及荷物の取扱もなす
紀伊國屋 (芝口三丁目)(客室十五間)佐

賀其他官吏商人の客又は伊勢參宮の客多し
雲來館 (櫻田本郷町)朝鮮人支那人の客多し

飯田館 (南佐久間町)(客室十六間)官吏客多く又神宮敎院神風講社神道本分局東京虎門敬信講の定宿にして伊勢參宮加入者の取扱もなす
小石川、本郷之部

三吉屋 (本郷五丁目)(客室五十七坪餘)群馬、埼玉、千葉、茨城の定宿にて客種は大學病院へ來る患者多し

伊勢屋 (本郷六丁目)(客室四十七坪)群馬、長野、埼玉、栃木、神奈川、静岡の定客其他は三吉屋に同じ

武藤屋 (本郷龍岡町)(客室六十坪餘)埼玉、神奈川、茨城、栃木の定宿にて大學病院へ來る客多し

龍岡樓 (本郷龍岡町)(客室百三十二坪餘)神奈川、群馬、長野、山梨、埼玉の定宿にて此邊の大旅館なり

山藤 (本郷湯島天神町)(客室凡百坪餘)知事及高等官の客多し此家表は小構なれども内部は清潔且風流にて特に十疊敷天井板は黒部杉を以て一枚張に見せたる如きは最も巧なり

下谷之部

山下館 (徒町)(客室九十坪)新築の四階屋にて東西南北眺望宜し浴室あり大阪名

古屋其他各縣の客多し
 山城屋 (上野廣小路町) 家屋構造は二階屋にして群馬、埼玉の客多し
 山城屋 (下谷町二丁目) (客室五十坪) 主人茶人故間取頗るよろし
 群玉舎 (車坂町) (客室六十四坪) 上州の客多し主人の對遇殊に宜し
 大米屋 (車坂町) (客室二十五坪) 三重縣の客多し
 井筒屋 (下谷町二丁目) (客室三十五坪 七合五勺) 二階屋にて美艶の家なり
 小松屋 (下谷町二丁目) (客室五十一坪 合七勺) 軍人官吏多し
 淺草之部

松坂屋 (材木町) 東京栗橋間の馬車切符を取扱ふ東京見物等の客多し此家は舊家にして三百年以前より營業し且つ元禄時代の書類等も多く藏すと云ふ
 丁子屋 (茅町) 諸縣の官吏商人等の客多し最も知事其他紳士等の泊するは淺草區にて此家なり故に客室も自ら二様に分れ表二階は普通商人等の泊り室となし奥座敷を高等官及紳士の室に供せり此家も亦舊家なるよし
 河内屋 (東仲町) (客室七十坪) 神風共立講及三都講の東京見物參詣の客多し
 小松屋 (駒形町) (客室六十坪) 埼玉群馬邊より東京見物に來る客多し又通運會社

の荷物をも取扱ふ
 和泉屋 (松清町) 本願寺講中の定宿にて東京見物の客多し
 和泉屋 (上平右衛門町) 新潟の官吏商人等の客多く又青森邊の客多し
 伊勢屋 (藏前片町) 諸國の農家東京見物の爲め出京せる客多し馬喰町の支店なり
 本所、深川、南葛飾之部
 植半 (隅田村梅若境内) (客室二百坪餘) 紳士通客の宿泊多し料理店の部を參觀すへし八百松 (水神) 隅田村 (客室二百坪餘) 紳士連の酔後歸るを厭ふ者江月に枕して金龍山の鐘の音に曉夢を破る者多し
 豊村樓 (小松川村) (客室四十坪) 料理を

兼業す千葉街道に當れる故旅客多し
 伏見屋 (小松川村) 旅人の客多し
 川甚 (金町村大字柴又) (客室二十五坪餘) 本業料理店にして下婢は凡て美なり客は多く商人なり
 若島屋 (本所區元町) (客室四十坪餘) 弘法大師參詣の客多し
 高木屋 (本所松代町) 材木荷主を花客とし他の客は大抵斷絶す
 新丸吉 (深川元大工町) (客室四十坪餘) 船問屋をかぬ弘法大師へ參詣の旅人多し
 第六十七 俗曲
 陽春白雪か、下里巴人か、郷聲郡歌とし

て却くるは、未だ共に睡るに足らざるなり、之を俗曲として賤しむも、俗曲必らずしも俗ならず、雅言反つて鄙猥なるあり、長唄の商品にして観劇の思ひある、淨瑠璃の壯嚴にして沈重なる、新内の替にして、歌澤の優しげなる、皆は清元の派手に渡りて、常盤津の野暮ならぬ、之を味へば俗中必らずしも雅なしとせんや、況んや俗曲の門に入り易くして堂に昇り難き、到底雅樂の比にあらざ、今俗曲の名手と聞えたる者を擧ぐれば

長唄

三絃 杵屋正次郎 三絃 杵屋六左衛門
三絃 岡安喜三郎 三絃 杵屋六三郎

三絃 松永鐵五郎 唄 松永 和楓
唄 芳村伊十郎 小鼓 寶山左衛門
唄 芳村伊四郎 小鼓 望月太左吉
太鼓 福原鶴三郎 太鼓 望月長三久
笛 住田又兵衛
義太夫
竹本祖太夫 竹本播磨太夫
竹本綾瀬太夫 竹本文字太夫
竹本高瀬太夫 竹本粗太夫
鶴澤 文藏(三絃) 鶴澤 豐藏(三絃)
豐澤 廣助(三絃) 鶴澤 市作(三絃)
鶴澤 安作(三絃)
都節(一中節と三ふ)
都一中 都 以中 都 一廣

菅野序遊

菅野九か

宇治繁文

河東節

山彦秀二郎

山彦 やす

山彦 ゑい

新内

鶴賀鴻賀齋

鶴賀若辰

富士松加賀太夫

富士松加賀吉

常盤津

常盤津 文中

常盤津 小文字太夫

常盤津 林中

岸 澤 式 佐

岸 澤 文字兵衛

岸 澤 巳 佐吉

岸 澤 仲 助

清元

清元 延壽太夫

清元 あえふ

清元 菊壽翁

清元 美喜太夫

清元 菊壽太夫

清元 靜太夫

清元 梅次郎

清元 徳兵衛

清元 小家内太夫

歌澤節(葉唄とさふ)

歌澤 寅右衛門(を)

歌澤 貞吉

歌澤 芝金

歌澤 芝滿太夫

歌澤 關太夫

第六十八 舞踊

踊は我國古來の技にして、殊に手踊りに至りては、一舉手一投足、悉く地唄の意味を表示せざるはなく、世界中尤も進歩したる遊藝の一種なり。

徳川氏入國以來、騎奢華美の風、靡然と

して江戸の天地を吹きまくりければ、此踊の如き遊戯は寝々として進化したり、されば其流派も数派に分れて、花柳あり藤間あり、西川あり、阪東あり、中村廣川水木松本巴等九派を以て尤も有名とす。

花柳派
花柳 壽助 花柳芳次郎 花柳 芳蔵
花柳 芳松 花柳勝次郎
藤間派
藤間勘右衛門 藤間 嘉舞八
藤間 金太郎
西川派
西川巳之助 西川勝之助

水木派
水木 歌仙
巴派
巴 駒治

其中阪東は分れて三津五郎派、彦三郎派となり、中村も又芝翫派、傳次郎派となる今劇場振附師の名手花柳壽輔の談話なるものを得たれば左に掲ぐ、(但し壽輔の断の儘にて敢て著者の作意を加へず)

振付の順序
江戸に芝居が出来ましたのは昔様が御承知の通り、徳川家御入國以來のこと、其當時は何の芝居でも役者自身が振付をしました、彼の鳴物ブッコケハ

(鞘當の鳴物)を作つた小畑小平杯の相手にして、皆自身が振付をしたもので、今の様に之を専業とする者はなかつたのであります、夫から後に藤間村の勘兵衛(即ち今の藤間勘右衛門の初代)とか、西川仙造(即ち今の西川扇造の初代)とか云ふ人々が出来て、専ら振付の相談役となりましたが、是れから振付専業と云ふものが出来て参りました、振付の順序を申せば、先づ作者と役者と相談の上で、或る狂言を作り、之を常盤津なり、清元なり、富本なり、長唄なり、各々其向の名人に節を付けさせ、然る後之を振付方に廻し、振付

方は又文句に依りて、爺、婆、娘、子供とそれ／＼適當の振を付け、初出来上りたる上も躰ひをすと云ふ順序になるのであります、之を芝居に演じて見せると、見物の方々は彼處が善いとか、此處が奇用だとか、何と云つて御贖めになります、其時は皆役者のみをお賞めに爲つて振付の事はオクビにも出して下さいます、誠に御の悪い役で、一生涯様の下の力持をして居るのであります。

「道成寺」の振付
併しこの振付と云ふ役は、随分六箇敷い役で、人の知らない苦勞とするもの